平成 30 年度　講座「丹波学」

# 今に息づく丹波の遺産

## ～ 室町・戦国社会から ～

（公財）兵庫丹波の森協会

丹波の森公苑

# 目　次


１　講座「丹波学」の開講にあたって　・・・　１

２　講義記録

**講座概要**　・・・　２

**第１回**

黒井城と福知山城　・・・　３

城郭談話会　会員　福島　克彦　氏

**第２回**

応仁・文明の乱と丹波の情勢　・・・１２

武庫川女子大学　准教授　古野　　貢　氏

**第３回**

松永久秀・長頼兄弟と戦国時代の丹波　・・・２７

天理大学　准教授　天野　忠幸　氏

**第４回**

南北朝期の丹波守護山名時氏・氏清　・・・４２

㈱歴史と文化の研究所代表取締役　渡邊　大門　氏

**第５回**

丹波の祇園祭－篠山市波々伯部神社の祭礼を事例として－　・・・５６

佛教大学　教授　八木　　透　氏

３　講師紹介　・・・６６

# １　講座「丹波学」の開講にあたって

## １　丹波の森宣言

兵庫県丹波地域は、県の中東部に位置する緑豊かな森のくにです。篠山市と丹波市からなり、阪神都市圏から 50～70㎞の近郊にありながら、森林面積が約 75%を占めています。昔ながらの田園風景や静かな環境が今も残され、加古川、武庫川、由良川の源流をなす母なる森の恵みは、良質な食糧の生産や自然環境の保全など重要な役割を担ってきました。また、京都、大阪、播磨、山陰などからの街道が交差する文化の十字路として、様々な文化が入り交じり、独特の文化を育んできました。

この丹波の自然と文化を守り生かした地域づくりを目指し、昭和 63 年８月、住民代表による 100 人委員会を組織して「丹波の森宣言」の起草し、同年９月の丹波の森 1000 人大会において、「丹波の森宣言」を採択しました。

**丹波の森宣言**

丹波の自然と文化は、現在及び将来にわたる住民共有の財産であって、これを維持発展させることは私たちに課せられた重大な責務です。

今、私たちはこの責務を強く自覚し、お互いに力を合わせ、自然や文化を大切にしながら、これらを生かした「丹波の森」づくりを次のように進めることを宣言します。

1　丹波の健全な発展をそこなうような自然破壊は行わず、森を大切に守り育てます。
2　丹波の自然景観を大切にし、花と緑の美しい地域づくりを進めます。
3　丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます。
4　丹波の素朴さと人情を大切にし、安らぎと活力に満ちた地域づくりを進めます。

「丹波の森宣言」は、丹波地域の全世帯、企業に配布され、丹波地域の約６割にあたる 21,616 世帯が同意署名を行いました。

## ２　講座「丹波学」の開設

講座「丹波学」は、「丹波の森宣言」の中でも、「丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます。」という宣言を具現化するために、平成８年から開設されています。

今年で 23 回目を迎える本講座は、単なる郷土史等の講座ではなく、丹波地域の伝統、文化、歴史、風俗、人物、地理、言語などを総合的に学ぶことを通して、丹波の資源や特性を生かした地域づくりに資することを目的とした地域学です。

## ３　平成 30 年度のテーマ

平成 30 年度は、テーマを「今に息づく丹波の遺産～室町・戦国社会から～」としました。

連綿と続く丹波の歴史の流れにおいて、現在に残っているものや続いているものは数多くあります。実際に遺跡や遺物が残っているもの、今では地名や地形にその名残を止めるだけのもの、形は無くとも風習や行事に残るものなどです。

講座「丹波学」において、それらについて話を聞き関連づけ意味づけを学ぶことで、丹波についてただ単に知っていることが、知識としてだけではなく有効に活用できる知恵へと変わることが期待できます。

その知恵が、丹波に対する新たな見方や考え方を生み出すきっかけとなり、地域の活性化や伝統文化を次代へ残すための原動力となることを願い、本講座を開設しました。

## ２　講義記録

### 講座概要

■ テーマ　　今に息づく丹波の遺産　～室町・戦国社会から～
■ 期　間　　平成３０年８月２５日（土）～１２月１５日（土）
■ 場　所　　丹波の森公苑　多目的ルーム
■ 日　程

| 開催日 | 学習テーマ | 講 師 等 |
|---|---|---|
| 平成 30 年<br>８月 25 日<br>（土） | 黒井城と福知山城 | 城郭談話会　会員<br>福島　克彦　氏 |
| ９月８日<br>（土） | 応仁・文明の乱と丹波の情勢 | 武庫川女子大学　准教授<br>古野　貢　氏 |
| 10 月 13 日<br>（土） | 松永久秀・長頼兄弟と戦国時代の丹波 | 天理大学　准教授<br>天野　忠幸　氏 |
| 11 月 24 日<br>（土） | 南北朝期の丹波守護山名時氏・氏清 | (株)歴史と文化の研究所代表取締役<br>渡邊　大門　氏 |
| 12 月 15 日<br>（土） | 丹波の祇園祭－篠山市波々伯部神社の祭礼を事例として－ | 佛教大学　教授<br>八木　透　氏 |

## 第１回
## 黒井城と福知山城

城郭談話会会員

福島　克彦

### はじめに

黒井城跡と福知山城跡は、奥丹波において、代表的な城跡である。前者は戦国、織豊時代、後者は織豊期から江戸時代と、時期は相違するが、ともに明智光秀が関わった城である。本稿では、両者の城の沿革と構造を紹介し、その上で天正 12 年（1584）における丹波国衆の最後の蜂起について取り上げてみたい。

### 黒井城と荻野氏・赤井氏

黒井城跡は、荻野氏、赤井氏の拠点的城郭である。標高 356 メートルの山城で、周囲の支峯や尾根に多くの曲輪を残している。丹波でも代表的な大規模山城遺構である。

従来、荻野氏は鎌倉時代後期、南北朝時代から、天田郡、氷上郡で活躍し、守護に対抗できるだけの勢力を持っていた。しかし、15 世紀に入ってから細川京兆家が守護になると、丹波国の政情は安定し、荻野氏は表面上現れなくなる。ところが、15 世紀後期から 16 世紀前半には再び表舞台に立つようになり、丹波北部をめぐる政争には必ず顔を出すようになった。一方、16 世紀前半には赤井氏も登場してくる。赤井氏は、氷上郡後屋の赤井野を本貫地とすると言われ、次第に春日盆地にも勢力を広げた。16 世紀中葉、赤井時家は自らの子息直正を荻野氏に猶子に送り込み、赤井・荻野氏の連合が進展した。この頃に黒井城の拡張も進展したものと思われる。永禄８年（1565）８月には、丹波守護代の内藤宗勝を敗死せしめた。

赤井時家の死後、これを事実上受け継いだのは荻野直正だった。彼は甥の幸家を後援し、氷上郡、天田郡に勢力を振るった。ちょうどその頃、天正３年（1575）12 月、信長から丹波攻略の命を受けた明智光秀は、荻野直正が籠る黒井城を攻撃した。ところが光秀に味方していた波多野秀治が裏切ったため、攻め手の光秀は敗走した。以後、光秀による丹波攻略は計画の変更を強いられた。直正は光秀との全面衝突を避けて、天正４年には信長、光秀に詫びを入れ、赦されている。信長も波多野、荻野の両方と戦うのは得策でないと判断したようである。しかし、直正が死ぬと、やはり赤井・荻野氏方は波多野氏と手を結び、再び信長・光秀に抵抗した。同７年６月には波多野秀治の八上城を落とされ、さらに、同年８月には赤井・荻野氏の籠る黒井城を陥落された。

### 黒井城の構造

黒井城の構造は、大きく二つに大別される。第一に、城山山頂部における本城部分であり、ほぼ石垣造りである。第二に城山周辺に点在する西の丸、千丈寺山、百間馬場といった周縁部の遺構である。これは土の城で、櫓台、土塁、曲輪、堀切などが残っている。前者のうち、石垣による拡張は明智光秀以降と考えられる。たとえば、光秀の重臣斎藤利三は、天正８年頃に当城に入ったと言われている。また、羽柴秀吉の部将堀尾吉晴も天正 10～11 年に入城している。

一方、黒井城の周縁部の土の城は、基本的に赤井・荻野氏段階のものと考えられる。特に西の丸は、櫓台や堀切、横堀が効果的に配置されている。千丈寺山砦も、黒井城を守るように西側に土塁を設けていた。したがって、荻野氏段階も、当初は城山山頂部に中心があったものと考えられる。したがって、黒井城跡は、戦国期の段階と織豊期の二つの時期があったと考えられる。大規模化しつつも、本城部分を防衛しようとする城郭構造は、波多野氏の八上城、内藤氏の八木城と共通するところである。

### 天正 12 年における芦田時直の蜂起

天正 10 年６月、本能寺の変を起こした光秀は、羽柴秀吉に山崎合戦で敗れ、殺害された。以後、丹波国は羽柴秀吉の管轄下となった。天正 11 年に柴田勝家を滅ぼした秀吉は、天正 12 年に徳川家康と小牧で対峙する。その際、家康は、織豊権力による統一過程の不満を持つ畿内、近国の土豪と手を結び、各地で蜂起させ、秀吉を揺さぶった。

そうした抵抗勢力のなかに、荻野直正の弟だった芦田時直がいた。彼は、直正の子息を取り立てることを家康に約束させ、「黒井古城」に籠城して、秀吉に抵抗した。時直らの一派は、他にも余田城(丹波市市島町)にも籠城しており、広域に「一揆」を起こしていた。当時、天田郡、あるいは何鹿郡にいたと思われる大槻久太郎も蜂起をしていたことがわかっている。家康は、秀吉を倒して上洛することを土豪たちに約束し、その抵抗意志が揺らがないよう画策した。

一方、秀吉方は亀山城から軍勢を派遣し黒井城に迫ると、蜂起した芦田勢は退却したと報じている。これに対して、時直の方としては予定通りの行動だったらしく、徳川方に対して、黒井城を引き払って余田城へ

籠城軍を集約する方針を立てたと説明している。相変わらず家康は、上洛の意思を強調し、時直らの蜂起の意志が途切れないよう努力している。

**福知山城をめぐる謀略**

この局面で、一時福知山城が史料上登場する。

当城は、もともと明智光秀が天正８年頃に新規で築き、光秀の娘婿明智秀満が城を守っていた。現在も天主台には墓石などの転用石材が見られるが、これは明智期のものだろうと推定されている。しかし、山崎合戦で光秀が敗れると、在城していた明智一族は滅ぼされている。

以後、前述したように丹波は秀吉の管轄下となり、福知山城には羽柴秀長が在城した。この天正 12 年の丹波国衆の蜂起の際も影響を受けたようである。

「羽柴秀吉書状写」『黄薇古簡集』(読み下し)
今度福地山城中、敵方より調略せしめるの処、両人才覚をもって、蘆田兵次、荻野平七の首を刎ね候段、尤も比類なき候、向後いよいよ油断あるべからず、恐々謹言

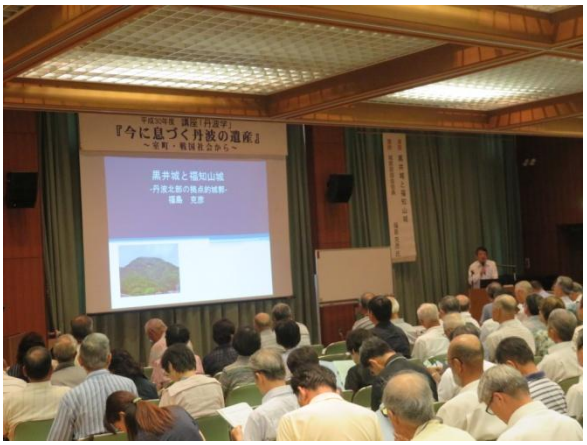
筑前守
六月十一日　　秀吉(花押)

杉山十右衛門尉殿
垣見平兵衛尉殿
これを進らせ候

これは、天正 12 年と想定できる史料であるが、「福知山城中」において「敵方」の「調略」が見られたが、秀吉方の杉山・垣見による「才覚」をもって、敵の芦田兵次、荻野平七の首を刎ねたという。この「荻野平七」は、芦田時直が家康方へ派遣した人物「平七」と同一人物と考えられる。何らかの段階で、時直方と丹波に在国する秀吉方が接触し、福知山城をめぐる謀略や駆け引きが見られたようである。結果としては、秀吉方が敵の首を刎ねており、芦田方の調略が失敗したと考えられる。関連史料は少ないため具体的な内容は不明であるが、この芦田時直の蜂起が、黒井城、余田城、福知山城と氷上郡、天田郡にまで広がったものと考えられる。なお、９月には秀吉の部将杉原家次が福知山城に入っている。

**おわりに**

以後も時直の抵抗は続き、11 月頃まで家康との文書のやりとりがみられた。しかし、その頃に入ると、家康と同盟していた織田信雄が秀吉と和睦の道を摸索するようになり、羽柴と徳川による全面対決という構図は回避されつつあった。にもかかわらず、家康は来春には上洛するという意思をちらつかせ、時直の戦闘意欲が落ちないよう指示していた。後に、芦田氏、赤井氏らは、氷上郡を引き払い、家康に拝謁し、その直属の家臣となっていく。この戦いの後、丹波国衆による地域に根差した蜂起は見られなくなった。中間層としての国衆が独立性を失うことになる。



# 黒井城と福知山城

丹波の森公園講演会　城郭談話会　福島　克彦

## はじめに

## 1 黒井城の構造

・荻野氏と赤井氏の連携
・荻野秋清の留堀城跡
・朝日城跡　複数の平地館跡、背後に山城遺構、荻野氏の政治的拠点
・黒井城跡　大規模山城　本城部、西ノ丸、千丈寺砦、龍ヶ鼻砦、
　西ノ丸における櫓台、土塁、横堀、

## 2 織豊期の黒井城

・高石垣、積足し、主郭と第2郭の間の虎口空間
・高石垣が南面のみ残る。
・黒井城下町　長方形街区、並行する福知山街道と京街道、街道の屈曲、

## 3 天正12年における芦田時直の戦い

### (1)芦田時直による蜂起と羽柴秀吉の対応

[史料1]其宛朱印状「加舎文書」(東大史影写)
書状披見候、仍黒井古城へ牢人共取上候処ニ、亀山留守候者相談、至八上表相越候処ニ、則逃散候由候、此間令陣寄在所可在之候間、能々相改可被申越候、将亦此表事、弥丈夫ニ申付候間、不可有気遣候、尚追々可申候、恐々謹言、

筑前守
卯月五日　　秀吉（朱印）

[史料2]羽柴秀吉書状「犬塚家文書」(『佐賀県史』史料集成二十巻)
書状令披見候、仍其国牢人共黒井之古城へ取上候之処、追払候之由尤候、尚以、牢人共入置候在々所々糺明候て、書付可相越候、弥無由断可申付候、将又、此表之儀堅固ニ申付候而、近日可納馬候、不可有気遣候、尚追々可申聞候、恐々謹言

卯月五日　　筑前守
　　秀吉（朱印）

**(2)徳川家康との関係**

[史料 3]徳川家康書状写「諸牒餘録後編」(『大日本史料』第十一編之七)

就其国之様子、使者被指越候、委細令得其意候、仰今度以才覚一揆等令蜂起、両城被持之由、無比類儀候、弥何分にも於有馳走者、信雄江申上、其方可任御存分候間、此度可被抽戦忠候、兼又此表模様、昨九日及合戦、池田勝入父子三人を始、森武蔵守・堀久太郎・長谷川藤五郎・三好孫七郎、其外大将分を十人余、以下之者一万余討干候、羽柴儀も通路留、不洩一人も追篭置候間、不移時日可根切事眼前之条、上洛不可有程候、尚使者可為演説候、恐々謹言

卯月十日　　御諱御書判

蘆田弥平兵衛尉殿

[史料 4]徳川家康書状写(『譜牒余録』『大日本史料』第十一編之七)

就当表出馬之儀、一章令被閲候、敵退散討洩候事無念候、将又其方各被相談、可被及行之由祝著候、無程可為上洛候之間、可被属存意候、恐々謹言、

五月三日　　御諱御判

大槻久太郎殿

[史料 5]酒井忠次書状写(『譜牒余録』『大日本史料』第十一編之七)

御礼本望存候、仍当表出馬被申候、及合戦、二万余討果候、依之敵無正躰、一昨朔日退散申候、其表各被仰談、御行肝要至極候、於家康無沙汰被存間敷候、恐々謹言

酒井左衛門

五月三日　　忠次判

大槻久太郎殿　御報

[史料 6]本多忠勝書状写(『譜牒余録』『大日本史料』第十一編之七)

尚々、先度も書状相届申候、御報申候、御報申候間、定参著たるへく候、

弥平兵被仰談、可然御才覚専肝候、

就家康出馬之儀、遠路飛脚被差越候、及披露、委細以直談被申候、将又其元各被相談、可被及行之祝著被申候、種々調略之儀共候間、上洛不可有程候、弥無油断被遂御忠節候ハヽ、其元可属御存分候事候、期後音之時候、恐々謹言、

本多平八郎

五月三日　　忠勝判

大槻久太郎殿　御返報

[史料 7]徳川家康書状写(『譜諜余録』『大日本史料』第十一編之七)
追而令啓述、仍其方自前々被相抱本領之儀者不及沙汰、新地之事茂被手懸次第可任覚悟之条、弥可被抽忠節候、委細者相含使者候、恐々謹言、

五月十四日　　御諱御書判

蘆田彌平兵衛尉殿

**(3)黒井城から撤退**

[史料 8]本多忠勝書状写(『譜諜余録』『大日本史料』第十一編之七)

猶々、其表之儀承、一段丈夫ニ被仰付候段、拙者一人之様ニ令満足候、兵頭此地ニ可有逗留之由、被仰候得共、先御帰候へと申、かへし進之申候、重而御吉左右可申入候、

内々其元之儀無心元被存候折節、御大儀ニ而、兵頭・平七被差越候、様子具被承、一段祝著被申、

①一久留井(黒井)被為引取、余田御堅固被仰付候由、尤之儀候、
②一其御国之儀、御存分之通、具ニ被得其意候事、
③一御知行方、是茂何分ニも其方次第被申候事、
④一其国之承、知行被望候共、余人ニハ可相替候間、貴所別条有間敷候事、
⑤一御兵粮之儀、少茂無沙汰被申間敷候、御使者如御存、拙者簇元遥相帰、手先ニ有事候間、只今不申不調候、軈而自是可申調候、
⑥一其方御一人被成御行之儀、御手柄ニ被存候事、
⑦一悪右(荻野直正)御息御取立被成候由、是も第一尤候儀之事、
⑧一其国御かつさ衆之儀、悉々披見ニ入候、何も御走廻尤之由候、何様ニも疎略被申間敷候事、
⑨一右之通、以直書被申入候事、
⑩一此表之儀、去一日ニ筑前犬山表迄引入候事、
⑪一只今之敵陣取之儀、濃州境目おうら・三柳と申所ニ陳取候事、
⑫一敵国自方々申様計略数多御座候、八幡者偽にて無御座候事、
⑬一此上追而存分之儀可御心安候、不及申候へ共、弥其表堅固被仰付、無御由断様ニ専一候、委曲彼両人ニ申渡候間不能具候、恐々謹言、

五月十六日　　忠勝書判

蘆田彌平兵衛尉殿

**4 羽柴権力による丹波制圧**

**(1)福知山城(「福地山」)における蘆田氏、荻野氏の殺害**

[史料 9]杉山十右衛門尉他宛書状写『黄薇古簡集』東大史騰写本
今度福地山城中従敵方令調略之処、両人以才覚、蘆田兵次・荻野平七刎首候段、

尤無比類候、向後弥不可有油断、恐々謹言、

筑前守

六月十一日　　秀吉（花押影）

杉山十右衛門尉殿

垣見平兵衛尉殿

進之候

**(2)福知山城中の八幡神勧請**

[史料 10]『兼見卿記』九月三日条

丹州福地山之城中ニ八幡勧請在之、他所へ遷申度之由云、杉原七郎左衛門在城云々、城中之鎮守幸之義也、何も為守護神可然之由申聞、又云、当分之社壇不浄之所也、城中之清キ所へ迂申度、何も丹州へ罷下、彼奉行衆申聞、進而可申入之由申、罷帰了、左京助取次之、最前兵庫助取次之、一日ニ老母令死去、仍左京助申之也、

[史料 11] 徳川家康書状写(「諸牒餘録後編」『大日本史料』第十一編之七)

遠境之処使者被差越之儀、令祝着候、殊其元無御由断被遂才覚之由、本望之至候、来春者必可令上洛候間、委曲期面之時候、恐々謹言、

十一月三日　　御諱御書判

蘆田彌平兵衛尉殿

**5 福知山城の構造**

明智光秀、秀満の拠点的城郭

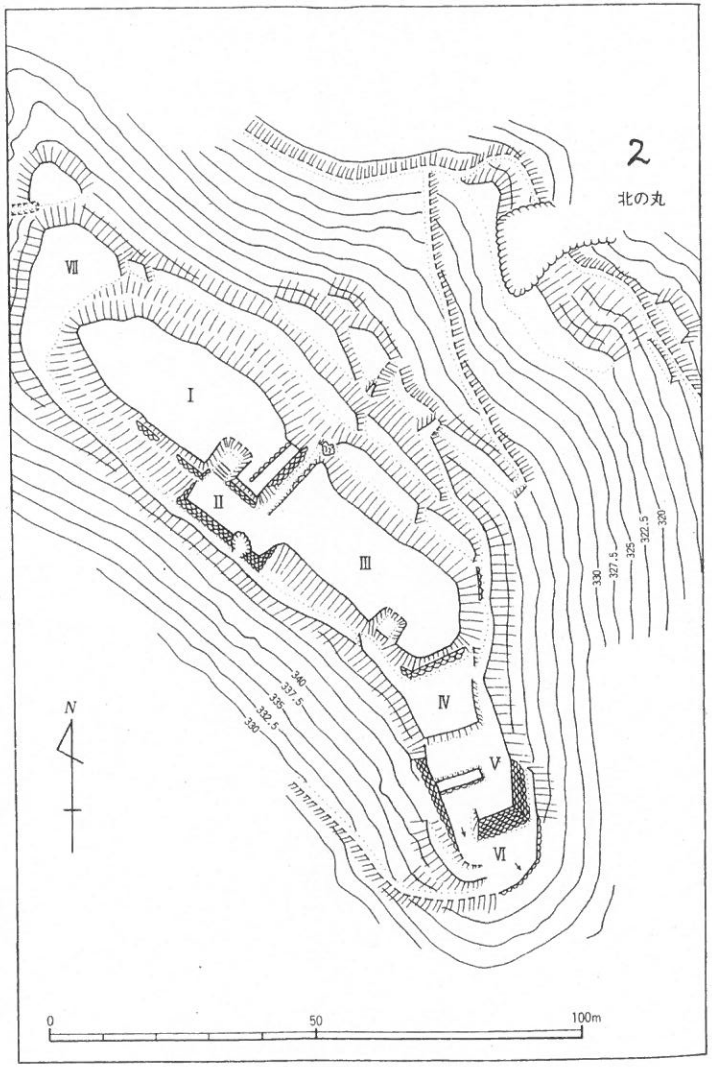
山崎合戦の直後、羽柴秀長が入る。後に杉原家次が入る。

小野木氏の後、江戸時代からは有馬氏

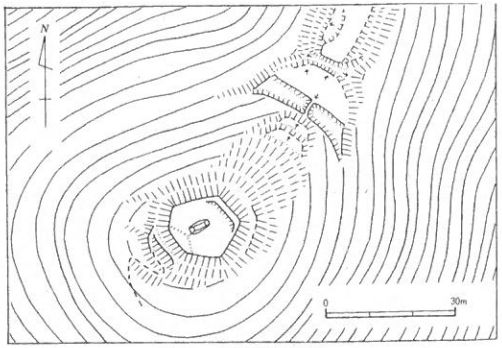
**おわりに**

1．城山山頂部　2．北の丸　3．三段曲輪　4．太鼓の段　5．石踏の段
6．西の丸　7．千丈寺砦　8．兵主神社西砦　9．龍ヶ鼻砦　10．百間馬場
11．東出丸　12．多田砦　13．的場砦　14．東山砦

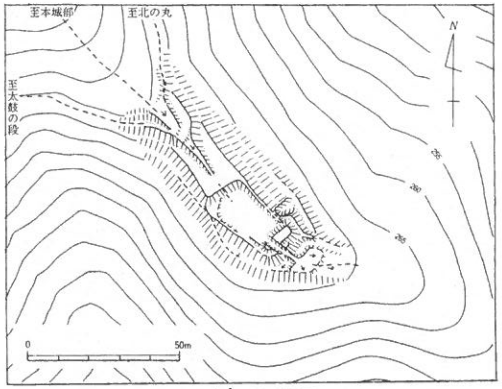
A　黒井城各遺構分布図



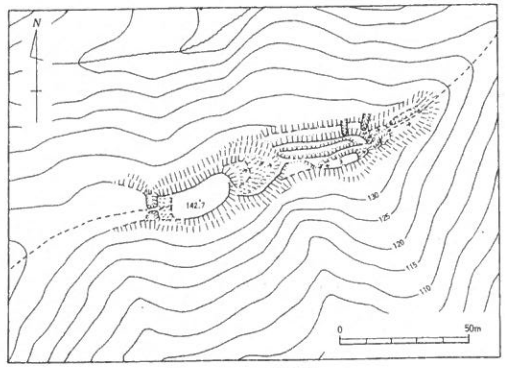

1 黒井城城山山頂部



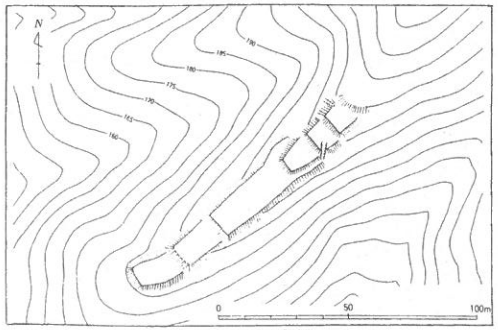

8　兵主神社西砦縄張図



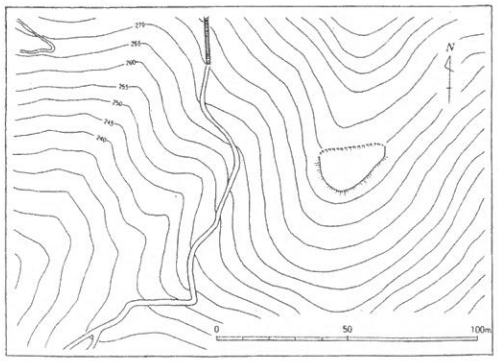

11　東出丸縄張図



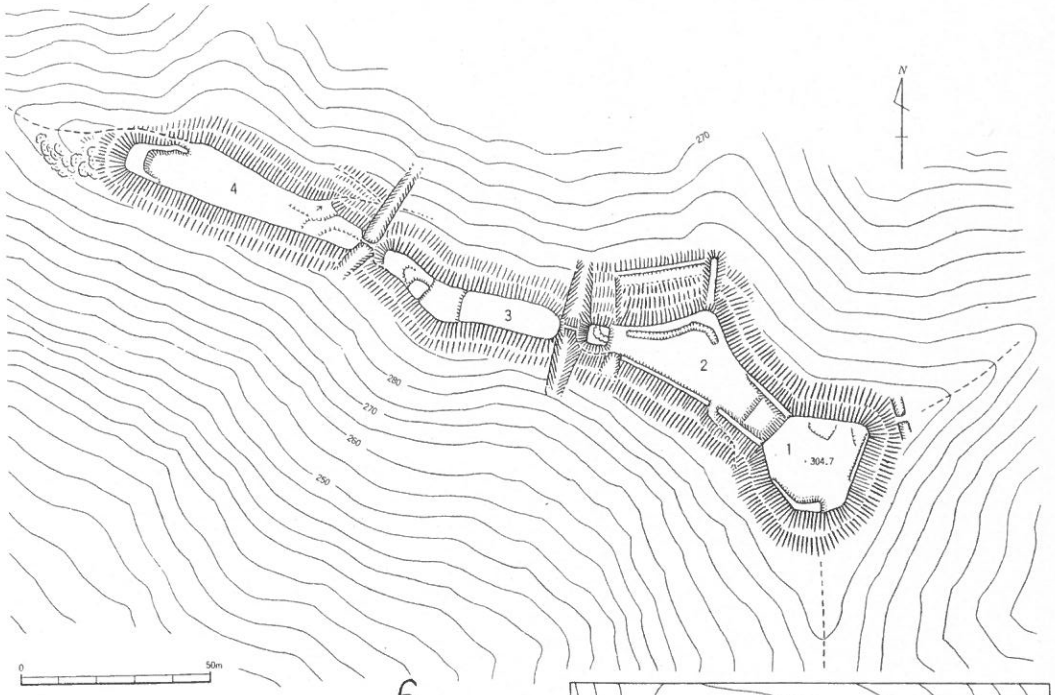

12　多田砦縄張図



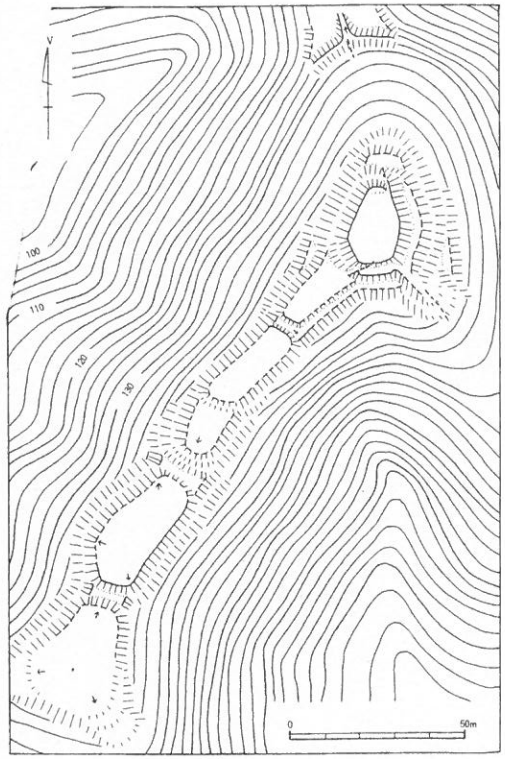

3　三段曲輪縄張図



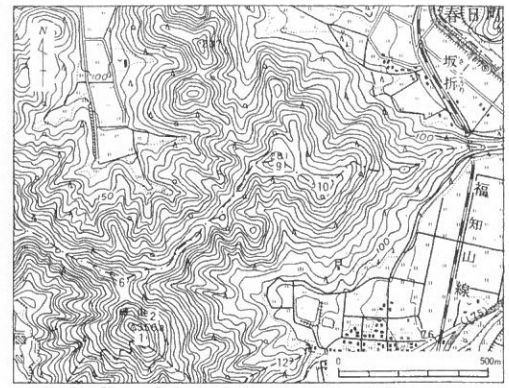

4　太鼓の段縄張図




6 西ノ丸縄張図

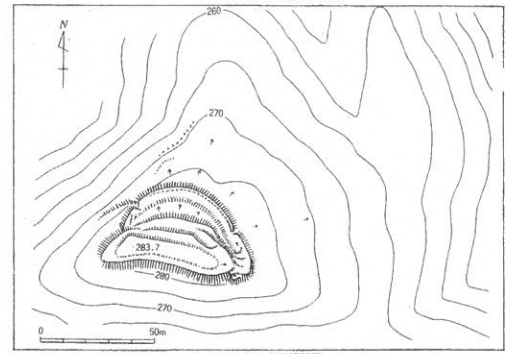



14 東山砦縄張図

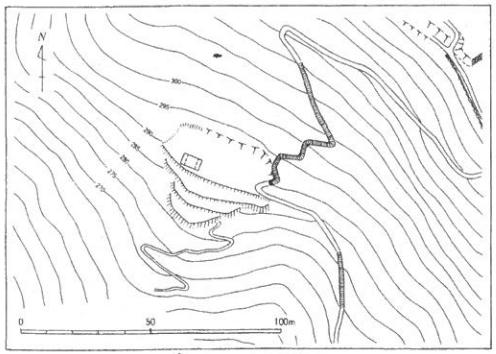



1．城山山頂部　2．北の丸　6．西の丸　9．船ヶ谷砦　10．百間馬場　12．多田野

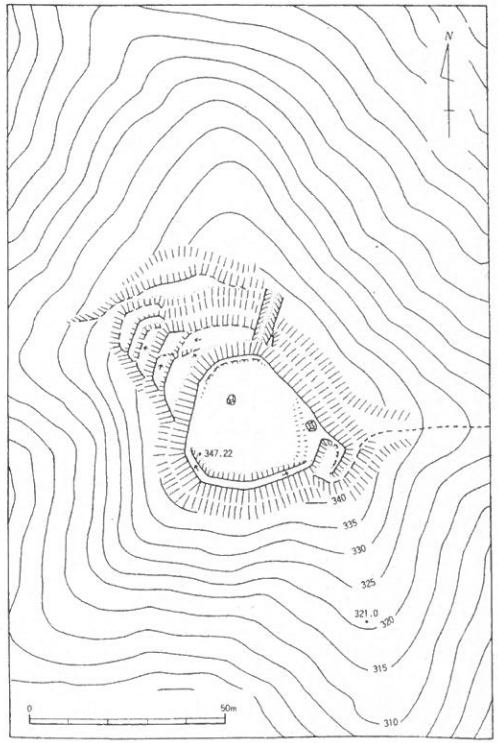
北東尾根地区遺構分布図



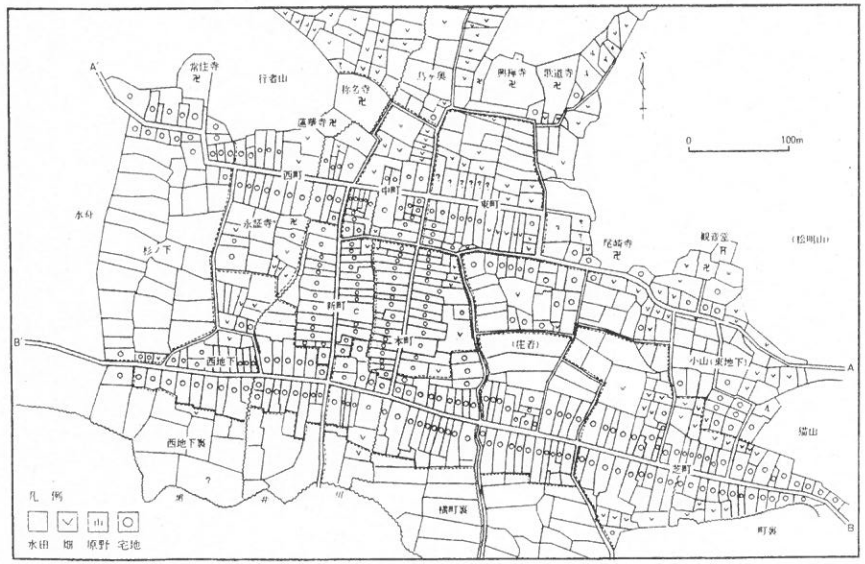

9 龍ヶ谷砦縄張図



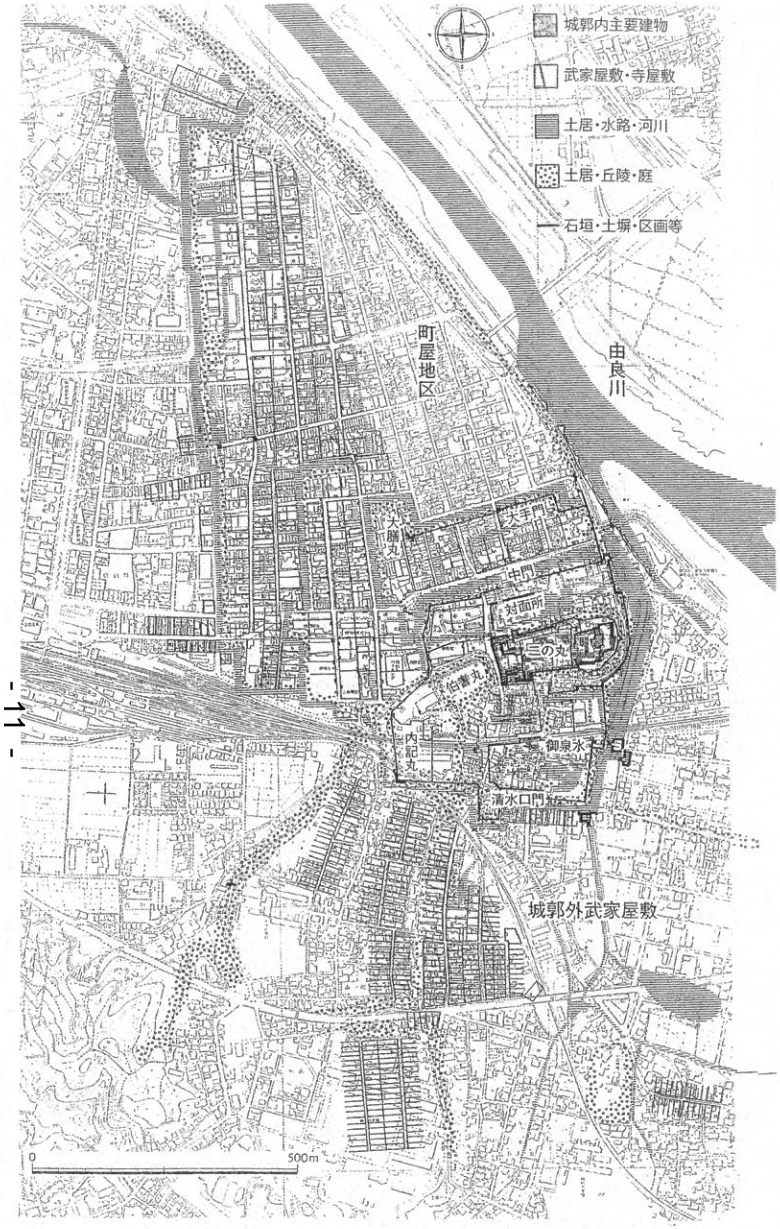

5 石踏の段縄張図



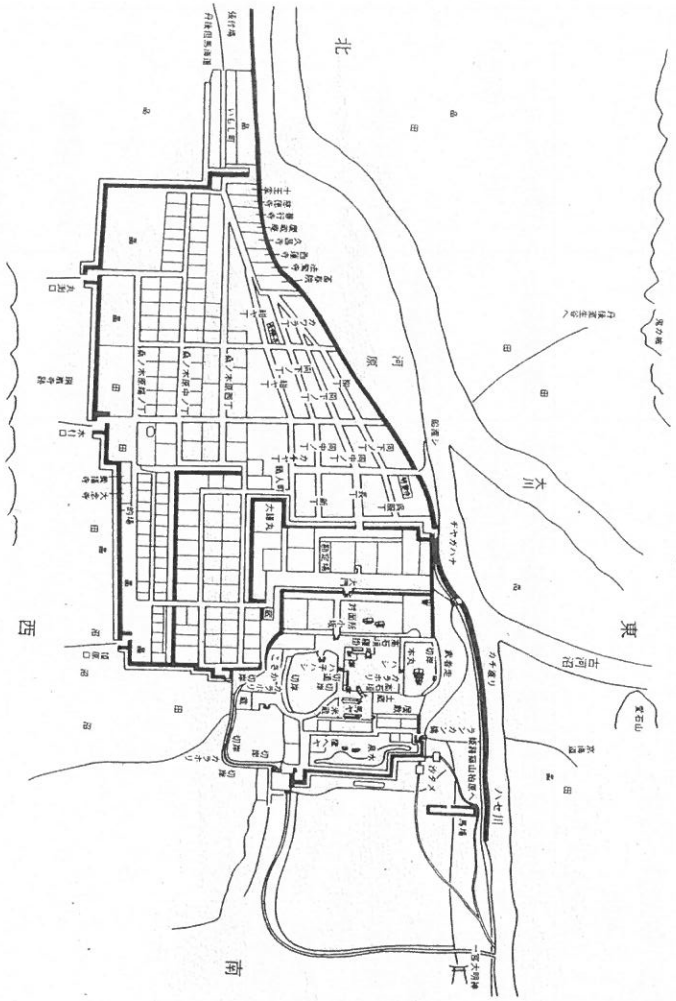

7 千丈寺砦縄張図



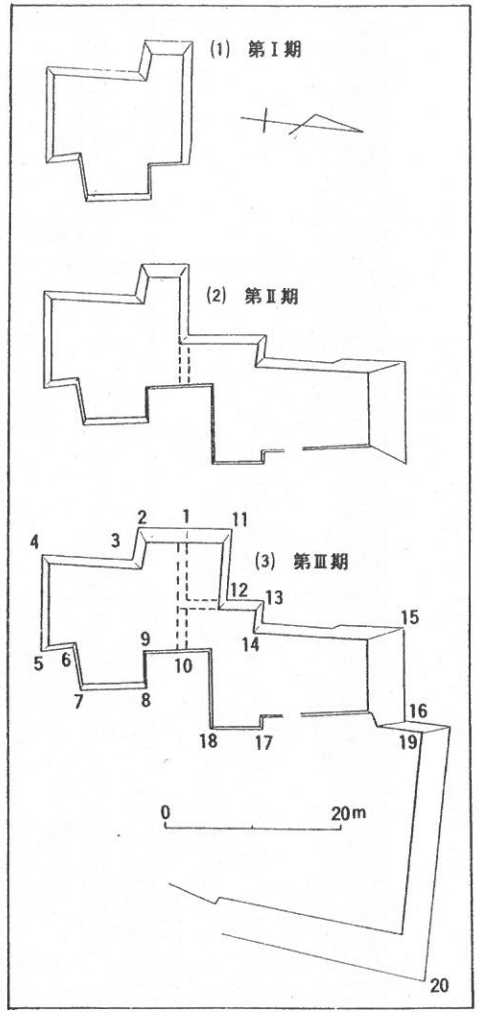

B 黒井村（織豊期黒井城下町）地籍図



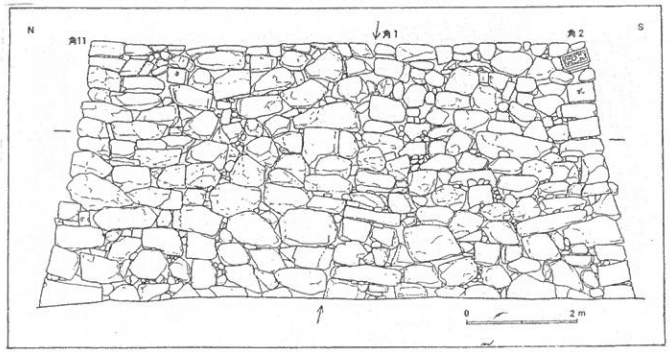

C 福知山城跡全体図（S=1/10,000） 福知山市教育委員会提供




D 丹波国福知山城図 （国会図書館）より作製




E 天守台変遷図




F 天守台石垣正面図（角11ー1ー2部分）

第２回
## 応仁・文明の乱と丹波の情勢

武庫川女子大学准教授

古野　貢

### はじめに

本日は、「応仁・文明の乱と丹波の情勢」というタイトルでお話させていただく。丹波は、戦国時代、室町時代の頃、日本社会全体にとって非常に重要な地域であった。当該期において首都は京都であり、その京都周辺の丹波などの地域は、現代でいうところの首都圏にあたる。だから、丹波で起こった事柄が、日本全国に影響することになることが多い。今日は、その契機となりうるような応仁・文明の乱を切り口として、丹波という地域の在り方、情勢の特性についてまとめてみたいと思う。応仁・文明の乱と丹波の情勢とは、結構大きな話だが、概ね二つの話をしようと思う。まず、応仁・文明の乱の概略について簡単に触れる。次に、丹波という国・地域の情勢は、応仁・文明の乱に深く関わってくる。したがって戦争の指導者、戦争・戦闘の対象者、あるいは戦争そのものについて、丹波ならではの状況を具体的に見ていく。応仁・文明の乱は、応仁元年(1467)に始まり、文明９年（1477）に終結した。およそ 11 年間にわたって繰り広げられた、日本の歴史上最大級の内乱である。この内乱後に立ち現れてくる丹波特有のあり方について確認していく。

### １　応仁・文明の乱について

#### 合戦につながる前提・合戦以前の状況

まず、応仁・文明の乱について確認していきたい。応仁・文明の乱について教科書的に学ぶとなかなか捉えどころがない。1477 年に終結したとされているが、ではどちらが勝ったのかというと、あまり明示されていない。おおよそ日本社会が、室町時代という時代から戦国時代に変わっていったという説明がされていることが多いのではないか。現在の研究の蓄積により、この乱が戦国時代の契機のひとつになったとは言えるが、その後の経過に評価が変わってきている。この頃から室町幕府が滅亡したという言い方もされるが、応仁・文明の乱のおよそ１世紀後の永禄 11 年（1568）、織田信長が足利義昭なる人物とともに上洛した。義昭はその後、室町将軍第 15 代目の将軍に就任するので、応仁の乱から信長上洛までの１世紀の間、室町幕府は存続していたということになり、この１世紀間を考えていく必要がある。おおよそ畿内一円で戦争が続くことになるが、その契機が、応仁・文明の乱ともいえる。教科書的には、足利尊氏が初代将軍となり、３代義満が北山文化をつくった。６代義教が暗殺されて、８代義政が東山文化をつくったという話が説明された後に、いきなり戦国時代になってしまう。政治的、経済的な問題について具体的、個別的な事例に触れることなくいきなり戦国時代とされる。それがここ 20 年くらい室町時代の地域的、経済的、武士の問題などについて研究が飛躍的に進んできた。そのうえで室町時代の特徴として、室町将軍の社会や政権における権力の占める割合が必ずしも高くないことがあげられる。むしろ将軍を支える守護の存在感が大きい。これは合議制とも将軍と守護の連合政権とも評価される。丹波や摂津など、国ごとに守護が配置され、将軍との連合政権が形成される。たとえば丹波国の守護は、丹波国の政治的、経済的、軍事的な問題などを全部取り扱う。それに加えて「閣僚」として、中央政府（幕府）における外交、安全保障、全国的な税金の問題などを相談する。全国的な問題を取り扱うことになると、利害関係が生じてくる。

そうしたなか、15 世紀の中頃ぐらいに応仁・文明の乱の前提が生じてくる。６代足利義教は、将軍専制を志向し、周辺諸勢力に対して介入を行う。その最たるものが守護の家督への介入であった。複数の守護家督が改替されたのち、嘉吉元年（1441）、先手を打った播磨国守護赤松満祐は、義教を自邸に招いて開催した宴中に暗殺した。スキャンダラスで政治的な大事件である。赤松氏擁護の空気もあったが、赤松氏は守護職をはく奪された。新たに任命された７代義勝は早世した。その後を継いだ８代義政は、時の将軍（政権トップ）の求心力が段々低下するなかで就任した人物で、文化人としての能力は極めて高いものの、政治家としての能力にはやや疑問符が付く将軍というイメージがある。当初男児に恵まれなかった義政は、後継者として実弟の浄土寺門跡義尋に将軍職を譲って引退を画策する。義尋は、義政の重ねての依頼を受けて還俗し、義視となった。しかし義視の還俗と前後して義政に後継者が生まれる（義尚）。妻は日野富子である。この結果、弟義視、息義尚のいずれを将軍後継者とするかの争いの可能性が出てくる。

また畠山氏と斯波氏など、他の守護家でも家督争いが生じた。この状況下、細川勝元と山名持豊（宗全）に支持が集まるようになった。当初二人は協調していたが、将軍家、および各守護の家督争いの当事者たちが細川勝元と山名宗全それぞれに与して派閥のような

ものが形成される。これが幕府内での主導権争いにつながり、さらに戦争につながる緊張関係となったのが文正元年（1466）ということになる。この緊張関係の中で、口火を切ったのが畠山氏の争いである。

**応仁・文明の乱の展開**

文正元年の暮れ、上洛した畠山義就は、畠山政長との戦いの準備を整えることになった。畠山氏の家督をめぐる争いである。明けて文正２年（1467）の３月、改元されて応仁元年となった。同年５月、京都御霊神社で両軍がぶつかった。この争いが東西両陣営の戦闘に飛び火をし、全国に戦闘が広がっていくという形になってくる。当初は、京都を中心とする戦闘だったのだけども、それがそれぞれの地域に飛び火をする。畠山氏や斯波氏、それに山名氏や細川氏らは、中央政府（幕府）で閣僚的な立場であるが、一方で各国をおさえている地方行政官でもある。その地方行政官の支配下における場所での主導権争いが起る。争いが京都から各地に拡大し、戦闘が長引くことになる。

文明４年（1472）、この年、細川勝元と山名宗全との間で和議交渉が行われたが、締結には及ばなかった。同年、勝元は、後継者に政元を指名し、宗全の娘と結婚して得た子息を後継者にしなかった。このことにより、両者には大きな溝が生じ、本格的に手切れということになった。翌文明５年、この年に山名宗全、細川勝元が相次いで亡くなった。それまで東西両軍をそれぞれ束ねていたトップが、いずれも不在となった。結果残った者は東軍方か西軍方かではなく、むしろ自分たちの利害関係だけで動き始めることになった。文明６年（1474）には山名氏と細川氏との間に和議が成立し、戦闘は終わる方向に向かっていく。しかし時間がかかり、和睦が成立したのは文明９年（1477）である。一方畠山氏などは和睦とは無関係に河内などで戦争を継続している。戦国時代と呼ばれる混乱した状況は継続している。

**応仁・文明の乱の特徴**

戦闘は、東軍方細川方の優勢で終わったと考えられる。乱後の室町幕府では山名氏の勢力がほぼ排除され、細川政元が管領に就任して幕政をリードしていくからである。また、守護など正規軍に限らず、地方の様々な勢力を取り込むような形で行われたこと、足軽、軍備装備を持てない者を取り込みながら戦闘が拡大したのがこの戦争の特徴と考えられる。もうひとつは守護の在国の問題である。室町幕府では、守護は在京が原則であった。それが各地で戦闘が頻発すると、京都からコントロールしづらくなる。よって実際に地元に帰って在国し、直接支配を行う必要性が生じてきた。こうしたあり方が、戦国時代に各地域の大名たちが成長していく契機になると考えられる。ここで、丹波にも繋がることをあげれば、東軍方主将の細川氏はほぼ在京する。その理由は、細川氏の分国の多くが京都に隣接しているためである。京都周辺が地元といえる。在京して幕府を主導しつつ、近隣の自らの支配領域に目配りをするというのが、15 世紀の終わりがけから 16 世紀にかけての細川氏の状況といえる。

## ２　当該期丹波の情勢

**丹波守護細川氏について**

細川氏が保持している分国は多い。惣領家が保持しているのが、摂津国、丹波国、四国の讃岐国、それから土佐国や伊予国の東半分などである。それ以外に、阿波国、和泉国、淡路国、備中国なども細川氏一族が守護分国として保持している。また、京都を取り囲む形で丹波を押さえているのも大きい。京都に所在する中央政権に対する発言力、影響力が絶大であることも見て取れる。この細川氏の惣領家が「京兆家」である。京兆家は丹波国の守護も務めている。この京兆家を中心にまとまって動くのが細川氏の特徴といえる。応仁・文明の乱において、畠山氏は東軍方にも西軍方にも一族が二つに分かれて戦い合っている。他の守護もそうである。一方細川氏は、一族すべてが東軍方であった。西軍方は一切いない。少なくとも表面上は、丹波や摂津、和泉といった大阪湾の一番つきあたりに位置している国々をおさえることを一族一体となって行っていたといえる。

**丹波国と細川氏権力**

こうしたあり方を可能にしたのは、いろいろ理由が考えられる。京兆家（惣領家）の求心力の高さに加え、惣領や代表者を支える有力家臣団勢力の果たした役割が非常に大きい。彼らは内衆などと呼ばれることが多い。細川氏の守護分国は多く、内衆はさまざまな国から動員されていた。内衆を動員した理由のひとつに、応仁・文明の乱がある。文明５年（1473）に細川勝元が死亡した際、家督を継いだ細川政元は７歳。幼い当主を擁する細川氏にとっては非常事態である。この状況を支える人々として、各国の有力者からピックアップされたのが内衆であった。当主や家来衆が一体となって応仁・文明の乱を乗り越えていったのが、細川氏の特徴と考えられる。

では、丹波においてはどうか。全体として見れば、応仁・文明の乱の際に東軍としてまとまって活動しているので、表面的には丹波国の中における内乱のようなものは起っていないと一応考えられるが、実際はどうだったのか。「守護代の系譜」から確認しておく。

守護代とは文字通り守護の代官である。守護の在京

が原則であった段階に、守護が不在の国において政治的・経済的・軍事的な対応を行う存在である。丹波においては、永享３年（1431）に守護代香西元資が更迭された。「守護代香西政道以外正体無き間」（『満済准后日記』同年 7/24 条）とある。「正体無き間」というのは、少し政治的によろしくない、行政的にやっていることが出鱈目だということを表現している。この香西元資に代わり、「丹波守護代に内藤備前入道を為すべし」（同）ということになり、内藤氏が丹波守護代に就くことになる。この内藤氏がこののち長きに渡り、丹波の有力な存在として活躍することになる。例えば嘉吉元年（1441）、宝徳４年（1452）など 15 世紀の中頃以降、丹波国内における税金の徴収などを積極的に行っている。こうした動向は、応仁・文明の乱の間においても行われていた。しかし、そうした内藤氏の動向に対して、丹波国内勢力が全て納得していたのかというとそうでもなかった。応仁・文明の乱が終結後の文明 11 年（1479）以降顕在化する。

内藤氏は、文明 11 年に一宮氏父子と対立する。内藤氏と一宮氏の対立に加え、文明 15 年（1483）には上原元秀が出現し、明応６年（1497）には内藤元貞が見いだせる。15 世紀の後半から 16 世紀にかけて、内衆、家臣団といわれる諸勢力の争いが顕在化してくる。ただし、他国の応仁・文明の乱のように守護を含んだ国内の内乱ではなく、丹波国内における内衆、家来衆達の主導権争いといえる。

**細川政元拉致事件**

文明 11 年（1479）12 月頃、丹波守護代内藤氏が、丹波国内に勢力を持つ一宮氏に対して押妨する。領地に押し入っての狼藉行為である。この行為に対し、一宮氏は京都に所在する細川政元（丹波守護を兼ねる）に対して訴えた。しかし政元も内衆たちも黙殺した。黙殺された一宮氏は、これへの対応として細川政元を拉致したのである。一宮氏は、内藤氏の更迭、自身の領地の復元を求め、実現しないなら政元の殺害、もしくは政元からの当主改替を主張した。この事態に内藤氏は、他の内衆らと連携し、一宮氏を攻撃して討ち取ったうえで政元の奪還に成功した。これが細川政元拉致事件の概要である。以下史料に沿って動向を確認する（史料①～⑭参照）。

①細川政元が 12 月３日に急に丹波に下向した。一宮大輔が、野遊の途中に政元を拉致して連行した。これは、内藤氏以下一宮氏との対立が原因である。同３日、「申刻細河九郎俄逐電云々、被官人所行云々、但未知是非之儀云々、言語道断事也、一族所従等馳走東西云々、」とあり、一宮氏が政元を拉致して自身の主張を遂げることを狙っている。③４日、「細川九郎、一宮宮内大夫取之下向丹波了」、「是去年一宮党二人其外人済々、為内藤之沙汰切腹了」とあり、一宮氏は内藤氏を切腹させるためにこの訴えをしたとしている。またこの主張が容れられないなら、別人を細川氏の当主にすべきとしている。⑤⑥一宮氏以下を丹波に引き込んだ後、内藤氏の一族、内衆の有力者安富氏、一宮氏の別の一族衆らが協力して一宮父子を討つ。丹波に関所を設置し一宮氏が管理していたところを内藤氏が勝手に盗ったとも記されている。⑦２月 22 日、丹波国内の諸所が炎上し、国中錯乱となっている。⑧３月 23 日、一宮父子が討たれた。⑨３月 24 日、細川政元が上洛するとの情報。⑩３月 26 日、「晴、今日細川九郎自丹波国上洛、被官一宮備後計略盗出所捕置」とあり、合戦して一宮父子の首をとった。政元は無事帰洛をした。

一宮父子は、細川政元を拉致した際、主張が通らなければ別人を当主とするとした。政元と細川氏家督について考えてみる。政元は、幼時に応仁・文明の乱と家督相続、その後の混乱を体験している。各国守護の下国、将軍権威の低下など、幕府を中心とする安定した政治運営が困難な状況であった。これへの対応のひとつとして、公武合体、つまり武士である細川氏や足利氏と公家や朝廷と一体となったスケールの大きな政権を構想した。父勝元からも期待された聡明な人物だったとされる。一方、当時の感覚としては珍しく妻帯をしない。また修験道に凝っている。長く、いわば変人として評価されてきたが、最近は再評価されてきている。妻帯についても、公家から養子をとるための策ともいえるし、修験に凝ったとされるのも、他国・他地域との連絡・連携のための手段ともいえる。一宮氏に拉致された際、別の家督者を立てるとの言説があった。政元は妻帯していないので実子はおらず、養子を３人とった。前関白九条政基の息澄之、阿波守護細川義春の息澄元、京兆家の分家野州家の高国である。先述した政権構想、および細川家家中の一体化を模索してのことと考えられるが、複数の後継者候補が存在すると揉める原因となってしまう。畠山氏や斯波氏が家督相続をめぐって揉めたことが応仁・文明の乱の要因となったが、政元の代に同様の状況となり、内衆ら家臣団を巻き込みながら、15 世紀末から 16 世紀前半にかけて後継者争いに終始する時期が続く。細川政元の政権構想は受け入れられず、その後の畿内の混乱を招くことになる。丹波に話を戻すと、応仁・文明の乱の頃には、丹波国をはじめ細川氏が関係する諸国は安定していたともいえる。戦後、地元の家臣団、内衆である一宮氏や内藤氏の争いを契機に、守護の後継者争いも加わって内乱状態になってくる。一宮氏と内藤氏の争いだけ、あるいは応仁・文明の乱だけにフォーカス

すると、ローカルな話題、あるいは丹波とはあまり関係のない話で終わってしまう。しかし、もう少し視野を広げ、時代の可能性も加味してみると、丹波での争いは単にローカルな争いではなく、むしろその後の地方の争い、戦国時代に突入してくる前段階という大きな役割・意味を持っていると考えられる。

**まとめ**

丹波の場合、応仁・文明の乱は、他国とは異なって東西両陣営の対立という構図ではなかった。その後の勢力の争いが、16 世紀段階の細川氏内部の抗争に連続し、戦国時代に繋がっていくと考えられる。

争いごというものが、丹波だけで終わるのではなく、その後の畿内地域、あるいは日本全国の争いというものに繋がっていくという見取り図をもって、応仁・文明の乱と丹波の情勢というものを考えてみた。以上で私の話を終わりにしたい。

丹波の森公苑「丹波学」講座

# 「応仁・文明の乱と丹波の情勢」

20180908　古野　貢

## はじめに

１，応仁・文明の乱

応仁元年（1467）～文明 9 年（1477）

室町幕府第 8 代将軍足利義政の後継など、複数の要因で勃発

東軍（主将：細川勝元）×西軍（主将：山名宗全）　→ほぼ全国に戦線拡大

室町幕府の衰退、地方勢力の台頭、首都京都の焼亡　…「戦国時代」へ

２，丹波の情勢

丹波国ならではの状況　…丹波守護細川氏の分国

丹波守護細川氏（＝京兆家（細川惣領家））内の展開

応仁・文明の乱後、中央政界を主導する細川氏　→ 16 世紀畿内政治史へ直結

## １，応仁・文明の乱について

### (1) 合戦につながる前提

・室町幕府の特質：将軍専制ではなく、守護による合議制（将軍・守護の連合政権）

・将軍の権力基盤の脆弱さ　義満・義教は例外

・武家の家督相続方式の未整備　…家督継承をめぐる内紛

### (2) 合戦以前の状況

・南北朝内乱終結後、義満のころ、守護が将軍を推戴する有力守護連合体：確立

・嘉吉元年（1441）、嘉吉の変で赤松満祐、将軍義教殺害　→義勝（早世）　→義政

→将軍権力の後退　※義政の個性：政治家としての能力？　文化◎

長禄 3 年（1459）～寛正 2 年（1461）の飢饉でも対処せず

・義政、後継者なしを理由に、将軍職を浄土寺門跡義尋に譲って隠居を企図

→ 29 歳では後継男子誕生の可能性ありとして固辞　→義政起請文　→還俗

義尋　→義視（細川勝元の後見）

・細川勝元と山名宗全　…当初は協調

長禄 2 年（1458）、赤松氏再興（宗全：嘉吉の乱鎮圧＝再興反対⇔勝元：再興主導）

寛正 6 年（1465）、義政・日野富子夫婦に男児（義尚）誕生　→富子、宗全に接近し、義尚の将軍就位を画策

→将軍家の家督争いに幕府有力守護の細川・山名両氏がそれぞれの陣営の主将

幕府に属する守護がいずれかに属する　→全国を二分する戦闘に

・畠山氏の家督相続争い

畠山持国後継：弟持富を養子としていたが、永享 9 年（1437）義就誕生により、持富を廃嫡、義就を家督（義政承認）　⇔守護代神保・遊佐氏反対：持国の甥弥三郎擁立を主張（持富、

宝徳 4 年（1452）死亡）　→神保誅殺、弥三郎・政長：勝元・宗全の元へ逃れ、家臣団の支持　→持国隠居、義就京都追放、弥三郎を家督

享徳 3 年（1454)、弥三郎らを保護したとして勝元が義政に叱責、反発した宗全、但馬下向　→義就上洛、義就が再度畠山氏家督継承者

享徳 4 年（1455)、持国死亡・義就家督継承　→「上意」と称して国内で弾圧、義政の勘気、長禄 2 年（1458）宗全赦免（義就派)、長禄 3 年（1459）弥三郎赦免、後死亡　→政長擁立、寛正元年（1460)、政長畠山氏家督、義就追放も抗戦

寛正 4 年（1463)、大赦により義就・斯波義敏ら赦免

・斯波氏の家督相続争い

文正元年（1466)、義政、斯波氏家督を義廉から義敏に　…進言した伊勢貞親らを追放（細川・山名協力）　→家督義廉に戻る

### (3) 応仁・文明の乱の展開

・文正元年（1466）12 月、義就上洛、陣取

文正 2 年（1467）正月、義政、政長（管領）・勝元に断りなく室町第に義就を招く

管領第への将軍御成中止　…義政、義就の畠山氏惣領を承認

義政、義就の政長への攻撃を認める、宗全、勝元・政長追放を迫るも却下

1/18 政長、自邸を焼き、上御霊社に布陣、義就と戦闘（御霊合戦）

・御霊合戦後、勝元、自身の分国の兵を京都へ、3/5 改元（文正→応仁）

5 月、赤松政則：播磨侵攻、武田信賢ら：一色義直侵攻、斯波義敏：越前侵攻

5/26、上京の戦い：一色義直邸襲撃・放火　…勝元、政長に呼びかけ、室町第を押さえ、将軍取り込む、今出川の自邸に本陣

⇔宗全、評定、五辻通大宮東に本陣、管領斯波義廉

→東軍：細川氏（畿内周辺の分国）　⇔　西軍：山名氏：統率の取りきれない軍勢

一条大宮の細川勝久邸付近で戦闘：百万遍の仏殿・革堂放火　→決着つかず（5/27）

～火災：船岡山～二条通

5/28、義政、両軍に和睦命令（勝元非難、義就河内下向、伊勢貞親上洛など独自）

6/3、勝元要請により、将軍牙旗が東軍（東軍＝官軍）　→義視に西軍攻撃させる、赤松政則、一条大宮で山名教之破る

義政降伏勧告（→西軍方：斯波義廉ら）　…東軍優勢

6/14 大和古市胤栄、6/19 畠山政国（紀伊)、8/23 周防から大内政弘・伊予河野通春とともに上洛…西軍方勢力回復、大内政弘：船岡山、義就・朝倉孝景：武田勢を破る、義政の河内下向命令に従わず戦い継続、～東軍劣勢

・応仁 2 年（1468）3/17、北大路烏丸で大内政弘×毛利豊元・小早川熙平、5/2 細川成之×斯波義廉、5/8 勝元×宗全、8/1 勝元×義就　→戦闘は洛外へ

9/22、足利義視、東軍に帰陣、義政、義視と対立した伊勢貞親の復職、義視に近い有馬元家を殺害　…義尚擁立へ（勝元も同調）　→義視、再度出家し比叡山へ

11/23、西軍、比叡山から義視を迎え、「新将軍」　…幕府の体裁

・大内政弘の軍事力で山城：ほぼ西軍方に制圧　→膠着状態

・文明 3 年（1471）5/21、斯波義廉重臣朝倉孝景、越前守護職補任をうけ、東軍に寝

返る　→東軍方決定的に有利

・文明 4 年（1472)、勝元と宗全の間で和議交渉　…宗全と対立する赤松政則の抵抗
勝元、実子（宗全外孫）の政元を擁立、

・文明 5 年（1473）3/18 宗全、5/11 勝元死亡、12/19 義政、義尚に将軍職譲り、隠居

・文明 6 年（1474）4/3、山名政豊と細川政元の間に和議

・文明 7 年（1475）12 月、義視、義政に恭順

・文明 9 年（1477）9/22、義就、河内国下向、11/11 大内政弘撤収・帰国
→西軍解体、京都での戦闘終結。義視、美濃へ下向、11/20「天下静謐」宴

※…その後も戦い続ける畠山政長×義就

### (4) 応仁・文明の乱の特徴

・11 年間の長期間継続（中央→地方)、結果が曖昧（一応東軍方勝利？）

・山城などを中心に、国人・地域住民の結集　→国一揆

・戦闘が正規軍だけではなく、足軽を活用

・この乱によって「戦国時代」との認識　⇔　明応政変？

・乱によって守護在京原則が崩れる　→畿内に細川氏、地方に諸勢力
→細川氏による幕府機能の代替、諸勢力による「戦国大名」化

・京都の復興　…進みづらい（守護不在）
祇園祭（本来は疫病平癒）：町衆による復興との理解は？

## 2，当該期丹波の情勢

### (1) 丹波守護細川氏について

・室町幕府将軍足利氏につながる

・鎌倉幕府討伐、南北朝期、室町期を通じて足利氏・室町幕府に属す

・室町幕府管領、守護　…室町幕府－守護体制を支える

・一族内の構成と権力構造、支配体制の連動　→細川氏の特質
同族が多くの家に分かれる　…南朝方・北朝方
→北朝方（足利尊氏ら）～：中世後期細川氏

京兆家（摂津国・**丹波国**・讃岐国・土佐国・伊予国（一部））
- 典厩家（摂津国内の一部）
- 野州家（備中国内の一部）
- 阿波守護家（阿波国）
- 和泉守護家（和泉国）
- 備中守護家（備中国）
- 淡路守護家（淡路国）

①同族連合体制　→他守護との対抗、一族の勢力維持　…幕府－守護体制での位置
「宿老会議」　→幕政運営　…守護職、検断沙汰　→幕府内部での主導権争い
将軍、守護等の後継者争い　…足利義視×義尚、畠山持富×義就、斯波氏、六角氏…　→応仁文明の乱
※後継者争いに被官の意向　…在地勢力（被官）と支配権力との関係

②「京兆家－内衆体制」

応仁文明の乱中、細川勝元死亡　→息政元後継（7 歳）　…細川氏危機的状況

→同族連合の強化　＋京兆家内衆による細川氏一族結集の強化

※内衆：主人に近侍する被官。京兆家と被官関係、庶流守護家に派遣され、守護代、郡代、荘園代官、都市代官、諸種奉行などを務める。細川頼之上洛時、被官化した西国武士が多い。自らの本拠地が細川氏分国内、いくつかの家に分かれ、別々の庶流守護家で機能。奉行人、評定衆、非評定衆、非譜代衆に分類

守護同族　＋被官レベルでも強固に結合　→他守護との対抗上、優位な基盤

→応仁・文明の乱時の丹波国の情勢を規定（⇔細川氏分国特有の情勢）

**(2) 丹波国と細川氏権力**

・細川氏以前の丹波守護

南北朝期：おおむね仁木氏と山名氏による争奪

何鹿・天田 2 郡と、桑田・多紀・船井・氷上 4 郡とに分割して複数守護時も

貞和 2 年（1346）、山名時氏以降、一国単位で守護

守護代：仁木氏守護時：荻野氏、山名氏守護時：小林氏　…守護職変更により守護代も交替　→南北朝期の不安定な政治状況下、有力な在地国人を守護代

・明徳 2 年（1391）、山名氏清、明徳の乱で敗れ、没落　→山名分国は各守護へ配分

**丹波国守護職　→細川氏**

・「明徳二年十二月廿八日山名奥州氏清打死、同三年正月四日後闕国共被仰付大名（中略）、丹波国細川右京大夫頼元」（『大乗院寺社雑事記』応永 32 年（1425）奥書）

※細川氏（京兆家）：永徳年間（1381 ～ 84）に摂津国一部守護職獲得　～ 15 世紀中葉にかけて有馬郡を除く摂津国全域守護職獲得

**→摂津国＋丹波国守護職：幕府体制の経済・情報・流通等の面で最有力となる基盤**

**西国より瀬戸内・日本海両側を経て京都を目指す文物・情報・軍勢・人員が通過　＝京都への西の入口を押さえる　→京兆家当主：丹波国守護職を保持**

・守護代の系譜

明徳 3 年（1392）、小笠原成明（守護：頼元）　…鎌倉期、阿波守護

応永 8 年（1404）、細川頼益（小笠原氏、又守護代：船井・桑田・多紀郡）

応永 21 年（1414）、香西常健（守護：満元、応永 4 年（1397）～）　…讃岐国人

応永 32 年（1425）、香西元資（多紀・何鹿郡）…大山荘人夫、波々伯部保公事免除等

永享 3 年（1431）、元資更迭（「右京大夫申丹波守護代事、申入処此間守護代香西政道以外無正体間、可切諫由被仰了」（『満済准后日記』同年 7/24 条））

→内藤備前入道（「丹波守護代可為内藤備前入道」（『満済准后日記』同年 7/24 条））

…雀部荘・桑田神戸田遵行、篠村荘惣追捕使職安堵等

嘉吉 3 年（1443）、内藤之貞　…多紀郡大芋社沙汰付、内裏段銭京済、大山荘人夫役・役夫工米免除、弓削・豊富・瓦屋・吾雀・六人部各荘園への守護役免除遵行等

宝徳 4 年（1452）、内藤元貞　…大山荘御所造作段銭京済、安国寺勧進別銭催促、大芋社渡付、桑田郡吉富荘内神吉村遵行等

文明 11 年（1479）、丹波国内で一宮宮内父子と内藤元対立貞　…一宮氏へ宛行の

闕所地を内藤氏側が押領　→対応として一宮父子、丹波守護（京兆家）細川政元を拉致、その後誅伐される（**→ (3)**）　⇔内藤元貞、文明 14 年（1482）まで在任

文明 15 年（1483）、上原元秀　…氷上郡御油新荘安堵遵行、船井郡 11 ヶ村闕所地返付、丹波国一揆討伐「各郡代被相談可被討罰」（『北野社家日記』延徳元年 11/28 条））

明応 2 年（1493）、上原元秀、長塩弥六との刃傷で落命　→守護代：賢家（元秀父）が代行

明応 4 年（1495）、上原賢家没落（「上原豊前守没落東坂本」（『大乗院寺社雑事記』8/17 条））　→「細川自丹波国上洛、守護代事内藤ニ返給了」（『同』8/24 条）

上原氏没落の理由：「去十四日夜相撲ニテ京兆馬廻衆今井与上原豊前被官人有確執事、（中略）今井依宗益寄子訴京兆間、上原豊前子共内可生涯之由頻責伏云々、仍丹州辺没落」（『後法興院政家記』）　→内衆間の対立が想起

明応 6 年（1497）、内藤元貞　…桑田郡八田荘内並河村安堵等

永正 2 年（1505）、内藤貞正　…船井郡和知下荘宛行、安国寺検断課役免除等

※当該期、細川京兆家は内紛状況　⇔丹波守護代：内藤氏

永正 17 年（1520）、内藤国貞　…船井 11 ヶ村棟別銭免除等

天文 3 年（1534）以降、幕府→国貞の文書なし　…細川氏内紛、国貞八木城入城

→幕府、細川氏から距離、守護代層など地域権力が台頭

天文 18 年（1549）、三好長慶、摂津江口にて細川晴元を破り、権力化

天文 22 年（1533）、内藤国貞、八木城落城により死亡

→以後、松永久秀弟長頼が丹波支配

永禄 8 年（1565）、荻野忠正らにより長頼討伐、三好氏権力、丹波より駆逐

→南北朝期：戦況などに応じた頻繁な守護改替　…守護家未固定：仁木氏・山名氏

→細川氏丹波守護～：京兆家内衆が守護代（細川氏分国支配方針）　…南北朝期守護代の荻野氏ら外れる（内衆にもならない）　→丹波有力国人、それぞれの勢力圏、守護細川氏権力から相対的に独立した関係　…京兆家内紛に連動、丹波国内与力勢力として存在感

内衆を守護代に登用（⇔国人不登用、細川氏他分国と同様）

15 世紀中葉～：「京兆家－内衆体制」：同族の一体化を指向

→ 15 世紀段階：分国内で他守護権力との対抗がない分、細川氏権力内部での在地諸勢力による勢力（主導権）争い

16 世紀：地域権力の自立化、守護細川氏の相対化、他国勢力との連携

⇔丹波国内での細川氏の守護権浸透　…均一ではない

→幕府体制のもとでの細川氏の分国支配構造を相対化する側面

### (3) 細川政元拉致事件

・経緯（→別紙）　：文明 11 年（1479）12/3 ～文明 12 年（1480）4/9

丹波国守護代内藤元貞らが丹波国人一宮宮内大輔父子の所領を押領

一宮父子、内藤らの非法を訴えるも、政元以下、他の内衆らが黙殺

孤立した一宮父子、政元を拉致して人質とし、交渉相手の内藤・秋庭・安富各氏らの政元被官に事の推移を述べ、言い分が容れられない場合は将軍息の三宝院

義覚を細川家当主として擁立すると宣言
内藤らは細川六郎を当主にするとして一宮父子に対峙
一宮父子の同族の一宮賢長が政元を救出、内衆の安富・庄両氏が丹波へ発向、一宮父子を討伐

・応仁・文明の乱時期の丹波国情勢を象徴
→応仁・文明の乱後ではあるものの、構内勢力内での矛盾（領地押領、裁判機能の不透明性、勢力争い）の発露

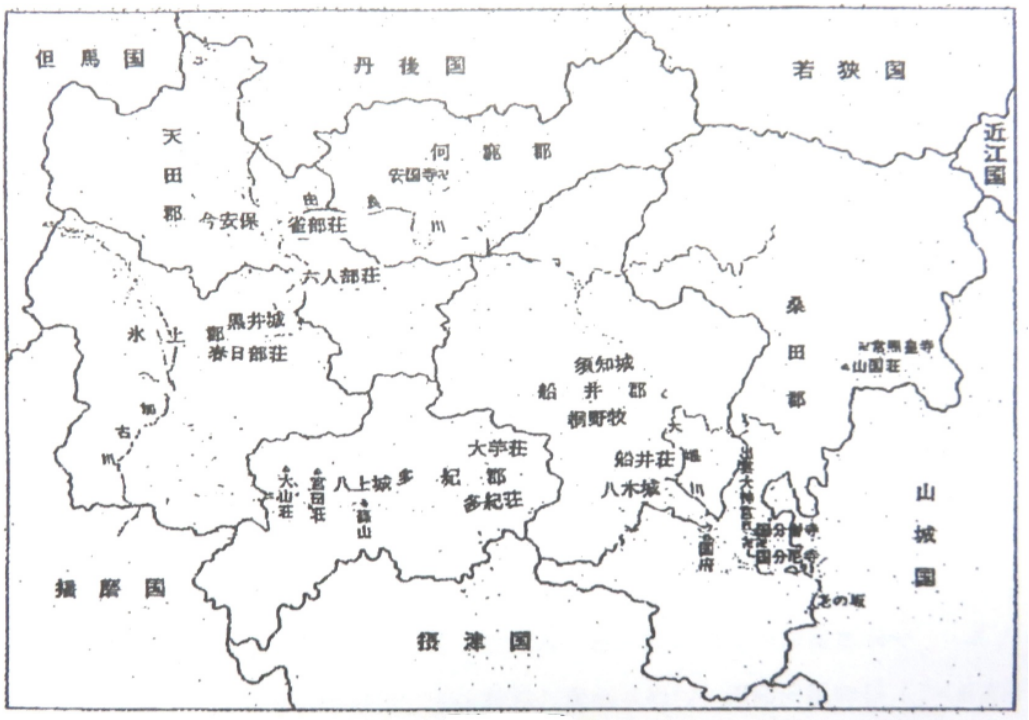
・その後の丹波国内の情勢を映す

**おわりに**

・丹波国における応仁・文明の乱
他国（他守護）とは異なり、東西両軍の対立という構図ではない
丹波国内での諸勢力（守護代職などをめぐる）同士の争い
→ 16 世紀の細川氏内部の抗争に連続
→細川氏分国の特徴

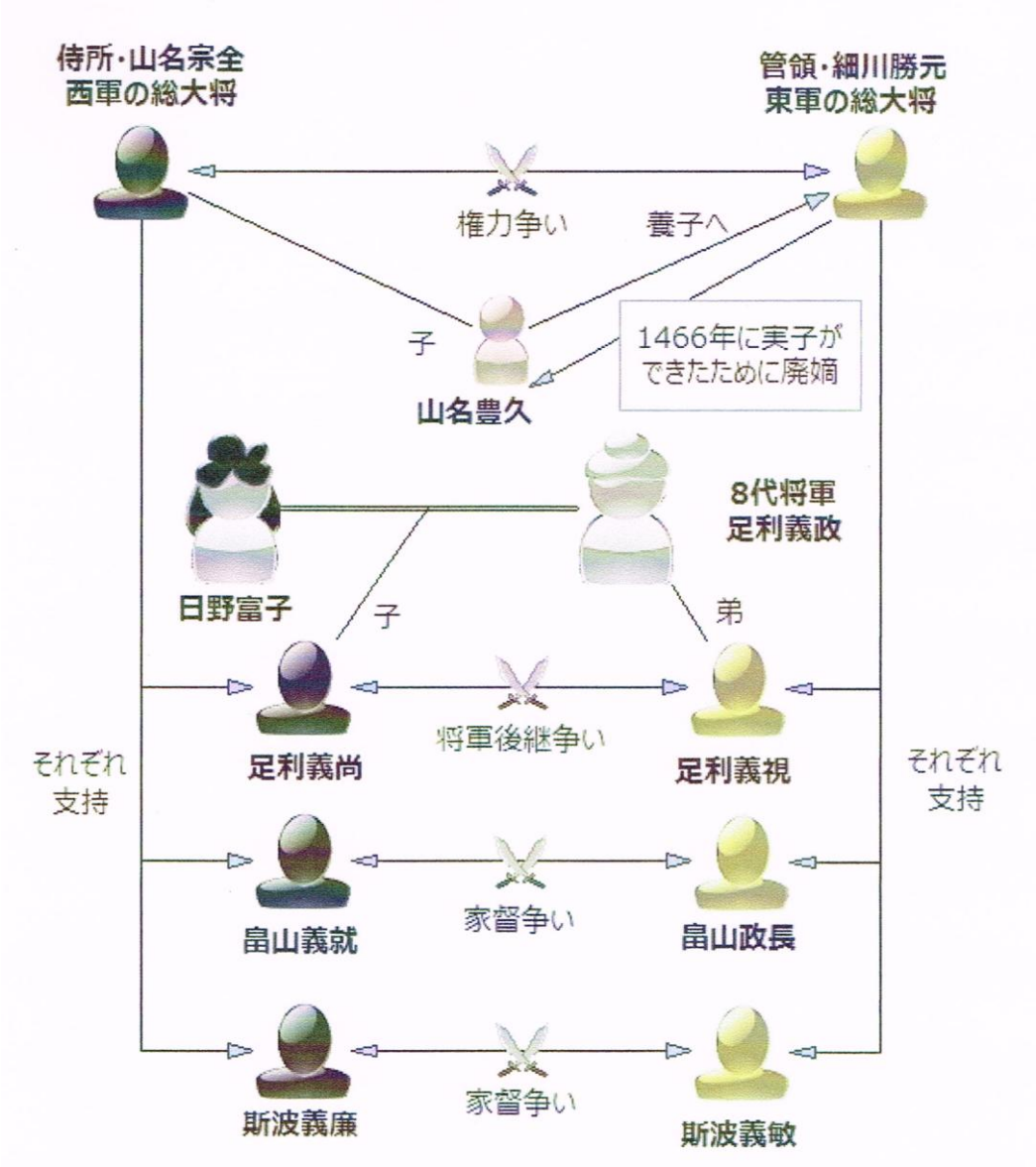
**細川勝元画像**

**山名持豊（宗全）画像**




丹波国概略図

細川政元画像




応仁・文明の乱の関係図

**細川氏の家系と守護分国**

京兆家（摂津国・**丹波国**・讃岐国・土佐国・伊予国（一部））
- 典厩家（摂津国内の一部）
- 野州家（備中国内の一部）

阿波守護家（阿波国）
和泉守護家（和泉国）
備中守護家（備中国）
淡路守護家（淡路国）

【細川政元拉致事件関係　史料】

①文明十一年（一四七九）十二月三日

三日［甲寅］晴、今日細川九郎俄令下向丹波国、被官人一宮大輔号野遊同道、自路中捕令下向、其子細守護代内藤以下彼国人等対一宮一類成敵輩為退去令造意相具之、一家被官人悉不知之仰天、母儀尼公周章公方御仰天云々、後聞一類［一宮］於国構館令守護、傍輩等同意外不寄附云々、当時京都大名山名赤松志波禮部等被下国、無人之処、亦此事出来、一向京中無人、不可然事也（『長興宿弥記』）

三日（甲寅）（前略）申刻細河九郎俄逐電云々、被官人所行云々、但未知是非之儀云々、言語道断事也、一族所従等馳走東西云々、（後略）（『後法興院記』）

②同年十二月六日

一　細川一家事ニ申事出来、一家可滅亡由雑説、依之細川讃州入道雖興道心、一門大事出来之間、自紀州先日罷上了、近日希有之雑説共在之、実否不聞者也（『大乗院寺社雑事記』）

③同年十二月十日

随心院殿御状到来、四日細川九郎、一宮宮内大夫取之下向丹波了、是去年一宮党二人其外人済々、為内藤之沙汰切腹了、其訴訟云々、随而細川六郎可取立之由及其沙汰、一家引分了、京都ニハ畠山管領方五六十人外男切無之、珍事（『大乗院寺社雑事記』）

④同年十二月十二日

［自夜前雨下］一松林院申給、細川事一宮色々訴訟、内藤・秋庭・池田・伊丹・安富・赤松之ウラカク各訴申入云々、万一不叶者、公方御息三宝院若君可奉成細川云々（『大乗院寺社雑事記』）

［癸亥］降雨及晩止、伝聞細河九郎下向丹波云々、被官人一宮宮内大輔奪取云々、乱中丹州知行在所国人守護代等押領間、以屋形下知去々年同名［親類］入部処、不及去渡剰悉令誅伐云々、依此訴訟企此大儀云々、（『後法興院記』）

⑤同年十二月十七日

一　河内国へ去十二日自京都注進云々、細川九郎ハ六里奥へ引入、一宮以下与力衆済々在之、京都ニハ安富・内藤以下六郎を引立、成細川了、上意又成下候歟、一家ニニ成条必定々々、千希代不思議之神慮難有々々、（『大乗院寺社雑事記』）

一　或公方有御下向丹波国、召具細川可有御上洛之由雑説有之、比興之次第也、不可申承引、如此事伝聞天下儀不可有正体之間、東北院僧正俊円可隠居之由申云、世情様存余之故歟、（『大乗院寺社雑事記』）

御書畏存候、随心院殿御書実説候、昨夕和泉守護方へ下候神人上候、守護方へ自京注進候〔天〕、随心院殿如御書候、一の宮の宮内大夫と申候者本来国人候処、定在京之者候故細川右京大夫之時、丹波に闕所を自細川一宮にくれ候を守護代内藤不承引候〔天〕一宮方を剰三十人計うち候、結句自其細川方之年貢無沙汰候間、取細川候〔天〕丹波へ下向、一宮かたもに近辺に野陣に細川方之者（以下欠）（（『大乗院寺社雑事記』）十七日条紙背文書）

⑥文明十二年（一四八〇）二月四日

一　権中納言光臨、此間河内八尾ニ被座云々、細川事一宮責之、一門各同心、九郎定而可生涯条不能左右、野州息六郎可還俗分一決旨、河内辺之沙汰也云々、則丹州辺煙見之云々、（『大乗院寺社雑事記』）

⑦同年二月廿二日

〔癸酉〕晴、昨日又丹波国諸方炎上、内藤被官牢人企徳政之間、一宮方輩押寄悪党館放火、国中錯乱、無是非云々、（『晴富宿弥記』）

⑧同年三月廿三日

於丹波国一宮宮内大輔父子被打了、一宮備後子共沙汰云々、（『大乗院日記目録』）

⑨同年三月廿四日

〔甲辰〕晴陰、伝聞細河九郎明日帰洛一定云々、一宮備後返忠盗取之云々、治光朝臣上洛、（『後法興院記』）

⑩同年三月廿六日

［丙午］晴、今日細川九郎自丹波国上洛、被官一宮備後計略盗出所捕置、一宮々内大輔父子打死、安富新左衛門尉・庄伊豆守等発向、合戦執首云々、当時第一之大名也、公私大慶哉、申刻京着、数百騎召具之云々（後略）（『長興宿弥記』）

一　抽留木注進状到来、一宮備後守之子共引分テ細川九郎相具、安富・秋庭・香川一所ニ所成了、則一宮宮内少輔父子責殺了、十余人自害了、廿三日事也、則細川真日上洛云々、天下大慶不可過之云々、此事前表也、重而曲事可出来、内者共自雅意事興也、可憑様無之、彼頸六人分京着云々（『大乗院寺社雑事記』）

⑪同年三月廿九日

［己酉］晴、是日細川九郎自丹波上洛之後初出仕云々（『長興宿弥記』）

⑫同年三月三十日

［庚戌］朝間小雨未刻以後霽、（中略）就細河九郎上洛遣使者嗣賢朝臣下向丹州（『後法興院記』）

一　去月廿二日家門右大将拝賀廿六日関白殿御拝賀、廿七日除目、廿九日入眼、源義尚任権大納言、同日細川九郎所々礼節ニ罷出云々、廿六日自丹波上洛（『大乗院寺社雑事記』同年四月三日条）

⑬同年四月七日

［丁巳］晴、紺屋細川九郎被官人帯甲冑馳集、安富与庄伊豆守、去月所打執之一宮々内大輔首相論、於庄方自公方被成下御感状、安富不及沙汰之間、憤申失面目之由述懐、安富者打執之処、庄之手件首耳取之、専支証由称之云々、後聞、彼御感状自九郎方召返、両人無分別之間、静謐云々（『長興宿弥記』）

⑭同年四月九日

［己未］晴陰、（中略）自細河九郎許有使者、［一宮備後］先日預御使候、謝畏入存之由、可参申之処、近日出腫物間、且以使者申入云々（『後法興院記』）

一　為細川礼節寺門使者ニ唐門被上洛云々（『大乗院寺社雑事記』）

## 第３回
## 松永久秀・長頼兄弟と戦国時代の丹波

天理大学准教授

天野　忠幸

### はじめに

まず、松永久秀・長頼兄弟であるが、久秀は江戸時代後期から明治時代に作成された浮世絵の「太平記英雄伝」や「芳年武者無類」に描かれている。「太平記英雄伝」とあるのは、江戸時代に戦国時代を描くのは、神君徳川家康に触れることになり、御法度であったためである。そこで、表面上は太平記の時代、南北朝時代であると偽って、戦国武将を題材にした浮世絵をつくっていく。両方の浮世絵とも、久秀の最期が描かれている。

松永久秀は、明智光秀が織田信長を討った本能寺の変の五年前に、信長に反旗を翻して、奈良県の信貴山城に籠城して戦った。そして、敗れて切腹する際に茶釜を投げつけて割るという逸話がある。久秀は戦国武将であるだけでなく茶人としても有名で、「平蜘蛛」という非常に有名な茶釜を持っていた。戦に敗れて腹を切ろうという時に、信長が「平蜘蛛を渡したら命だけは助けてやる」と言ったが、久秀は「平蜘蛛は冥土の土産にする」と、叩き割る場面なのである。これは浮世絵の題材となるほど非常によく知られた話であるが、その背景には、江戸時代中期から後期ぐらいになると村の庄屋や年寄にも茶の湯が広まったことがある。茶道という格式ある場で困るのは、何を話題にするかであった。そこで、茶席で話題にすると良い数寄雑談を選んで作成された『茶窓閒話』が刊行され、広まっていった。久秀は戦国の荒波を乗り越えてきた武将だが、決して荒々しいだけではなく、茶道を極めた風流人でもあった。茶釜一つにも己の命を懸けるのに値するという美談であり、茶道上素晴らしい心掛けということで好まれたのだ。松永久秀は織田信長に謀反を起こすような悪人だが、茶道には命懸けで取り組む文化人でもあったという逸話である。これは事実ではないのだが、茶道の逸話と浮世絵が合わさって、現代まで久秀のイメージを形成してきた。

その松永久秀の弟が松永長頼で、元々の名前は松永甚介、そして長頼、内藤宗勝と改名していき、蓬雲軒という号を持っている。戦国末期の丹波を支配したのはこの長頼であった。

この久秀と長頼の兄弟を題材にして、鎌倉・室町・戦国時代において首都京都に隣接し、非常に大きな影響を与えた国である丹波の歴史を振り返る。

まず、室町時代はどうやって始まるのか、鎌倉幕府はどうして滅んだのかについて確認したい。

河内の千早赤阪村を拠点に楠木正成が挙兵したのはよく知られているが、これは鎌倉幕府からしてみると片田舎の籠城戦に過ぎなかった。しかし、鎌倉幕府は真面目に対処しようと関東から最精鋭部隊を送り込んだ。それが下野に本拠地を置く足利尊氏であった。ところが、上洛した尊氏は元弘３年（1333）３月 29 日に自分の領地であった亀岡市の篠村八幡宮で、後醍醐天皇方に味方すると宣言し挙兵した。八幡宮は源氏の氏神様なので、ここで尊氏は自分の氏神や先祖に対して誓ったのである。足利軍は京都に引き返し、５月７日には西日本を管轄する鎌倉幕府最大の拠点である六波羅探題を滅ぼした。挙兵からわずか一週間後のことである。これで時代の潮目は変わり、５月 22 日には、かつてモンゴル帝国と高麗の連合軍を打ち破った鎌倉幕府もあっけなく滅亡したのである。こうして、室町時代の始まりは丹波より開かれたわけである。

そして、室町時代の終わりにも丹波は大きな役割を果たす。天正１０年（1582）６月２日、丹波を支配する明智光秀が京都に進撃し、本能寺にいた織田信長を討ち取るのである。６月 13 日の山崎の戦いで、光秀は羽柴秀吉に滅ぼされた。そして、６月 27 日には清須会議で織田領国が分割されることになる。

京都は日本の首都である。日本にやって来た宣教師のヨーロッパ人達は、京都周辺の山城・大和・摂津・河内・和泉を「天下」と呼んでいた。天下というのは日本全国という意味もあるが、戦国時代には京都とその周辺という意味の方が強かった。丹波は地政学上、京都に最も近く、まさしく「天下」を支える役割を担っていたのである。

江戸時代になると、徳川幕府は関八州、関東八ヶ国を重視したとされるが、上方八ヶ国も同様に重視していた。大坂城代が管轄する摂津・河内・和泉・播磨と京都所司代が管轄する山城・大和・近江・丹波を合わせた上方八ヶ国も、関八州と同じく幕府直轄に近い扱いを受けた。やはり、丹波の持つ意味は大きかったのである。

京都に幕府を置いた足利将軍家にとって、丹波をはじめ京都周辺の国々をどう支配していくかというのは重要な問題となった。そこで、将軍に次ぐ地位である管領に就任できる三家の一つ、細川氏が丹波を支配することになった。この細川氏の本家となるのが、京兆家である。「京兆」というのは、日本の官職である「中納言」を中国名で「黄門」というように、細川氏の歴

代当主が就任した「右京大夫」という官職名を、律令の本場である中国風に呼んだ名称である。細川京兆家は丹波と摂津を獲得し、山陰道と山陽道を押さえる。そして、讃岐と土佐で瀬戸内海航路と太平洋航路に睨みを効かすというように、西日本の主要な陸路と海路を支配することが役割であったのだ。そして、各分家が阿波、和泉、淡路、備中に展開した。

細川氏は、幾多の戦乱を乗り越えていった。応仁の乱では、細川氏を総大将とする東軍と山名氏を総大将とする西軍に分かれて約 10 年間戦ったが、山名一族は内輪もめを起こして衰退し、細川一族は結束が固く圧勝する形になる。その 20 年後に起こった明応の政変では、室町幕府は細川氏一強の状況であり、細川政元が自分の意に反する将軍を更迭するに至る。

ところが、その細川政元が暗殺されると、細川氏は京都に基盤を置く高国と四国を本拠とする澄元に分裂する。高国が滅ぶとその名跡は氏綱が継ぎ、澄元も死去すると晴元が継ぐという形で、二世代にわたって壮絶な争いが続いた。

その影響は丹波にも及んでくる。丹波は現在では兵庫県と京都府に分かれ、６つある郡のうち２つが兵庫県、４つが京都府に属しているが、室町時代には京都に近い桑田郡・船井郡・多紀郡を「口郡」、京都から遠い何鹿郡・天田郡・氷上郡を「奥郡」と呼んでいた。

さらに丹波の武士は、大きく三つの勢力に分かれている。一つ目は、八木城に本拠を置く内藤氏である。内藤氏は細川高国や氏綱を支援していく。二つ目は、八上城の波多野氏である。波多野氏は明智光秀と激闘を繰り広げたことで有名であるが、代々細川澄元・晴元親子を支援した。三つ目は細川氏から独立して、勢力の拡大を目指す黒井城の赤井氏であった。

やがて、細川澄元・晴元の家臣であった三好氏が台頭する。三好氏は四国の阿波を本拠とするが、やがて近畿地方に渡海し、細川氏を征圧していく。その三好氏の下で腕を振るったのが、松永久秀・長頼兄弟であった。

## １．松永久秀と三好氏

松永久秀・長頼兄弟を取り立てた主人は、三好長慶であった。三好氏の最大版図は、若狭の一部、丹後の一部、丹波、山城、大和、摂津、河内、和泉、淡路、播磨の一部、阿波、讃岐、伊予の一部に及ぶ。現在の都道府県名で言うと、福井県、京都府、大阪府、奈良県、兵庫県、香川県、徳島県、愛媛県にまたがっており、日本でも最大級の大名であった。

長慶は、阿波から摂津の越水城に本拠地を移し、現在の阪神間を手中に収めると、八上城の城主である波多野秀忠の娘と結婚した。政略結婚により、摂津の三好氏と丹波の波多野氏が同盟を結んだのである。当時、長慶と秀忠は細川晴元という共通の主君を戴いていた。しかし、長慶の父三好元長は細川晴元に謀殺されており、長慶は父の仇を討ちたいという宿願を秘めていた。

やがて力を蓄えた長慶は、秀忠の娘と離婚し、河内や紀伊に勢力を持つ遊佐長教の娘と結婚して、細川晴元からの独立を果たすことになる。長慶はこの時、約半世紀続いた近畿地方の戦争の原因は、高国―氏綱系と澄元―晴元系の細川京兆家の家督をめぐる争いであると考え、両者の統一を図る。すなわち、長教が支援する細川氏綱を正式な家督とする。しかし、氏綱は子どもがいないので、その次は細川晴元の子の信良とする。ただし、信良は長慶が人質として養育するというものであった。長慶は、信良を三好氏に背かないように英才教育を施すことによって、自らの後見の下で家督に就けようとした。これにより、細川氏の争いは収まって、三好氏に足を向けられない状態となった。

さらに、長慶は細川晴元を支援する将軍足利義輝と戦うのであるが、実は戦国時代というのは、実力重視である一方、家柄もかなり重視される。そうした風潮の中、長慶は将軍義輝を京都から追放した際に、義輝には政権担当能力がないという理由で、自らが直接京都を支配することにした。これは戦国時代で初めてのことであった。戦国時代は、戦争をする時は必ず足利一族を擁立することが多かった。家柄は大切であり、将軍家の御為にという大義名分があれば武士たちが集まったのだ。中国地方では山口県の大内義興、北陸地方では新潟県の上杉謙信、関東地方では神奈川県の北条氏康などは、一応、足利一族の誰かを擁立して、足利氏を頂点とする秩序を守るためにという名目で戦争をした。しかし、三好長慶は、足利一族などいなくても首都京都を支配できるということを証明していく。そうした新たな試みを支えていたのが、松永兄弟であった。

一例を挙げたい。2019 年４月 30 日に平成は終わり、５月１日より新しい年号が使われるようになる。現在は一世一元制により新天皇の即位と新元号は連動しているが、江戸時代以前は戦争や災害を契機として、気分を一新するために改元が行われた。室町時代では天皇と将軍が相談し、決定することになっていた。ところが、長慶と将軍義輝の戦争により、異例の出来事が起こった。正親町天皇は長慶に追放された義輝を見放し、現職の将軍であるのに相談することもなく、1558 年２月に弘治４年を永禄元年と改めたのである。将軍としての立場を否定された義輝は、永禄を使用せず、

弘治を使い続けた。これは天皇の決定に背くことを意味した。現職の将軍が逆賊となったのである。長慶はいち早く永禄を使用し、将軍と争う乱暴者ではなく、天皇に従う勤皇家としての立場を得て、自らを正統化することに成功する。この頃、久秀は公家と武家の連絡役であった武家伝奏を務める広橋国光の妹である保子と結婚しており、長慶と天皇が接近する交渉に一役かっていた。

さらに、永禄７年（1564）は、十干十二支でいうと最初の甲子の年にあたるが、日本では900年代から甲子の年は必ず改元するという習慣があった。現在までに改元しなかったのは、実はこの年だけであった。義輝はかつて、永禄改元を正親町天皇から相談されなかったのだから、改元費用は支出しないとしていた。このままでは大問題になるので、三好長慶は松永久秀を通じて、費用は支出するから改元しようと朝廷に申し入れを行ったのである。すなわち、三好氏は天皇に忠節を尽くす、しかし、足利氏は将軍としてするべき仕事をしていないということをアピールしようという戦略を取ったのである。結局、正親町天皇は再び京都で三好氏と足利氏の争いが始まることを憂慮し、改元をしなかったのであるが、三好氏は足利氏がもはや将軍にふさわしくないことを全国に示し、室町幕府の正統性を否定しようとしたのである。

三好長慶は現在の教科書ではほとんど出てこず、全く評価されていないが、江戸時代に武田信玄の遺臣たちが残した『甲陽軍鑑』や江戸幕府の幕閣が記したとされる『当代記』では、「天下人」と高く評価されていた。この場合の「天下」は、現在で言う首都圏の意味合いであるが、織田信長の先駆者として考えられていたのである。

その長慶の右腕として活躍したのが、松永久秀であった。長慶は父親が主君に謀略で殺された際に、譜代家臣も多く自害してしまい、非常に厳しい状況に追い込まれた。そうした三好氏を長慶が継いだのは、まだ少年の10歳の時であった。父親の仇を討つ力もなく、ひたすら雌伏の時を過ごすことになる。阿波から摂津に本拠地を移した頃、長慶は思い切った改革に踏み切る。阿波出身や譜代の家柄ではなくても、能力のある者を外様でも思い切って採用する。この時に取り立てられたのが、大阪府高槻市出身の松永久秀・長頼兄弟、摂津市の鳥養貞長、兵庫県伊丹市の野間長久たちであった。

久秀の父親の名前は現在も不明で、名もなき土豪であったようだ。そうした階層から、久秀は大変な出世を重ねていく。その象徴が、桐の御紋を拝領したことである。桐の御紋は、現在、どのような時に目にするかと言うと、内閣総理大臣や官房長官が会見する際の演台である。すなわち日本国の政権担当者を示す特別な家紋であり、元々は菊の御紋と共に天皇家の家紋であった。そのため、鎌倉幕府を滅ぼした足利氏に続き、三好氏、松永氏、織田氏、豊臣氏が特別に使用を許可された。ただ、豊臣秀吉が服属した大名や自分の家臣にも気前よく使用させた結果、価値が急落し、徳川氏は桐ではなく、葵の御紋を使い続けることになる。

室町時代は家柄社会である。そうした中で、松永久秀は松永姓のまま出世していく。これはかなり異例なことであった。例えば、越後守護代家の出身である長尾景虎（後の上杉謙信）は、長尾姓を捨て、関東随一の名家である上杉氏、その中でも本家の山内上杉家を継いだ。大相撲の年寄株みたいなものである。名跡を継ぐことで、社会に認められ力を発揮するという家柄社会が色濃く残っていたことを示す。他にも、中央省庁の官僚だった伊勢宗瑞は関東に下り、その子の氏綱が鎌倉幕府の執権北条家の名跡を継いで、小田原北条氏を創設した。美濃でも信長の義父として有名な斎藤道三の息子の高政は、道三を討ち取った後に、斎藤氏は美濃守護代の家柄に過ぎず、具合が悪いということで、足利一門の侍所所司の一色氏の名跡を継いだ。そうした家柄ロンダリング、高い家柄の姓を継ぐということが常識だった時代に、松永久秀は松永姓のまま身分を上昇させたところに面白さがある。

そして、久秀というと、どうしても信長に謀反したというところばかりが注目されて、忠誠心のかけらもない人間だと思われがちであるが、実際は自分を取り立ててくれた三好氏に対しては、常に忠節を尽くしている点も忘れてはならない。

久秀はいろいろ活躍するが、弟長頼と一緒に戦ったりもしている。天文20年（1551）に、京都の相国寺で４万の軍勢を兄弟で指揮して、足利氏を打ち破っているのは、久秀の軍勢を指揮する能力の高さを示すものであろう。同盟する八木城の内藤氏を救援するために丹波にもやってくる。

内政面では、「給人衆の帳」という三好氏の家臣団名簿を管理する。これは単なる名簿ではなく領地が記されており、その領地の収入に応じた軍勢を連れてこさせる兵の割り当て表にもなる。久秀は三好氏家臣団全体のことをよく知っている管理者でもあったのだ。さらに、久秀の能力が最も発揮されたのは、外交官・交渉役としてであった。足利義輝が近江に敗走した際、近江の大名である六角氏が義輝を支援しないように、久秀は六角氏に対して、三好氏の横暴で追放したのではない、義輝が三好氏との停戦条約を何度も破ったから追放したのであって、言わば天罰が下ったのだ、長

慶が京都の「御静謐」、すなわち首都の平和を維持すると宣言した。その結果、六角氏は義輝に援軍を送ることを差し控えることになった。こうして、三好氏が有利になるように外交手腕を発揮したのである。

さらに、久秀本人は法華宗（日蓮宗）の熱心な信者であったが、家臣たちのキリスト教改宗は認めており、個人の信教の自由は守る主義であった。その結果、家臣の高山飛騨守ダリオたちが、近畿地方のキリシタン第一世代となった。その子の高山右近ジュストが、2017年に大名の地位を捨てて信仰を貫いた殉教者であるとして、ローマ教皇庁より「福者」に認定されている。久秀の寛容さが右近を生みだしたと言えよう。

しかし、久秀の一般的なイメージは、主君を毒殺したり、将軍を暗殺したりしたとか、東大寺の大仏を焼いたという極悪人である。こうした逸話は江戸時代初期には既に現れているのであるが、久秀が生きていた戦国時代の文書や記録を見ると、その証拠はない。『柳生文書』を見ると、主君の嫡男三好義興が若死にした際には、嘆き悲しんで取り乱している。『言継卿記』によると、将軍義輝を殺害したのは久秀の息子の久通であり、久秀は既に隠居の身として奈良におり、京都には出陣すらしていない。大仏が焼失したのは、久秀の敵である三好三人衆が東大寺に陣取ったため、戦場のならいに従い敵陣に放火したら、冬の乾燥した季節であったため、延焼したというのが実情である。大仏や東大寺そのものを焼くことが目的ではない。そうすると、久秀悪人説というのは、実像とは異なるというのが現在の状況である。

## ２．松永長頼（内藤宗勝）と内藤氏

松永兄弟の兄久秀は、京都の南の大和を守った。それに対し、京都の北の丹波を守ったのが、弟の長頼（内藤宗勝）であった。

長頼は、京都市の山科七郷や向日市の長井荘を占領し、京都の東西をおさえた。また、長頼も兄譲りの外交手腕があることを示したのが、丹波の内藤国貞の娘婿になったことである。家柄では、丹波守護代格の内藤氏と釣り合うのは、摂津守護代格の三好氏である。しかし、三好氏の家臣である松永長頼が、内藤国貞の娘婿になった。これにより、内藤氏と三好氏は対等な同盟関係であるはずなのに、内藤氏が三好氏の家臣と同格、すなわち、三好氏に従属する関係に組み替えられてしまったのだ。長頼は戦争にも強く、将軍義輝が逃げ込んだ近江の坂本を焼き払った。また、兄の久秀と共同で四万の大軍を指揮して、相国寺で義輝を破ったこともある。

その長頼の一大転機となったのが、天文22年(1553)９月18日の数掛山城の戦いである。亀岡市の数掛山城を攻めていた時に、長頼の義父である内藤国貞が戦死した。長頼は内藤氏の軍勢をまとめ、八木城に籠って、城を死守した。国貞には息子がおらず、このままだと内藤氏が断絶するところ、11月15日に、三好長慶や内藤国貞が擁立していた細川氏綱が奉行人の茨木長隆を通じて、船井郡の出野氏や片山氏に対して、内藤氏の家督は国貞と長頼が前もって決めていた契約のとおり、国貞の娘と長頼の間に生まれた千勝（後の貞勝）が継承するようにという意向を示した。松永長頼と内藤国貞の娘の間にできた子どもだったら内藤氏の血を受け継いでいるため、氏綱はこのように命じたのであろう。

しかし、その翌年、丹波の武士たちが、松永長頼はそもそも三好氏の家臣筋ではないか、そんな血が入った千勝を内藤氏の家督とする訳にはいかないという反発があったようで、３月20日に今度は細川氏綱自身が船井郡の片山氏や栗野氏、天田郡の桐村氏に書状を送った。文面はすべて同じなので、丹波の他の武士たちにも大量に発給されたことが推測される。それによると、「内藤跡目の事、備前国貞が松永甚介（長頼）と契約候といえども、長頼は分別を以て、息千勝に相続の上は、先々の如く、内藤と相談し忠節肝要に候、猶三好筑前守（長慶）申さるべく候」とある。本当は内藤氏の家督は、国貞は娘婿の長頼に継がせると契約していたけれども、長頼が遠慮して国貞の血を受け継ぐ息子の千勝に相続させたのだ。丹波武士は内藤氏と相談して忠節を尽すことが重要である。詳細は三好長慶が伝えるという。長頼が家督を継ぐ契約だったが辞退したというのは後付けで、丹波の武士たちを納得させるための方便だったと思われる。また、詳細は長慶が伝えるというのは、従わないならば、三好氏が討ち果たすという一種の脅しであろう。これにより、内藤氏は三好氏の後見を受ける形で存続することになった。

しかし、この後、長頼は改名を重ねていくことになる。出家したようで「宗勝」と名乗り、さらに「松永蓬雲軒宗勝」と号した。そして、いつの間にか「内藤備前守」を称した。長頼は内藤氏を乗っ取る野心がないことを示すために出家したが、波多野氏と戦争を重ねる中で、やはり内藤氏の一員として、貞勝を後見する形で内藤氏の軍勢を指揮する必要が生まれていったようである。こうして、長頼を通じて、内藤氏は三好氏の家臣化することになった。このような名家を継承することにより、その家の領地や軍勢を指揮できるようになるのは、戦国時代によくあるパターンである。例えば、大河ドラマ「天地人」の主人公であった樋口

兼続は、主君の上杉景勝にその才能を見込まれるが、家柄が良くないので、他の上杉氏の家臣が兼続の言うことを聞かない。だから上杉氏の重臣で外交官を代々の職務とする直江氏の後妻と結婚し、名跡を継ぐことを命じたので､樋口兼続は直江兼続となったのである。

その松永長頼であるが、丹波を平定するために獅子奮迅の働きをすることになる。丹波にはかつて三好長慶と同盟していた波多野氏がいた。波多野氏は伝統的に細川澄元・晴元との関係が深く、長慶と敵対する晴元を支持した。このため、長頼と波多野氏は、非常に激しい戦いを繰り広げていく。長頼は徐々に勢力を拡大し、弘治３年（1557）には、丹波の北端に位置する綾部市の安国寺に、自軍の乱暴狼藉を取り締まる禁制を発給した。また、永禄２年（1559）には、ついに波多野氏の本拠地である八上城を攻略して、甥の松永孫六を新たな城主として配置した。独自路線をとる氷上郡を除き、丹波の統一をついに果たしたのである。長頼はそこで「丹州国守」として、日本で最高クラスの儒学者として知られた清原枝賢に､『貞永式目抄』を請うた。これは鎌倉幕府の基本法である御成敗式目の抄録に注釈を付したものである。法律というのは、条文だけでは運用できないので、このように解釈する、このように適用するという注釈が必要となる。清原枝賢は、先祖代々の秘密であり、他人に教えるものではない。一子相伝の奥義だけれども、断れないとして、長頼の要請に応じている。長頼は単に戦争に強いだけではなかった。御成敗式目という武士にとっては憲法のような基本法を用いて、依怙贔屓せず公平な支配を丹波で行おうとしていたのである。そういう面では、長頼は非常に几帳面な武将だったと言える。

そして、丹波の国外にも兵を進める。日本海を目指して、天田郡の武士たちを自分の直属軍として編成し直して、若狭や丹後に出陣した。当時、若狭では内紛が起こっており、守護の武田氏とその家臣の逸見氏や粟屋氏の間で、抗争が繰り返されていた。長頼はこれをうまく利用して、逸見氏を支援する形で若狭に進出したのである。これに脅威を感じたのが、越前の朝倉義景であり、長頼と朝倉氏の戦いが半年近く若狭で繰り返された。しかし、永禄４年（1561）の高浜の戦いに敗れた長頼は、丹波に退去することになる。こうした長頼を、三好長慶は様々な形で支援する。長慶は篠山市の大芋氏に対して、長頼に従って出陣するよう命令を出したし、摂津からは池田氏や伊丹氏を援軍として丹波に派遣したのである。

## ３．松永長頼の死

広大な三好領国の北辺の守りを担った松永長頼は、兄久秀よりも先にこの世を去ることになる。三好氏は永禄４年（1561）に長慶の三弟である十河一存が病死すると、わずか４年間のうちに、長弟の三好実休、嫡男の三好義興、次弟の安宅冬康、そして、長慶自身が死んでいった。久秀も後見していた三好義興が死んだのを契機に、息子の久通に家督を譲り、隠居してしまった。この結果、三好氏は急速に世代交代が進み、少年や青年が京都の支配を行う状況となった。

長慶の跡を継いだのは三好義継で、十河一存と五摂家の一つである九条稙通の養女の間に生まれた子であった。義継は､「天下」を治めた武家と関白を務めた公家の両方の血を受け継ぐ半面、世間知らずの貴公子であった。怖い者知らずの義継は、長慶さえも行わなかった将軍足利義輝の殺害に踏み切ってしまった。これに従ったのが、若い松永久通である。久秀が隠居した結果、諸大名の強い反発が予想される将軍殺害を止める者はいなかった。

織田信長を殺害した明智光秀とは異なり、三好義継と松永久通は白昼堂々と軍勢を動かし、将軍の御所を襲撃して義輝を討ち取った。そこには将軍を殺害するというやましさに対する躊躇が微塵も感じられない。三好氏は力があるから、力がない足利氏を滅ぼすのだという考え方である。

その結果、紀伊を支配する畠山秋高の重臣である安見宗房が、越後の上杉謙信の重臣である河田長親と直江景綱に対して、三好義継のやったことは傍若無人である。全国の侍の主人であるべき足利義輝が殺されたのだから、弟の義昭を擁して、幕府を再興しようではないかと弔い合戦を呼びかけたのである。さらに、義昭の叔父の大覚寺義俊という僧侶が、この頃さかんに動き回っており、畠山・上杉同盟に朝倉義景、武田義統、そして織田信長を加えて、三好氏包囲網をつくりあげようと画策していたのである。

ただ、当時は三好氏の方が圧倒的に強く、三好氏包囲網に向けた動きは顕在化しなかった。ところが、二つのある出来事が転機となった。7 月 28 日に朝倉義景の作戦で、松永久秀によって奈良に幽閉されていた足利義昭が脱出して、近江の和田城に逃げ込んだのである。さらに、８月２日に丹波奥郡において、松永長頼が荻野直正との戦いに敗れて討死した。

三好氏の中で、日本海を目指したほどの有能な指揮官であった長頼が戦死した衝撃は大きかった。三好氏包囲網の大義名分、看板になる足利義昭を取り逃してしまったのは、久秀の失策という他はない。反三好勢

力は活気づき、９月になると京都近郊にまで攻め込む事態となった。

三好氏が将軍を京都で白昼堂々と殺害したことで、室町幕府は解体されていくと思っていたら、事態は急転して、諸勢力は幕府の復活に向けて動き出した。時代の流れは数ヶ月の内に二転三転した。もはや、三好氏には、最強を誇った松永長頼はいない。三好氏包囲網に次の将軍候補者である義昭という大義名分を与えてしまった。この状況で責任者探しが始まった結果、11 月 15 日に、松永久秀・久通親子を三好氏から追放せよ、というクーデターが起きる。松永兄弟は三好長慶に取り立てられて、外様の新参者でありながらも、有り得ないような出世を遂げ、腕をふるっていた。しかし、その松永兄弟の失策により、三好氏は包囲網に苦しめられているのだというのである。これによって、失脚した松永久秀は、生き残るために敵の敵と組む。すなわち、足利義昭・畠山秋高・織田信長らと同盟したのである。

久秀は上洛を目指す信長の最大の同盟国になっていく。これはもう三好氏の内紛ではなくなってしまった。内輪もめの解決を外部の人間に求めた訳で、それは絶対に解決できる状況ではなくなってしまった。長慶や久秀がつくりあげた三好政権は、崩壊していくことになった。

## ４．内藤ジョアンら丹波武士と統一政権

永禄 11 年（1568）、松永久秀を追い落とした三好三人衆（三好長逸、三好宗渭、石成友通）は、２月に足利義栄を 14 代将軍に就けた。しかし、９月から 10 月にかけて、それを打倒した足利義昭を戴く織田信長・松永久秀・三好義継・畠山秋高が、連立政権を樹立する。

従来、信長の死後約 30 年を経て、信長を顕彰するために編纂された『信長公記』の記述のみを信頼して、信長軍の圧倒的な強さが注目されていたが、実際は三好三人衆の軍勢は、近江方面の信長と大和方面の久秀の対応に分かれていたため、信長の上洛が容易になったことが明らかにされている。

また、信長や久秀は上洛を果たしたものの、三好三人衆の軍勢に決定的なダメージを与えることができず、主力部隊がまるまる温存されることになった。

その結果、わずか三ヶ月後には三好三人衆が四国から渡海し、京都の中にまで突入するという事態を引き起こした。また、義昭や信長を持久戦で苦しめるという作戦に打って出たため、三人衆有利と見た大坂の本願寺や、北陸の朝倉義景は、信長に見切りをつけ、三人衆と結んで、足利義昭幕府の包囲網をつくりあげてしまった。

義昭は、この苦境を外交によって乗り切ろうとした。すなわち、大和の筒井順慶や甲斐の武田信玄を味方に付けて、自らの幕府を強化しようとしたのである。ただ、その手段が良くなかった。久秀にとって不倶戴天の仇である順慶を好待遇で口説いた結果、久秀は激怒し、義昭から離反したのである。同様に、信長と同盟する徳川家康と敵対する武田信玄を頼ることは、信長の面目を潰してしまうことになった。いわば、義昭の行ったことは、場当たり外交だったのである。その結果、元亀４年（天正元年、1573）義昭は信長に敗れ、京都から追放されてしまった。

こうした激動の時代、丹波や内藤氏はどうなったのであろうか。この時、長頼を失った内藤氏は分裂していた。内藤貞虎は三好三人衆に味方し、久秀の甥である貞弘（後の内藤ジョアン）は義昭に付いた。内藤氏の宿敵の波多野秀治は織田信長に接近する一方、奥郡の赤井時家や荻野直正は義昭に与した。

天正３年（1575）、織田信長は京都を安定的に支配するには、丹波を平定する必要があるとして、近江の坂本城主であった明智光秀を派遣した。光秀は、口郡の内藤ジョアンらを打ち破って、奥郡の荻野直正の征伐に向かった。波多野秀治は早くから信長に通じていたので、光秀も安心して奥郡に攻め込んだが、直正の反撃にあい、持久戦となってしまった。その間に、将軍足利義昭は中国地方の大大名である毛利輝元に迎えられ、義昭と輝元は共同して、反信長の意思を明確にした。そして、輝元は荻野直正の支援を始めた。そうすると、波多野秀治は信長方から離反したため、光秀は京都に逃げ帰ることになってしまったのである。

敗れた内藤ジョアンは足利義昭のもとへ逃れて、信長に徹底抗戦する道を選んだ。ただ、ジョアンの甥のベントという人物は、織田信長に賭けて、その重臣の柴田勝家に仕官した。新しい統一政権へ成長しようとする織田信長と 200 年以上続いた幕府体制を維持しようとする足利義昭という二つの大きな流れが、京都や丹波で激突していたが、天正７年（1579）に、八上城や黒井城がついに落城して、光秀が丹波の平定を成し遂げる。

光秀は天正３年（1575）に、「惟任」姓を信長より与えられ、改姓した。そこで、光秀は、元々の明智姓を自分に服属した小畠氏や須智氏などの丹波武士に与えて、自分の家臣に組み込んでいく。当時、主家の姓を与えられることは大変な名誉であったのだ。

ところが、光秀は本能寺の変を起こし、信長を討つが、すぐに羽柴秀吉に滅ぼされた。丹波は秀吉が支配

するところとなり、秀吉は養子となっていた織田信長の五男である羽柴秀勝を光秀が築いた亀山城に配置した。

丹波を逃れた内藤ジョアンは、信長の死後に足利義昭も出家して秀吉に服属すると、同じキリシタンである小西行長を頼り、その親類衆という形で、姓も小西に改めて、彼のもとで過ごした。行長は秀吉に登用されて肥後の南半国を与えられたが、堺商人の出身である行長はほとんど家臣などいなかった。そこで同じキリシタンを、数多く登用したのである。ジョアンは行長の家臣として、大きな仕事を成し遂げた。日本全国を統一した秀吉は、大陸に出兵し、明国や李氏朝鮮と戦う文禄の役という戦争を引き起こした。この時、ジョアンは中国の北京に乗り込んで、明の皇帝である万暦帝に会い、和睦交渉を行ったのである。ジョアンはキリシタンとしてヨーロッパに通じていただけではなく、アジアの漢文の世界にも通じていた。東洋にも西洋にも強い真の国際人を丹波が生み出したことになる。ただ、関ヶ原の戦いで小西行長が味方した西軍は敗れ、行長は処刑され、小西氏は改易された。そのため、内藤ジョアンは、高山右近ジュストを頼って、加賀百万石を領する前田利長に召し抱えられた。元は徳川家康と肩を並べる豊臣五大老の一人であった利長は、キリシタンであったが有能な武将でもあった彼らを庇護した。

しかし、慶長 19 年（1614）、徳川家康がキリスト教の禁教令を拡大して、取り締まりを強化すると、利長の死後に前田氏の家督を継いだ利常は、ジョアンとジュストを拘束し、長崎へ送った。ジョアンとジュストは、フィリピンのマニラに追放され、ジュストはマニラに着いた数十日後に、ジョアンは寛永３年（1626）にマニラで没した。

一説によると、ジョアンとジュストは有能な戦国武将でありすぎたために、大坂城の豊臣秀頼に召し抱えられることを恐れた徳川家康が、大坂の冬の陣を起こす前に計画的に国外追放にしたとも言われている。

## おわりに

京都に公家と武家が共存し、実質的に唯一の首都として機能し、その周辺が「天下」と呼ばれていた時代、中央政権を維持するのに、丹波は不可欠な国であった。単なる後背地の山国ではなく、日本海にも繋がっているという地政学的に有利な条件を、丹波は持っていた。そして、三好氏や織田氏という室町幕府の打倒を目指す大名が首都京都に入ってくるのだが、室町幕府を倒すべきだという勢力と、室町幕府を維持し守るべきだという勢力がせめぎあう最前線となった。丹波の武士達は、単に国盗りゲームのような中で、自分の領地の拡大を狙っていたのではなく、倒幕か佐幕かという大きな時代のうねりの中で生きていたのだ。

そうした中で、松永久秀・長頼兄弟の活躍と丹波への関わりは、三好政権の成立と崩壊の両方の引き金となった。梟雄のイメージが強いが、それは江戸時代に創作された部分が多い。また、彼らの甥で不屈の丹波人である内藤ジョアンのことも忘れてはならないであろう。

## 参考文献

天野忠幸編『松永久秀』（宮帯出版社、2017 年）
天野忠幸『松永久秀と下剋上』（ 平凡社、2018 年）
日吉町郷土資料館『丹波動乱　内藤宗勝とその時代』（2005 年）
福島克彦「丹波内藤氏と内藤ジョアン」（中西裕樹編『高山右近』宮帯出版社、2014 年）

【　第３回　天野　忠幸　氏　　資料　】

兵庫丹波の森協会・講座「丹波学」（丹波の森公苑）　　2018 年 10 月 13 日

# 松永久秀・長頼兄弟と戦国時代の丹波

天理大学　天野忠幸

## はじめに

○室町・戦国時代の丹波の重要性

元弘 3 年（1333）4/29 足利尊氏が篠村八幡宮で挙兵

5/7 六波羅探題を滅ぼす、5/22 鎌倉滅亡

天正 10 年（1582）6/2 明智光秀が織田信長を討つ（本能寺の変）

6/13 山崎の戦い、6/27 清州会議（信長領国の分割）

→丹波の地政学、中世京都の政権維持に重要な国

江戸時代も上方八ヶ国体制（畿内 5 ヶ国＋丹波・近江・播磨）

○室町幕府管領細川氏の領国

管領家（京兆家：丹波・摂津・讃岐・土佐)、分家（阿波、淡路、和泉、備中）

1467 応仁の乱：細川勝元 VS 山名宗全、細川一族の結束

1493 明応の政変：細川政元 VS 足利義稙、将軍更迭

1507 政元の暗殺：高国―氏綱 VS 澄元―晴元

→政局を主導する細川氏の分裂

○丹波の地域構成

口郡（桑田郡、船井郡、多紀郡）と奥郡（何鹿郡、天田郡、氷上郡）

※兵庫丹波は多紀郡（篠山市）と氷上郡（丹波市）

八木城（桑田郡、船井郡）…内藤氏（守護代家、細川氏内衆）＝高国―氏綱

八上城（多紀郡）…波多野氏（石見国人、政元より拝領）＝澄元―晴元

黒井城（氷上郡）…赤井氏（丹波国人）

→二川分流が丹波口郡に波及

## 1、松永久秀と三好氏

○三好長慶の畿内支配

政略結婚

波多野秀忠の娘、離婚、遊佐長教の養女

主家細川家の統一

晴元（長慶の仇）―氏綱（長慶が擁立）―信良（長慶に人質、養育）

足利氏を擁さずに戦国時代で初めて首都京都を支配

側近政治を好み、長慶暗殺を企てた将軍義輝を追放

大内義興、上杉謙信、北条氏康、毛利輝元との差、信長も苦悩

永禄改元（改元に従わない）と甲子改元（改元費用を出さない）で将軍権威を失墜

『甲陽軍鑑』『当代記』で天下人と評価

⇔織田信長の先駆者

○松永兄弟の登用

長慶の家臣団登用

父元長が晴元に謀殺、阿波譜代（塩田、加地、森）が壊滅

摂津（越水―西宮市）の外様（松永、鳥養、野間）を家格にこだわらず重用

大阪府高槻市五百住出身、松永孫六が日蓮宗妙福寺を八上へ移転（後に篠山へ）

父親の名前すら不明の土豪、久秀は主家並待遇（桐御紋）

出世の異例さ…高い家格の家督を継がない

長尾景虎は関東管領山内上杉家、伊勢氏綱は鎌倉幕府執権北条家

斎藤高政は侍所所司一色家

妻は後奈良天皇の後宮女房広橋国子の妹保子

○久秀の活躍

兄弟で軍を指揮：天文 20 年（1551）相国寺の戦い 4 万、天文 22 年の内藤氏支援

内政：「給人衆の帳」を管理、大和の支配（伊賀・伊勢への圧力）

外交：六角氏との交渉、義輝には「御天罰」、長慶が「京都御静謐」

築城：多聞山城（高矢倉、安土城の先駆け）、信貴山城（天主？）

布教：キリスト教を黙認、高山飛騨守（右近の父）

⇔「三悪（将軍弑逆、主家暗殺、大仏焼討）」は俗説、忠臣

## ２、松永長頼（内藤宗勝）と内藤氏

○長頼の活躍

内政：山科七郷（京都市）や長井荘（向日市）を占領

外交：長慶と同盟する内藤国貞の娘婿に（家格無視）、対等同盟から従属同盟へ

軍事：近江坂本へ侵攻

○内藤家の相続

天文 22（1553）/9/18 数掛山城の戦い、国貞が戦死、長頼が八木城死守

11/15 細川氏綱奉行人茨木長隆→出野氏・片山氏（船井郡）

内藤氏家督は、国貞と長頼の契約により長頼の息子の千勝（貞勝）

天正 23/3/20 細川氏綱→片山氏・栗野氏（船井郡）、桐村氏（天田郡）

「内藤跡目の事、備前国貞が松永甚介（長頼）と契約候と雖も、長頼は分別を以て、息千勝に相続の上は、先々の如く、内藤と相談し忠節肝要に候、猶三好筑前守（長慶）申さるべく候、謹言、」

本来は長頼自身が家督を継承する契約があったが、内藤氏の血をひく千勝に

名前の変遷

甚介長頼→松永宗勝→松永蓬雲軒宗勝→内藤蓬雲軒宗勝→内藤備前守宗勝

⇒長頼を通じて内藤氏は三好氏の家臣化

守護代家の継承、当時の慣例通り…真田（武藤）昌幸、樋口（直江）兼続

○丹波の平定

長慶の本拠地摂津（芥川山城―高槻市）の隣国

義輝方の細川晴元・三好宗渭・香西元成、そして、波多野元秀の地盤

弘治 3（1557）/2/26 安国寺（綾部市）に禁制を発給
永禄 2（1559）に波多野元秀の八上城を攻略、松永孫六を配置
同年、儒学者清原枝賢に『貞永式目抄』を請う、枝賢は「秘抄」であり「一子相伝の奥義」であるが固辞できないと応じる、枝賢は後に久秀の参謀兼キリシタン
⇒「丹州太守」として三好氏の中で重きを成す
長慶兄弟（三好実休、安宅冬康、十河一存）以外では松永兄弟のみ

○丹波国外への出兵
永禄 3（1560）6 月、天田郡御馬廻衆らに若狭出陣を指示
同年 9 月、丹後の金剛心院（宮津市）に禁制を発給
宗勝・逸見氏・栗屋氏 VS 武田義統・朝倉義景
永禄 4（1561）正月、高浜の戦いに敗北
長慶が多紀郡の大芋一族中に「宗勝に対し馳走」を命令
池田氏、伊丹氏を摂津から丹波に派遣
⇒若狭武田氏の内紛に乗じて、日本海方面へ進出

## 3、内藤宗勝の死

○進む世代交代
1561 十河一存の死、1562 三好実休の死、1563 三好義興の死、松永久秀の隠居
1564 安宅冬康・三好長慶の死

○将軍義輝殺害事件
永禄 8（1565）/5/19 三好義継（十河一存と九条稙通の養女の子）と松永久通が決行
明智光秀と異なり白昼堂々と攻撃、『信長公記』では義輝の「御謀反」と批判
6/24 安見宗房（畠山秋高重臣）→河田長親・直江景綱（上杉謙信重臣）
①義輝の弟の義昭を中心に「天下」を再興しよう
②義昭の叔父の大覚寺義俊が朝倉義景・武田義統・織田信長を調略
8/5 大覚寺義俊→上杉謙信
①7/28、朝倉義景の調略で、足利義昭は松永久秀によって拘束されていた大和を脱出し甲賀和田城に入城
②8/2 丹波奥郡で内藤宗勝が黒井城主の荻野直正に敗れて討死
⇒大義名分（久秀の失策）と領国（宗勝の戦死）の失陥、倒幕から幕府再興へ
11/15 松永失脚、久秀・信長 VS 三好三人衆（三好長逸・宗渭、石成友通）

## 4、内藤ジョアンら丹波武士と統一政権

○足利義昭幕府の成立
永禄 11 年（1568）14 代将軍義栄を擁立する三好三人衆を打倒
織田信長、松永久秀、三好義継、畠山秋高の連立政権
元亀元年（1570）三好三人衆・大坂本願寺・朝倉義景の逆襲
混乱した将軍義昭による場当たり外交

筒井順慶の調略→松永久秀の離反
武田信玄の調略→徳川家康・織田信長の離反
元亀 4 年（天正元年 1573）義昭・久秀・三好三人衆・本願寺・信玄 VS 信長
内藤氏：貞虎は三好三人衆、貞弘（久秀の甥、ジョアン如安）は義昭
波多野氏：秀治は信長
赤井氏：赤井時家・荻野直正は義昭

○織田信長の丹波侵攻
天正 3 年（1575）明智光秀の荻野直正討伐、波多野秀治の加勢
翌年「鞆公方」足利義昭が毛利・上杉・武田と連携し信長包囲網
内藤ジョアンは義昭へ、ジョアンの甥ベントは柴田勝家に仕官
天正 7 年（1579）八上城・黒井城が落城
惟任光秀が小畠氏や須智氏に明智姓を付与し家臣団に編成

○内藤ジョアンの活動
キリシタン大名小西行長の「親類衆」、小西飛騨守
1592～93 文禄の役で明との和睦交渉、北京で万暦帝に拝謁
関ヶ原の戦いで小西行長は処刑、前田利長の客将鷹山右近ジュストを頼る
慶長 19 年（1614）徳川家康が禁教令を拡大、前田利常はジョアンとジュストを拘束
マカオへ追放、大坂入城を危惧した措置とも
寛永 3 年（1626）マニラで死去

## おわりに

○政権維持に不可欠な国・丹波
首都京都の後背地、単なる山国ではなく日本海への視野
三好・織田期の丹波は倒幕と佐幕の最前線

○三好家を支えた松永兄弟
久秀：マルチな才能、梟雄ではなく忠臣
長頼：軍事的才能だけでなく、外交力も
三好―波多野の対等同盟から、三好―内藤の従属同盟へ
新たな宗教が丹波へ、日蓮宗とキリスト教
不屈の丹波人・内藤ジョアン

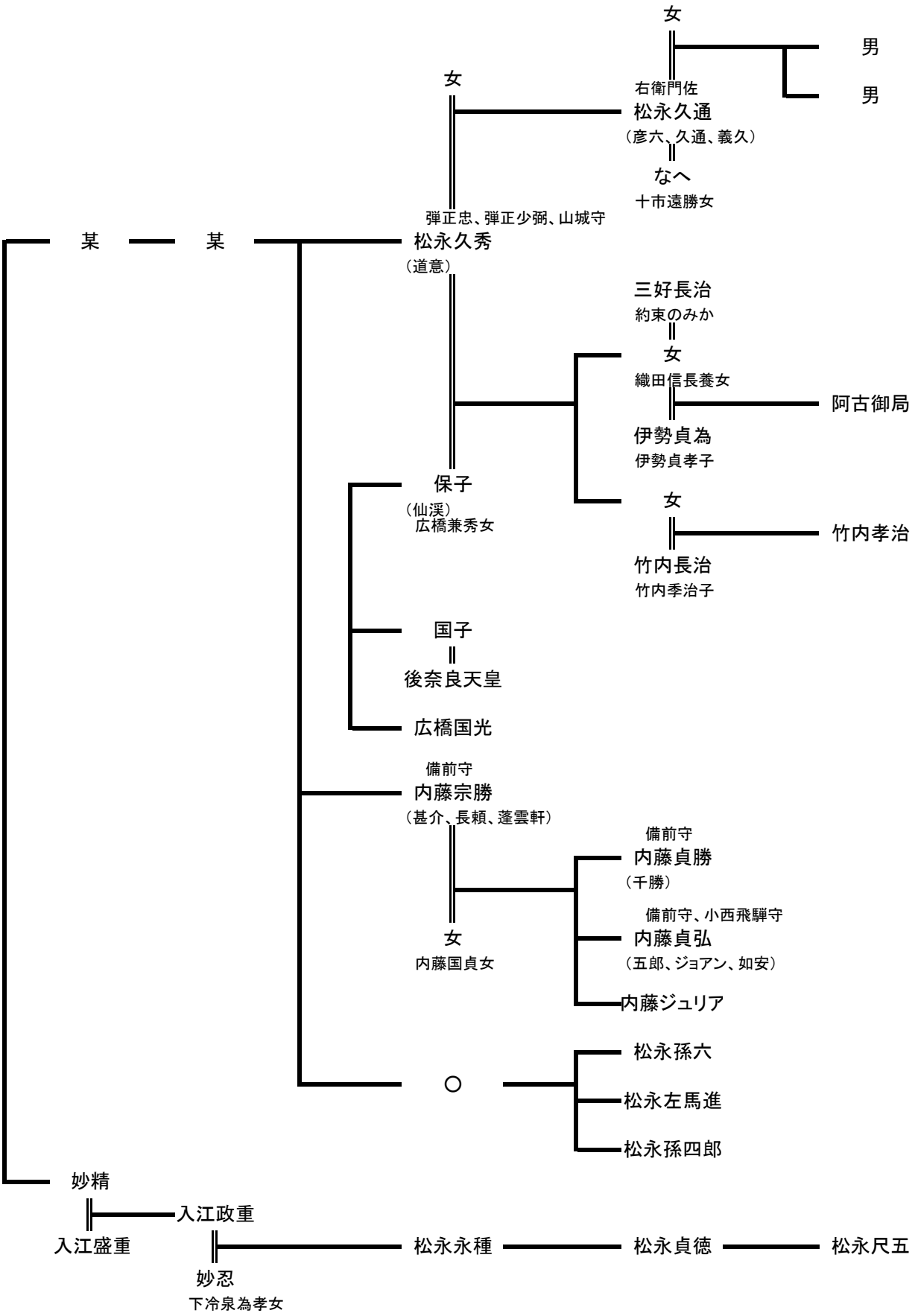
**参考文献**

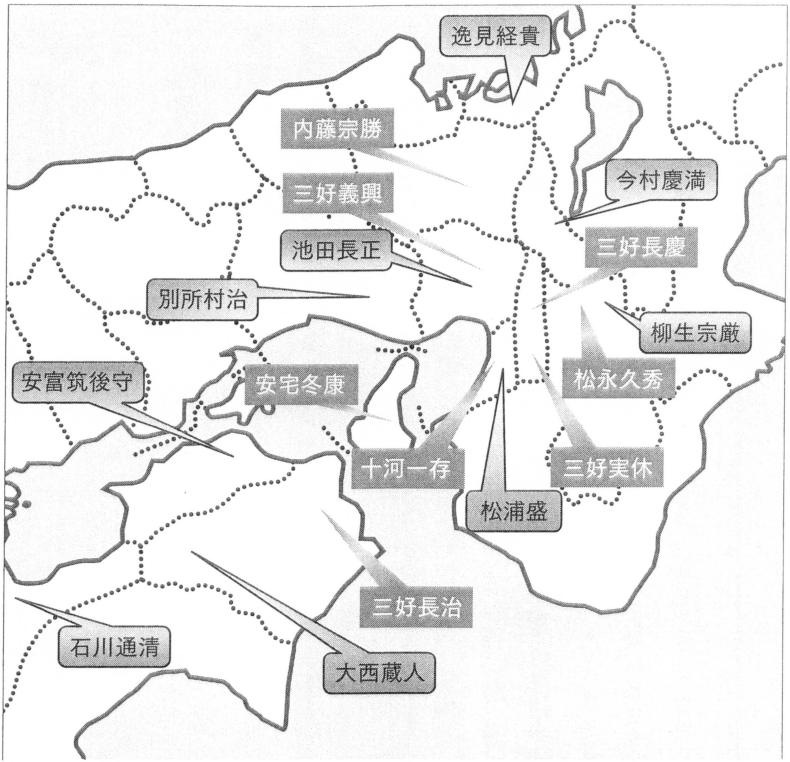
天野忠幸編『松永久秀』（宮帯出版社、2017 年）
天野忠幸『松永久秀と下剋上』（平凡社、2018 年）
日吉町郷土資料館『丹波動乱　内藤宗勝とその時代』（2005 年）
福島克彦「丹波内藤氏と内藤ジョアン」（中西裕樹編『高山右近』宮帯出版社、2014 年）

『太平記英雄伝』に描かれた松永久秀■個人蔵

63　松永久秀画像（『芳年武者見類』）　個人蔵　　35.3cm × 24.5cm

松永氏略系図


女
男
男
右衛門佐
松永久通
（彦六、久通、義久）
なへ
十市遠勝女
女
弾正忠、弾正少弼、山城守
某
某
松永久秀
（道意）
三好長治
約束のみか
女
織田信長養女
阿古御局
伊勢貞為
伊勢貞孝子
女
竹内孝治
竹内長治
竹内季治子
保子
（仙渓）
広橋兼秀女
国子
後奈良天皇
広橋国光
備前守
内藤宗勝
（甚介、長頼、蓬雲軒）
備前守
内藤貞勝
（千勝）
備前守、小西飛騨守
内藤貞弘
（五郎、ジョアン、如安）
内藤ジュリア
女
内藤国貞女
○
松永孫六
松永左馬進
松永孫四郎
妙精
入江政重
入江盛重
松永永種
松永貞徳
松永尺五
妙忍
下冷泉為孝女




永禄4年頃の三好氏の勢力圏（■は三好一族と重臣、□は三好方の主な有力国人）

## 第４回
## 南北朝期の丹波守護山名時氏・氏清

株式会社歴史と文化の研究所代表取締役
渡邊　大門

### はじめに

丹波国の守護といえば、すぐに細川氏を思い浮かべる。しかし、細川氏が丹波守護を務めていたのは明徳の乱以降であり、明徳２年（1391）に起こった明徳の乱で山名氏が衰退するまでは山名氏が守護を任されていて、それ以前は仁木氏が守護を任されていた。仁木と書いて「にっき」と読むのだが、資料編Ｐ51 の【丹波守護補任沿革】というところを見てみると建武３年から仁木頼章が守護を務めており、その後、康永２年から山名時氏に代わる。この山名時氏は南朝方に与し、足利尊氏と決裂したので、丹波守護を解任されることになる。それからは仁木氏とその子孫が丹波を治めるのだが、こうした繰り返しの後、明徳の乱以後は、細川氏が支配することになる。丹波の代表的な武将と言えば、戦国期において細川氏の家臣で華々しい活躍をみせた波多野氏や荻野氏が挙げられることが多いが、今回はそれ以前の時代の支配者の山名氏や仁木氏についてその丹波守護としての活動ぶりや政治的な意義について考えたいと思う。

この山名氏というのは最盛期には 11 カ国､山城国を加えると 12 カ国、全国 66 カ国の 1/6 の割合の領国を支配していたので「六分一殿」と呼ばれていた。ところが、明徳の乱を詳細に研究している歴史研究者は少なく、国文学を専攻している人が明徳の乱の顛末を記した『明徳記』を研究しているのが実情である。

### １ 仁木氏とは？

仁木氏については愛知県岡崎市に仁木八幡宮があり仁木氏発祥の地といわれており、その後、伊賀の守護職を務めた。この仁木氏というのは足利氏の一族であり、そのために幕府に重用されるようになる。足利義康の曽孫・実国が、鎌倉中期三河国額田郡仁木町（岡崎市仁木町）に住み、仁木太郎と称したのがはじまりである。

足利氏も元はといえば源氏であり、現在の栃木県の足利の地名を名字にしている。この足利も源氏（清和源氏の一族の河内源氏の流れ）の足利と藤原氏（藤原秀郷の子孫の藤原姓足利氏）の足利のふたつがあり少し複雑なので、注意が必要である。

ちなみに、丹波の波多野氏は、相模国波多野荘（神奈川県秦野市）からこちらに移ってきたという経緯がある。

仁木氏は実国から６代目の頼章、義長の兄弟が足利尊氏に従って大いに軍功を挙げた。足利幕府においては細川氏などの強力な軍勢を持つ大名が多くいたわけだが、仁木氏もそのひとりである。

頼章は観応２年（1351）、足利尊氏の執事となる。この執事というのは後の三管領・四職のうちの管領にあたる職であり、将軍の補佐を務める役割で尊氏が亡くなるまで在職した。

管領というのは細川・畠山・斯波という源氏の流れをくむ名族から輩出されているが、それより以前の執事には高師直なども就任している。なお、仁木氏の兄弟が守護を務めた国は、丹波、武蔵を頼章が、遠江、伊勢、伊賀、三河を義長が治めている。

延文５年（1360）、義長は細川清氏、畠山国清らと対立して伊勢に退いたが、後に幕府に帰順した。子孫は伊勢、伊賀の守護となったが、応仁・文明の乱（1467～77）では一族が分裂し、次第に衰微した。

仁木氏の研究を進めていくと、南北朝の頃の史料は比較的残っている方である。しかし、応仁・文明の乱以後になると、ほとんど動静もわからず史料も無く、顧みられることもない存在になっていったと思われる。

今日の主題の丹波守護の一人がこの仁木頼章になるのだが、建武２年（1335）、足利尊氏とともに鎌倉で反後醍醐天皇の兵を挙げる。翌建武３年に尊氏が西下した際、丹波国高山寺城に拠り、丹波国を鎮定した。その軍功もあり、後に丹波国の守護に任じられている。そして、尊氏の上京に応じ、丹波、但馬の兵を率い、京都で新田義貞を破っている。

観応元年(1350)､頼章は侍所所司(所司は長官の意)となっている。侍所の頭人というのは戦争における戦功を評価して恩賞を認定するという部署である｡また、一方では京の都の治安をつかさどる検非違使（警察組織）の権限を吸収し、今でいえば警察庁長官の立場を兼務しており、幕府の中でも重要な役職を担い、厚遇されていたことが分かる。

その後、頼章は観応の擾乱（1349～52）では尊氏に従い、尊氏の弟の足利直義を攻撃した。このように、頼章は尊氏に従属しており､尊氏派であったといえる。

もう一人が仁木義尹である。頼章の子で頼夏の養子であるが､延文５年(1360)､丹波･丹後の守護となり、翌年には京都で南朝方を破っている｡応安元年(1368)、幕府の命により伊予で南朝方の河野通堯と戦い敗退したが、のち引付頭人（裁判を担当する役割）となり、

引き続き幕閣では厚遇されていたようである。

ただ、生没年不詳となっているように、このくらいの地位の人であってもこの時代には生没年すらわからないことが普通であったようである。このあとの戦国大名たちにしても生年月日がはっきりしている人はほとんどいない。有名になった武将などでは死亡した年から年齢を引いて、たぶんこの年に生まれたのであろうと推測しているのが実情である。

そんな中でも生年月日がはっきりしているのは皇族、あるいは将軍などである。天皇・皇族などの場合は、公家の日記などに生年月日や死亡年月日が記されているのでわかることが多い。

ところで、仁木氏が守護になったのが分かるのは京都市右京区高尾山の神護寺に保管されている「神護寺文書」である。

余談ながら、神護寺で有名なのが教科書にも載っている源頼朝像であるが、実はあれは平重盛ではないかということが言われるようになっており、足利尊氏の刀を担いだ肖像画（京都国立博物館所蔵）は、高師直だという説もある。武田信玄の有名な肖像画（高野山成慶院所蔵）も、能登の畠山氏の誰かではないかなどと諸説ある。

このように、日本史の研究では新しい史料が出てきて、これまでとは違った解釈がなされるようになり、少しずつ進歩しているように思う。

この「神護寺文書」のなかには、神護寺領の丹波吉富荘（京都府南丹市など）という荘園に触れているものがあり、仁木頼章が関係する文書を発給している。

こうしたことからも、仁木氏が丹波国を一定期間支配していたことが分かる。また、丹波の久下氏などに対しても一連の南北朝期の騒乱の中、越前金ヶ崎攻めなどでの軍功を認める文書を出している。丹波の片山氏に対して、新田一族討伐のために京に兵を出すように命じる文書も仁木氏が出している。

これらに見られるように、頼章が丹波の国人達を束ねて尊氏に仕える様子がうかがえる文書がいくつも存在している。

丹波の荘園といえば大山荘が有名である。私たちより 10〜20 歳くらい年長の研究者の方々は熱心に大山荘を研究していた時期があり、ずいぶん研究も進んだが、今ではかなり下火になってきている。

それ以外に丹波国には春日部荘というのがあり、これは現在の丹波市春日町にあった荘園であるが、その春日部荘は安国寺領であるという史料がいくつも残っている。春日部荘が安国寺（京都府綾部市）領であるということが文書に現れるのが宝治元年（1247）、鎌倉中期くらいからであり、それ以前から支配が始まっていたであろうと思われる。今日使うのは「安国寺文書」で、この場合の安国寺というのは京都府綾部市にある大きな寺院であり、足利氏が全国に建てた安国寺のひとつである。

この春日部荘は現在の春日町黒井に位置するが、ここに赤松貞範（赤松円心の次男）が春日部荘を与えられて、黒井城を築城したといわれている。

◎仁木氏が丹波守護時代の史料　　史料編（P53）

「安国寺文書」

丹州安国寺雑掌申、同国春日部庄内中山村事、訴状遣之、赤松筑前守(貞範)濫妨云云、早止彼違乱、可沙汰付下地於寺家雑掌之状如件、

正平六年十一月十日　　(義詮)（花押）

仁木兵部大輔(頼章)殿

これは２代将軍足利義詮が丹波守護仁木頼章に宛てた文書である。

安国寺は、幕府に訴状を送った。訴状の内容とは、春日部庄の中山村の事について、赤松貞範が乱暴狼藉を働いたというものだった。乱暴狼藉とは乱暴なふるまいというより、年貢を奪い取るようなことで、問題を起こしていることになろう。そこで、赤松氏の乱暴を止めさせて、これらの土地を安国寺に返すようにさせよ、という指示が将軍・義詮から仁木頼章にあったわけである。

京都の丹波においても、似たような史料がいくつも出てくる。この文書も正平年間なので、２度目になる。そうしたことから、これはこの時期に仁木氏が守護として丹波を治めていた史料といえる。

次に、備前にある「河本文書」である。

これは２代将軍足利義詮が石原兵衛三郎に宛てたものである。

「河本文書」　（史料編Ｐ53）

丹波国兇徒対治事、所被仰守護人也、早発向彼在所、可致軍忠之状如件、

正平七年二月七日　　(義詮)（花押）

石原兵衛三郎殿

丹波国の兇徒（悪い連中）の退治について、丹波守護の仁木氏から仰せがあった。早く丹波に行き、鎮圧せよという指示が石原氏にあったことを示すものである。

その他、兵庫県でいうと、波々伯部神社に関する「建内文書」である。

この波々伯部氏というのは鎌倉時代からの名族であ

り、波々伯部保（兵庫県篠山市）というのは京都の祇園社の荘園である。

「建内文書」（史料編Ｐ53）
丹波国波々伯部保雑掌申當保事、申状具書遣之、次郎左衛門入道永阿波々伯部又太郎信盛以下輩押領云々、今月廿日以前可打渡下地於雑掌、若令違反者任事書之旨、可致沙汰之状如件、
文和元年十月六日　義詮（花押）
守護（仁木頼章）

丹波の波々伯部保の雑掌が、申状（上申の文書）でもって訴えを申し出てきた。次郎左衛門入道永阿（これは波々伯部氏で出家して永阿と名乗っている人物）と信盛親子とおぼしき人物が波々伯部保の土地・年貢を横領しているので、今月 20 日までに祇園社の雑掌に返させるように、と将軍義詮が守護仁木頼章に命じている。日付が文和元年 10 月６日であるから、２週間以内の返却を迫っている。

今であればこの様なことが起これば警察沙汰であるが、中世のこの頃はこのような事は日常茶飯事で、押領があるたびに訴えを起こさなければならなかった。

今の裁判制度は三審制だが、当時は揉め事があれば天皇に訴えたり、また、将軍に訴えたりして判断を仰ぐのだが、その後、また裁定がひっくり返ったりして、なかなか決着がつかない事がまま見受けられた。

そして、当時の室町幕府というのは刑事事件などについては、はっきりとした裁定を下すが、民事事件のようなものには係わりたくないと消極的であった。たとえば徳政令に見られるように借金の棒引きは借りた方は得をするが貸した方はたまらないわけで、幾度も裁判に訴えるわけである。

次の２つ目の「建内文書」も同じような内容である。

「建内文書」　（史料編Ｐ53）
丹波国波々伯部保雑掌申當保事、重申状具書如此、先度可沙汰付之旨、被成御教書之慮、不事行云々、甚無謂、所詮止次郎左衛門入道永阿、又太郎信盛以下輩押領、可打渡下地於雑掌、若猶令違反者、任被定置之旨致沙汰、載起請詞可被注申、更不可有緩怠之状、依仰執達如件、
文和二年三月四日　沙彌（花押）
當国守護（仁木頼章）

丹波国波々伯部保の雑掌が、重ねて申状により訴え出た。先に将軍義詮が書いた御教書が出されたにもかかわらず、守られていない。そこで、次郎左衛門入道永阿、又太郎信盛以下の輩（ともがら）はその土地を波々伯部保の雑掌に返すよう、仁木頼章に命じたのである。将軍自ら御教書を出したにもかかわらず、従わないのは大変な怠慢であると管領からも厳しい内容の言葉で戒められている。

こうして丹波国の波々伯部保をめぐって、波々伯部氏と祇園社が揉めており、仁木氏が幕府の命を受け、終息に奔走していた様子がうかがえる。その後、仁木氏はいったん丹波守護を退き、その時期は康永２年 12 月頃になる。

このとき丹波には守護代の荻野彦六という人物がいた。

当時、南北朝期から室町時代には、東国の守護や九州の守護たちには京都在住の義務はなかった。ところが、それ以外の地域、しかも仁木氏のように幕府の要職に就いている守護は遠隔地の大名とは違い、将軍のそばにいて補佐をするため、京都に在住することが義務付けられていた。

そうなると不在になりがちな守護の代わりに所領を治める立場の人間が必要になる。それが「守護代」である。こうした場合、一族から起用するのが望ましいのだが、仁木氏の場合は最初に述べたように元々は三河出身であるために、地元の有力者に任さざるを得なかった。そういう事情もあって、丹波の有力な領主の荻野氏にまかせることになったのであろう。

この時期の各地の守護というのは、南北朝の争乱や、政治的失脚などで固定しておらず、1392 年の南北朝合体の頃までは、よく交代している。

もともと守護職というのは世襲ではない。しかし、さまざまなノウハウや地盤の継承から考えると、現代の政治家もそうであるように、父の後を継いで子どもが跡を継ぐのが一番無難であり、だんだん世襲する傾向が強くなっていった。

ところが、康永２年 12 月、守護代の荻野彦六が謀叛の陰謀を起こし、仁木氏は職を辞さざるを得ない状況になる。『太平記』によると荻野彦六が将軍に対して恨みを持っていたと書かれていて、南朝方の備前国住人である三宅高徳これは児島高徳の事だと思うが、彼を誘って謀叛を起こそうとしたということが分かっている。

こうした謀叛の企てを未然に防げなかったということで仁木氏は更迭されてしまう。
後任として山名時氏が丹波守護職を命じられ、荻野彦六を討伐する事になる。

山名氏については、室町時代の四職家のひとつで、侍所所司を務める家柄である。四職家には、そのほかに赤松、京極、一色の三家がある。一色家は足利

家の一族であるが、赤松氏については出自に不明な点が多く、南北朝期から突然史上に現れてくる。京極というのは、近江源氏の佐々木氏の流れをくむ家柄である。なお、土岐氏も以前は侍所所司を務めていたが、反乱を起こして足利義満によって討伐された。以降、侍所には復帰所司には復帰していない。

斯波、畠山、仁木を含めた三管領は、いずれも足利一族で構成されている。そうした中で、四職はバラエティに富んだ構成となっている。

## ２ 山名氏とは？

山名氏は、清和源氏の流れをくむ新田氏の一族である。家祖は上野国山名郷（群馬県高崎市山名町）つまり山名という土地に住んだので、山名三郎と称した新田義重になる。その新田義重の子、義範が安元年間、豊前の宇佐八幡宮（大分県宇佐市）の分霊を勧請して社殿を造営したのが、今も現存する山名八幡神社の始まりといわれている。現在、同社は市指定の重要文化財であり、義範が奉納した天国の宝剣なども収められている。したがって、ここが山名氏発祥の地となる。

義範は治承・寿永の乱で活躍した後、伊豆守となり、幕府の引付衆（裁判官）に加えられ、新田一族の重鎮となった。

しかし、高崎市民にとっては、山名氏というのはあまり知られた存在ではないようである。最近刊行された『高崎市史』で、ようやく詳しく知られるようになった。

山名氏の中では、時氏の活躍が目を引く。足利尊氏の挙兵の際に行動を共にし、山陰・山陽地方の軍事行動で名和氏など南朝勢力を圧伏した。その軍功により、山陰一帯の守護職に任じられ，侍所所司を務め、四職家としての基礎を築いた。観応の擾乱では足利直義方につき、直義没後には南朝方につくこともあった。しかし、のちに２代将軍義詮に帰属し、丹波以下五カ国の守護職を安堵され、その一族は幕府の重職に補されるなど重きをなした。

その後、一族で十一カ国の領国を有する大きな勢力となった山名氏は、幕府内でも勢力の均衡を損なう存在とみられるようになる。

室町幕府の財政基盤というのは、各地に点在している御料所とよばれる直轄領（三河・美作など）があり、それらを管理している国人（奉公衆）から年貢を上納させていた。そのほかには、京都の酒屋（醸造業）や土倉（倉庫業）が余った金を貸し付けて金融業を営んでいたのに目を付けて、彼らから徴税することによって財源を確保していたのである。それに加えて、足利義満の時代には、日明貿易による利益が大きなものになっていった。

それにしても十一カ国を有した山名氏というのは、目障りな存在である。そのような状況下で、11カ国を治めている山名氏の中で誰が主導権を持つのか、一族４人のなかで争いが起こる。山名氏の内訌に乗じた将軍義満の大守護抑圧政策により、明徳の乱が勃発し、その後、山名氏に与えられた守護職は但馬・因幡・伯耆など３カ国に削減された。そのほかにも、周防の大内氏や土岐氏など各地の大守護職が勢力を削減され、衰退していった。

大内氏が狙い撃ちされた理由は、日明貿易の権益である。山名氏にしても資料編Ｐ52 の地図でわかるように、京都に近い所のほとんどの 11 カ国を支配している上、山陰をおさえているので明や朝鮮との交易も無視できなかったひとつであろう。こうして大守護は、細川氏くらいしか残らなくなる。

山名氏中興の祖の時氏については、反抗しながらも幕府の設立に貢献したので、山城を含む丹波・伯耆・美作・因幡・丹後など五カ国が与えられている。時氏に関する史料としては、「安国寺文書」の中の春日部荘に関する文書がある。

◎山名氏が丹波守護時代の史料　（史料編Ｐ53）

１ 丹波国春日部荘

「安国寺文書」

丹波国春日部庄内中山村事、貞和二年二月廿八日寄附安国寺訖、而赤松筑前入道世貞、
帯延文五年三月一四日還補状之由雖稱之、在陣之時分、未盡沙汰、令参差奥所詮如元、
寺家領掌不可有相違之状如件、

貞治五年十二月廿二日　(義詮) 花押
當寺長老

丹波国春日部庄内中山村事、任還補御教書、可相渡下地於安国寺雑掌状如件、

貞治五年十二月廿三日　(義詮) 花押
山名左京大夫 (時氏) 入道殿

この「安国寺文書」では、春日部荘中山村の件に関して、赤松貞範が還補状を持参して訴えてきた。しかし、将軍義詮はそれを認めず、もとのとおり安国寺の雑掌が支配するよう、安国寺長老と山名時氏に伝えたものである。次に示すように、翌年にも同様の事態が発し、時氏は上記と同趣旨のことを小林氏に伝えた。

安国寺雑掌申丹波国春日部庄内中山村事、御教書如此、案文遣之任被仰下之旨、沙汰付下地於雑掌、可執進請取状、更不可有緩怠儀之状如件、

貞治六年十月十七日　　沙彌(山名時氏)（花押）

小林左近将監殿

この史料の宛先の小林左近将は、山名氏の守護代である。つまり、将軍から守護の山名氏へ、守護の山名氏から守護代の小林氏へ、そして守護代から当寺長老などへ命令を伝えているのである。

「安国寺文書」あるいは他の古文書に類似した内容のものが多々見られるということは、幕府あるいは守護からの再三の命令にも関わらず、赤松貞範は押領を止めなかったわけである。

また、安国寺領のうち京都府福知山市の夜久野郷という荘園では、荻野出羽入道常義が今西村を無断で押領しているのでやめさせるようにと、佐々木氏綱から山名時氏に命令が出されている。

「安国寺文書」　（史料編Ｐ53）

丹波国安国寺雑掌申同国夜久郷内今西村事、訴状副具書、如此、子細見状、荻野出羽入道常義押領云々、事実者太不可然、所詮止彼妨、沙汰付下地於雑掌、全所務、可申左右之由、可令下知守護代給之状、依仰執達如件、

応安二年十月五日　　沙彌(佐々木氏綱)（花押）

山名左京大夫入道(時氏)殿

「東寺百合文書」のうち、大山荘について山名時氏の守護代の小林左近将監に宛てた文書が残っている。

２　丹波国大山荘　（史料編Ｐ54）

「東寺百合文書」

東寺領丹波国大山庄事、退半済給人、田公、不日沙汰付下地於雑掌、可執進請取之状如件、

応安二年十一月二日　　沙彌(時氏)（花押）

小林左近将監殿

東寺領丹波国大山荘について、半済の給人（但馬の国人田公氏）を退け、同荘の支配を東寺雑掌に任せるよう命じたものである。

半済とは軍備調達のために年貢を折半するという南北朝期に行われた政策であるが、それを認めないということである。給人は半済によってメリットを受けていたのだが、却下されたのである。

同じく次の文書も、守護代小林氏の配下の者が発給したものである。

東寺領丹波国大山庄領家職事、任今年十一月二日御書下之旨、退半済給人、沙汰付一圓寺家雑掌候了、仍渡状如件、

応安弐年十一月十五日　　沙彌(小林代長鼻)（花押）

大山荘は９世紀頃からある古い荘園であるが、先述のとおり最近は研究が下火になって、研究している人は少なくなっている。私などより 10～20 歳ほど年配の方々が盛んに行っていた時期があり、昭和 30 年代に当時の大阪教育大学の宮川満先生がこちらに足を運んで大山荘の史料集を作られている。私などが学生の頃にその史料集が欲しくて手に入れようと思ったが、３～４万円もしてなかなか手が出なかったものだが、現在では『兵庫県史』史料編に収録されている。同書には大山荘の史料がほぼすべて入っていて、図書館にも所蔵されているはずである。

荘園は条里制の遺構に沿って区分・整理されていたり、当時の姿が残っていたりするところも多い。実際に遺構を歩いてみたりして実地調査したり、民俗学や地名学手法で研究すると、それなりに面白いのだが、全国的にみても研究する人は少なくなっている。大山荘は応仁・文明の乱以降から急速に史料が少なくなり、だんだん歴史上から姿を消していく。

次に、丹波を治めた山名氏の歴代当主を見ていくことにする。

山名氏幸は、時幸の次男で師義の養子になる。彼は明徳の乱後、伯耆の守護になる。彼も生没年がわかっていなくて、画像なども残ってない。

山名満幸は師義の子。丹後、出雲の守護になり、その後、伯耆、隠岐守護職を獲得し４カ国守護となったが、仙洞料の押領などで将軍義満と対立し、明徳の乱を起こしたが敗れ、応永２年（1395）に京都で京極高詮に殺害された。彼も亡くなった年は分かっているが、生年は不明である。

山名義理について、彼は画像なども残っており、室町幕府の内談に出仕している。貞治３年（1364）には、美作守護に任ぜられた。永和４年（1378）、南朝・橋本正督の蜂起に際して、弟・氏清と共に追討大将に命ぜられ、後に紀伊守護になった。（ちなみに今の奈良、和歌山、三重というのはほとんどが南朝勢力である）

後に彼は明徳の乱には参陣せず、大内義弘に降伏して紀伊由良（和歌山県日高郡由良町）で出家した。その後の動静は不明である。

もう一人の明徳の乱の首謀者が、山名氏清である。

氏清も丹波守護であり、関係史料が「安国寺文書」に残っている。この頃の大山荘は、地頭の中澤氏と領家職の一部をめぐって争っていた。幕府は中澤氏の押領を退けるよう、山名氏清に命じている。

鎌倉時代の守護と室町時代の守護とでは、いったいどう違うのか。鎌倉時代の守護は警察権のみを持っていて、悪党問題に対処したり、犯罪人を逮捕したりする権限を持っていた。山賊や海賊を退治したり、討伐したりするといった警察権の行使がおもな役割であった。

ところが室町時代になると、これら警察権の行使以外に荘園の侵略を始めていく。先ほど、軍費調達のために半済つまり年貢を折半するということに触れた。元々は戦争期の一時的な処置であったものだったが、いつの間にか守護は恒常的に徴収するようになっていく。

その他の代表的なものには段銭があり、田畑一反ごとにいくらという年貢を課していた。そもそもは朝廷における即位式の費用調達、伊勢神宮など大きな寺社などの修理費用や建替費用を調達するために、段銭が徴収されていた。あくまで臨時の徴収であったはずである。ところが、これが恒常的に徴収されるようになり、室町中期になると、守護段銭と呼ばれるようになる。

今風にいえば、高速道路の通行料金のようなものであろうか。最初、高速道路を作るために徴収するはずだったものが、その後、補修などのために恒常的に徴収されている状態が続いているのに似ている。

このように守護段銭としての徴収を続けていくと、守護の財政が豊かになっていき、勢力拡大につながっていく。これに対して荘園を持っているのは京都の寺社や公卿などであり、彼らは大山荘などの荘園に直接年貢を取り立てに赴くのではなく、代官などに命じて代行させるわけである。つまり代官に年貢を徴収してもらって、手数料を払う制度を取っていた。

しかし、守護が力を持ってくると、寺社・公卿の代官が年貢を徴収しようと思っても大きな武力を持っている守護が妨げるようになってきて、それに対抗するだけの武力を持たない代官がだんだん音を上げるようになり、年貢の徴収が難しくなっていく。こうして荘園は、衰退していく経過をたどる。丹波のような京都に近い所でもそういう状態であるので、ましてや遠い所の荘園ならなおさらである。

史料編Ｐ55 の「東寺百合文書」を見てみる。東寺ではこれら多くの古文書を保管しているが、このページの１番目の古文書については、康暦２年に出された文書で、山名氏清宛てのものであるが、「役夫工米」という臨時の徴収の件についてやめさせるように命じている。

２番目の古文書についても、地頭の中澤氏の横暴をやめさせるよう、管領の斯波義将が幕府の命で山名氏清に命じたものである。ただ、中澤氏と山名氏は、結託して年貢の押領を図っていた可能性もなきにしもあらずと思われる。

これらの文書の最後のところで左衛門佐判とある。この「判」というのは在判の事で、ここには本来花押が書かれているものなのだが、花押の写しを丁寧に写すのが難しいので、ここには花押がありましたといった事を示すために判と書いてある。つまりメモのようなものである。

次に、ここからは明徳の乱を取り上げよう。

これまで見てきたように、山名氏は丹波を含めた多くの国を支配していたが、明徳２年（1391）、山名氏清と満幸が幕府に反乱を起こす。一方、三代将軍義満は山名氏をはじめ、多くの国を支配している有力大名の威勢を警戒し、その勢力を削減するように考えていた。

応安４年、山名時氏が亡くなった。彼は足利尊氏に従って足利幕府設立に大きく貢献した人物である。一時、時氏は直義に与して尊氏に抵抗したり、南朝方についたりした時期もあったが、その後、数カ国を支配するようになったので、将軍としても一目置かざるを得なかった。しかし、その時氏が亡くなり、山名一族の分裂の兆しが見えてきた。義満は、山名時熙と氏幸が但馬に在国したままで幕命を奉じないのを理由にして、山名氏清・満幸に命じてこれを追討させた。本来、守護というのは、京都にあって将軍を補佐する任務があったが、時熙と氏幸はこれに応じなかったのである。

しかし、時熙らは将軍義満に取り入って氏清らを「謀叛の疑いあり」と讒言し、義満が時熙らを用いて氏清らを抑えようとした。そこで、満幸は氏清を説き、氏清も兄の義理を誘って幕府に反旗を翻し、京都に進出したが敗れることになる。

これらが、明徳の乱の一連の流れであるが、先に述べたように、三代将軍義満が山名氏という有力大名一族の分裂の兆しをうまく利用してその勢力削減を図ろうとしたというのが真相である。

資料編Ｐ51 の山名氏の系図を見てみると、結局、時氏亡き後、誰が惣領家になるか、みんなが疑心暗鬼になっていた。師義の系統が主流になることに対して、義理、氏清らが反発をして、一族間で争う状

況が生まれたのを利用して将軍義満が山名氏の勢力を削ぐように画策した。その結果、山名氏の惣領家となったのが山名時熙であるが、かなり勢力を削がれて但馬を本拠地とした因幡・伯耆の３カ国を一族で継承することになる。のちに、その息子の山名宗全（持豊）が応仁・文明の乱を引き起こした張本人となる。

**おわりに**

丹波の国の守護といえば細川氏やその流れから波多野氏などを思い浮かべがちだが、実はそれ以外にも今日ふれたところの仁木氏や山名氏もこの地で活躍していたという事を心に留め置いていただければ幸いである。

# 南北朝期の丹波守護山名時氏・氏清

日時　二〇一八年十一月二十四日（土）十三時三十分～
場所　丹波の森公苑　多目的ホール
講師　渡邊大門（㈱歴史と文化の研究所）

## はじめに

丹波国の守護といえば、すぐに細川氏を思い浮かべます。しかし、明徳二年（一三九一）に起こった明徳の乱で山名氏が推戴するまでは、山名氏が守護を任されていました。それ以前は仁木氏が守護を務めていました。この講座では、南北朝期の丹波守護だった仁木氏、山名氏を取り上げ、その沿革や政治的な意義などを考えます。

## 一　仁木氏とは？

仁木氏は、足利一族である。足利義康の曽孫・実国が、鎌倉中期三河国額田郡仁木郷（岡崎市仁木町）に住み、仁木太郎と称したのがはじまり。実国から六代目の頼章、義長の兄弟は、足利尊氏に従って軍功を挙げた。観応二年（一三五一）、頼章は尊氏の執事となり、尊氏が亡くなるまで在職した。兄弟が守護を務めた国は丹波、武蔵（以上、頼章）、遠江、伊勢、伊賀、三河（以上、義長）などである。延文五年（一三六〇）、義長は細川清氏、畠山国清らと対立して伊勢に退いたが、のち幕府に帰順した。子孫は伊勢、伊賀の守護となったが、応仁の乱（一四六七～七七）では一族が分裂し、しだいに衰微した。

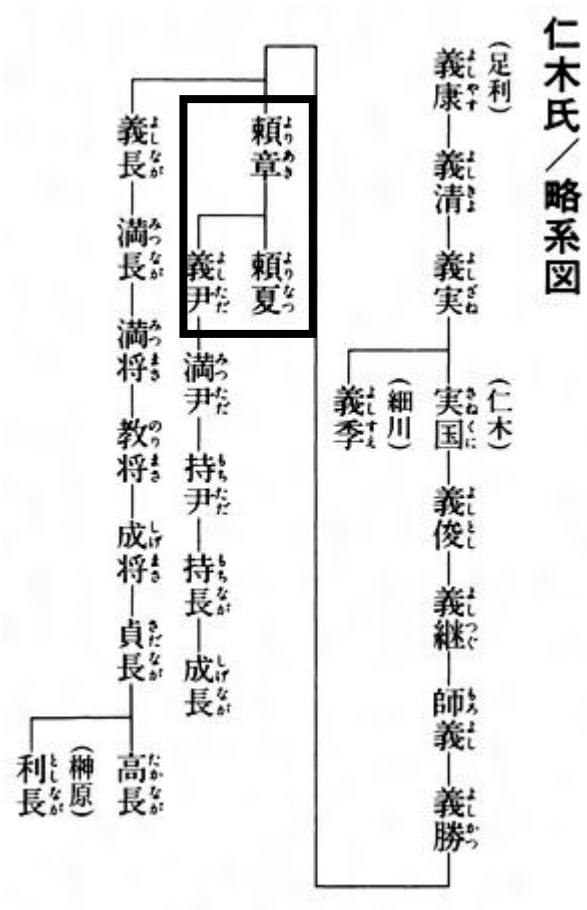
### ①仁木頼章（一二九九～一三五九）

義勝の子。二郎三郎と称す。建武二年（一三三五）、足利尊氏とともに鎌倉で反後醍醐天皇の兵をあげる。翌建武三年に尊氏が西下した際、丹波国高山寺城に拠り、丹波国を鎮定した。その後、尊氏の上京に応じ、丹波、但馬の兵を率い、京都で新田義貞を破った。観応元年（一三五〇）に侍所頭人となり、翌年執事になった。観応の擾乱（一三四九～五二）では尊氏に従い、足利直義を攻撃した。

### ②仁木義尹（生没年不詳）

仁木頼章の子で仁木頼夏の養子。延文五年（一三六〇）、丹波・丹後の守護となり、翌年には京都で南朝軍を破った。応安元年（一三六八）幕府の命により伊予で南朝方の河野通堯の軍と戦い敗退。のち引付頭人となる。

### 仁木氏／略系図



## 二　山名氏とは?

室町時代の守護で、四職家の一つ。清和源氏新田氏の一族で、家祖は義重の子息・義範。上野国多胡郡山名郷（群馬県高崎市山名町）に住し、山名三郎と称した。治承・寿永の乱で活躍した義範は伊豆守となり、以後山名氏は幕府引付衆に加えられ、新田一族の重鎮となった。南北朝期の時氏は、南北朝内乱で足利尊氏方に属し、山陰・山陽地方で活躍。観応の擾乱では足利直義方に属し、直義没後に南朝に与した。貞治二年（一三六三）、二代将軍・足利義詮に帰順して、伯耆・丹など五ヵ国の守護職に補され、子息らは侍所所司などの要職に就いた。さらに出雲や畿内の守護職を得て、一族で十一ヵ国の守護職を保持して六分一殿と称された。明徳二年（一三九一）、山名一族の内訌と三代将軍・義満の大守護抑圧政策により、明徳の乱が勃発した。その結果、但馬・伯耆・因幡以外の守護職は没収された。嘉吉の乱などで勢力を回復し、細川氏と並ぶ強勢となったが、応仁の乱（一四六七～七七）後は急速に衰退した。

**①山名時氏**（一三〇三～七一）

足利尊氏の挙兵に際して行動を共にし、山陰地方の軍事行動で名和氏など南朝勢力を圧服した。建武四年（一三三七）、伯耆・美作・丹後・因幡などの守護職に任じられ、山陰最大の勢力となった。侍所所司を務め、のちの四職家としての基礎を築いた。観応二年（一三五一）の観応の擾乱では足利直義方につき、直義の没後は南朝方に走った。貞治二年（一三六三）、二代将軍・義詮に帰順し、伯耆以下五ヵ国の守護職を安堵され、一族は侍所所司、小侍所所司などに補されるなど重きをなした。

**②山名氏幸**（生没年不詳）

時義の次男。康応元年（一三八九）五月、父・時義の死により伯耆守護になったが、三代将軍・足利義満は強勢を恐れ、山名一族の氏清・満幸に時熙・氏幸兄弟を討たせた。氏幸は時熙と共に備後に逃げるが、のちに上洛して義満に宥免を請うた。明徳の乱では氏清・満幸討伐に功を立て、伯耆守護に就任した。

**③山名満幸**（?～一三九五）

師義の子。兄・義幸の病弱により、父の丹後・出雲守護職を継承した。しかし、山名氏惣領職は、師義、時義、時熙と継承されたため、時熙との対立を深めた。山名一族の内紛に介入した三代将軍・足利義満は、明徳元年（一三九〇）に叔父・氏清と結んだ満幸に時熙・氏幸らを討たせた。これにより満幸は、伯耆・隠守護職を獲得し、四ヵ国守護となった。しかし、まもなく仙洞料の押領などで義満と対立し、翌年に明徳の乱を起こしたが敗れ、応永二年（一三九五）に京都で京極高詮に殺害された。

**④山名義理**（一三三七～?）

時氏の次男。応安三年（一三七〇）、室町幕府の内談に出仕。貞治三年（一三六四）には美作守護に任ぜられた。永和四年（一三七八）、南朝・橋本正督の蜂起に際して弟・氏清と共に追討大将を命ぜられ、のちに紀伊守護になった。明徳の乱には参陣せず、翌年三月に大内義弘に降伏して紀伊由良で出家した。その後の動静は不詳。

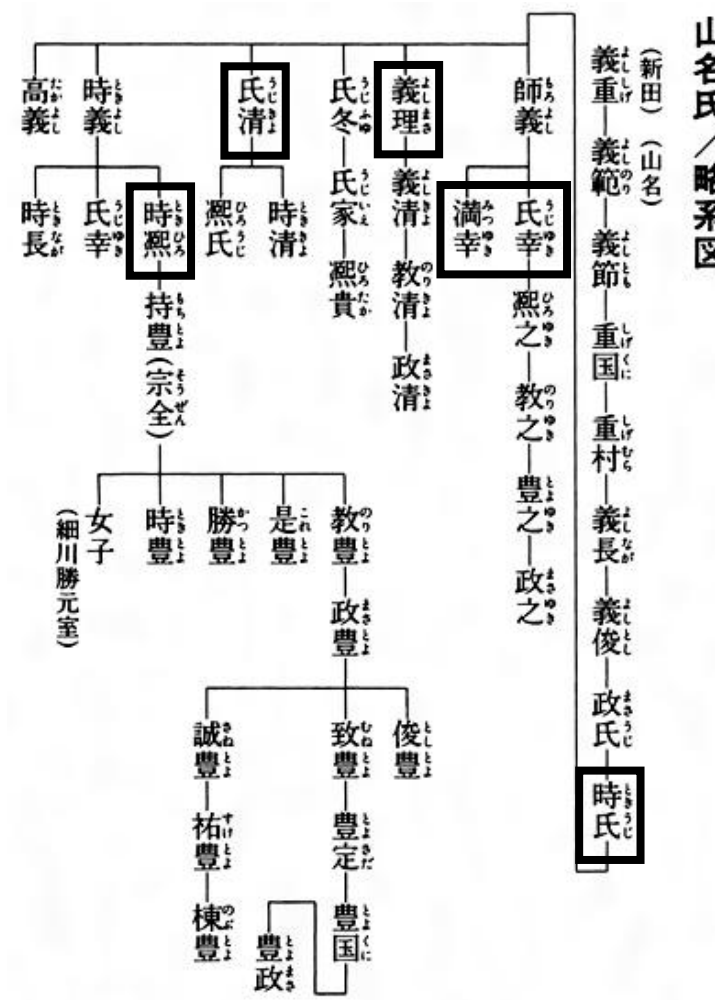
**⑤山名氏清**（一三四四～九一）

父は時氏。氏清は南朝勢力を討った功により、和泉・丹波守護に補され、山名氏の一翼

を担った。応安四年（一三七一）の時氏の没後、山名氏の惣領職は、師義、時義、時熙と継承されたため、満幸の不満が高まった。氏清は満幸を支援し、時熙・氏幸と対立した。大守護勢力削減を意図した三代将軍・足利義満は内紛に介入し、氏清・満幸に時熙・氏幸を討たせた。氏清は丹後守護職に、満幸は伯耆・隠岐の守護職に補されたが、氏清は仙洞料所の押領などで義満に背いた満幸とともに、明徳の乱を起こした。結果、内野の合戦で大内義弘らと戦い、討ち死にした。

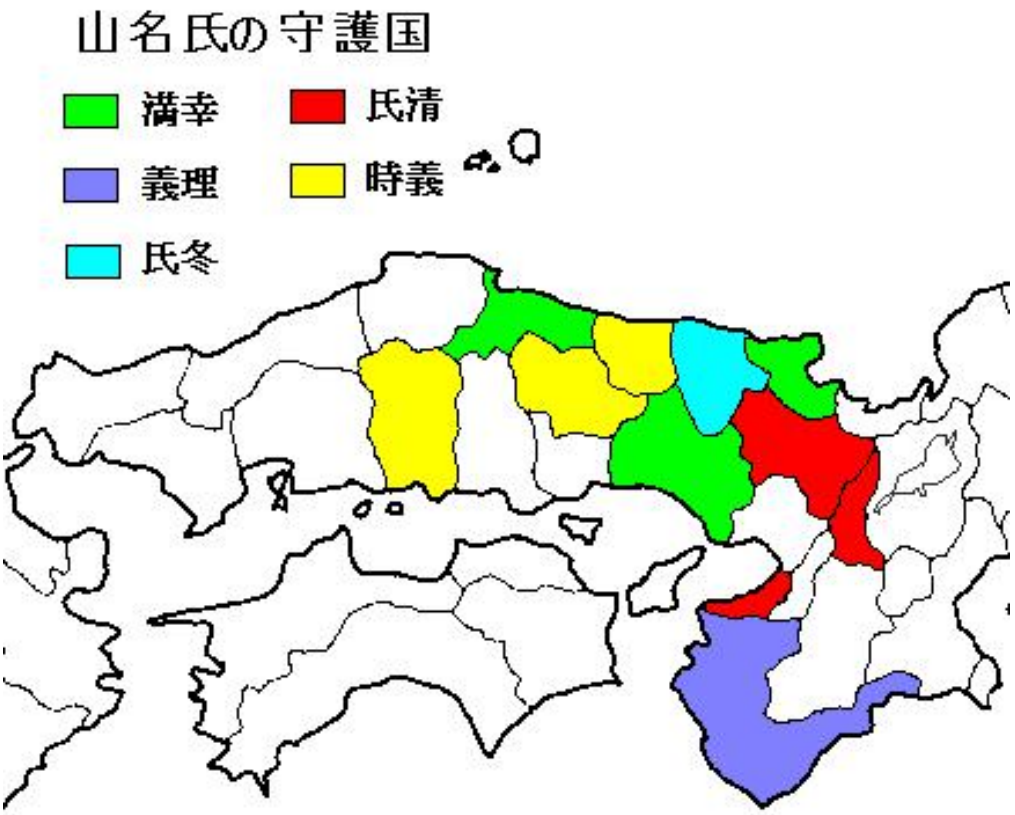
**⑥山名時熙（一三六七～一四三五）**

時義の子。大守護勢力削減を意図していた将軍足利義満は、康応元年（一三八九）の時義没後の惣領職をめぐる山名氏の内紛に介入し、一族の山名氏清・満幸らに時熙を討たせた。しかし満幸は義満の意に反し、明徳二年（一三九一）に氏清とともに明徳の乱を起こして敗れた。乱後、山名氏惣領となった時熙は、但馬守護職を得る。応永の乱で和泉の堺城攻略で功をあげた時熙は、応永八年（一四〇一）に備後守護職に補され、翌年には高野山領同国大田荘を年貢千石で守護請した。時熙は一族の力を背景に将軍に近侍し、幕府内に高い地位を確立した。




## 三　明徳の乱とは？

明徳の乱とは、明徳二年（一三九一）に山名氏清・満幸らが室町幕府に起こした反乱である。山名氏は南北朝時代、一族で十一か国の守護職を保持して勢力を振るい、六分一殿と称された。三代将軍・足利義満は山名氏の威勢を警戒し、機をみてその勢力を削減しようと考えた。応安四年（一三七一）の山名時氏の没後、山名一族分裂の兆しをみた義満は、山名時熙・氏幸が但馬にあって幕命を奉じないのを理由として、山名氏清・満幸に命じてこれを追討させた。しかし、時熙らは義満に取り入って氏清らを讒言し、義満が時熙らを用いて氏清らを抑えようとした。そこで、満幸は氏清を説き、氏清も兄・義理を誘って幕府に反旗を翻し、京都に進出した。




これに対して義満は、大内・畠山・細川ら有力大名に山名氏（満幸・氏清・義理）の追討を命じ、明徳二年十二月に京都内野の戦いで氏清らの軍を破った。この敗戦で氏清は戦死し、満幸は出雲に逃れたが、応永元年（一三九四）に討たれ、義理も敗走後に行方不明になった。この結果、時熙に但馬、氏幸に伯耆の守護職が与えられた。残りの山名氏の旧領は、畠山・大内・一色・赤松諸氏に与えられ、山名氏の勢力は一挙に削減された。

**【丹波守護補任沿革】**

仁木頼章 ←――建武三年十月――康永二年十二月
山名時氏 康永二年十二月――観応二年四月……同年八月
仁木頼章 観応二年八月――文和三年八月……延文四年十月
仁木頼夏 延文四年十月……延文五年三月……同年十月？
仁木義尹 ←――康安元年九月――貞治三年三月
山名時氏 貞治三年三月――応安四年二月
山名氏清 応安四年二月――明徳二年十二月
細川頼元 明徳三年一月――→

## ◎仁木氏が丹波守護時代の史料

〔安國寺文書〕 ○乾 ○丹波

丹州安國寺雜掌申、同國春日部庄內中山村事、訴狀遣之、赤松筑前守(貞範)濫妨云云、早止彼違亂、可沙汰付下地於寺家雜掌之狀如件、

正平六年十一月十日　(義詮)(花押)

仁木兵部大輔(賴章)殿

〔河本文書〕 ○前 ○備

丹波國凶徒對治事、所被仰守護人也、早發向彼在所、可致軍忠之狀如件、

正平七年二月七日　(義詮)(花押)

石原兵衞三郎殿

〔建內文書〕

丹波國波々伯部保雜掌申當保事、申狀具書遣之、次郎左衞門入道永阿、○波々伯部カ、又太郎信盛以下輩押領云々、今月廿日以前可打渡下地於雜掌、若令違犯者、任事書之旨、可致沙汰之狀如件、

文和元年十月六日　(義詮)(花押)

(仁木賴章)守護

〔建內文書〕 四號之一 ○山城

丹波國波々伯部保雜掌申當保事、重申狀具書如此、先度可沙汰付之旨、被成御教書之處、不事行云々、甚無謂、所詮止次郎左衞門入道永阿、又太郎信盛以下輩押領、可打渡下地於雜掌、若猶令違犯者、任被定置之旨、致沙汰、載起請詞可被注申、更不可有緩怠之狀、依仰執達如件、

文和二年三月四日　沙彌(花押)

(仁木賴章)當國守護

## ◎山名氏が丹波守護時代の史料

### 1　丹波国春日部荘

〔安國寺文書〕 ○乾 ○丹波

丹波國春日部庄內中山村事、貞和二年二月廿八日寄附安國寺訖、而赤松筑前入道世貞、帶延文五年三月十四日還補狀之由雖稱之、在陣之時分、未盡沙汰、令參差歟、所詮如元、寺家領掌不可有相違之狀如件、

貞治五年十二月廿二日　(義詮)(花押)

當寺長老

---

丹波國春日部庄內中山村事、任還補御教書、可相渡下地於安國寺雜掌狀如件、

貞治五年十二月廿三日　(義詮)(花押)

山名左京(時氏)大夫入道殿

---

安國寺雜掌申丹波國春日部庄內中山村事、御教書如此、案文遣之、任被仰下之旨、沙汰付下地於雜掌、可執進請取狀、更不可有緩怠儀之狀如件、

貞治六年十月十七日　(山名時氏)沙彌(花押)

小林左近將監殿

〔安國寺文書〕 ○乾 ○丹波

丹波國安國寺雜掌申同國夜久鄕內今西村事、訴狀副具書、如此、子細見狀、荻野出羽(朝時)入道押領云々、事實者太不可然、所詮止彼妨、沙汰付下地於雜掌、全所務、可申左右之由、可令下知守護代給之狀、依仰執達如件、

應安二年十月五日　(後々木氏綱)沙彌(花押)

山名左京(時氏)大夫入道殿

丹波國安國寺雜掌申同國春日部庄內中山村事、訴狀（副具書）、如此、子細見狀、就請文其沙汰訖、所詮赤松筑前（貞範）入道押妨云々、太不可然、不日退彼知行、任還補御教書、沙汰付下地於寺家雜掌、可執進請取狀之由、可令下知守護代給之狀、依仰執達如件、

應安二年十月五日　　沙彌（氏頼）（花押）

山名左京大夫入道殿

---

丹波國安國寺雜掌申當國夜久鄉內今西村事、奉書如此、（案文遣之）、早任被仰下之旨、可沙汰付下地於雜掌之狀如件、

應安二年十一月廿五日　　沙彌（時氏）（花押）

小林左近將監殿

---

丹波國安國寺（本號光福寺）、雜掌申同國夜久鄉內今西村事、訴狀（副具書）、如此、子細見狀、先々被仰訖、所詮退荻野出羽入道常義知行、沙汰付下地於雜掌、全所務、可被申左右、更不可有緩怠之狀、依仰執達如件、

應安三年四月六日　　武藏守（細川頼之）（花押）

山名左京大夫入道殿

---

丹波國安國寺雜掌申同國春日部庄內中山村事、訴狀（副具書）、如此、子細見狀、先々被仰訖、所詮退赤松筑前入道世貞（貞範）知行、任貞治五年十二月廿二日還補御教書、沙汰付下地於雜掌、全所務、且遵行之實否可被申左右、更不可有緩怠狀、依仰執達如件、

應安三年四月六日　　武藏守（花押）

山名左京大夫入道殿

## 〔安国寺文書〕

### 八　室町将軍家御教書

丹波国安国寺雜掌良勝申、同国春日部庄内中山村致半済由事、申状・具書如此、早止其妨、任御寄進状等、可被沙汰付雜掌之状、依仰執達如件、

康暦二年三月廿七日　　左衛門佐（斯波義将）（花押）

山名陸奥守（氏清）殿

### 九　室町将軍家御教書

丹波国安国寺雜掌申、同国春日部庄内中山村致半済由事、重申状・具書如此、先度被仰訖、不日止其妨、沙汰付雜掌、可被執進請取之状、依仰執達如件、

永徳三年五月廿八日　　左衛門佐（斯波義将）（花押）

山名陸奥守（氏清）殿

## 2　丹波国大山荘

〔東寺百合文書〕（り七十一之百十〇山城）

東寺領丹波國大山庄事、退半濟給人、田公、不日沙汰付下地於雜掌、可執進請取之狀如件、

應安二年十一月二日　　沙彌（時氏）（花押）

小林左近將監殿

---

東寺領丹波國大山庄領家職事、任今年十一月二日御書下之旨、退半濟給人、沙汰付一圓寺家雜掌候了、仍渡狀如件、

應安貳年十一月十五日　　沙彌（小林代長縁）（花押）

東寺領丹波國大山庄役夫工米事、可被止其責之狀、依仰執達如件、

康曆二年三月十八日　　左衛門佐（斯波義將）判

山名陸奥守（氏清）殿

東寺雜掌申丹波國大山庄領家職田畠參拾町內五町事、申狀具書如此、地頭中澤田中入道押妨云々、彼五町田地爲卅町內者、可沙汰付雜掌狀、依仰執達如件、

康曆二年十二月廿二日　　左衛門佐（斯波義將）判

山名陸奥守（氏清）殿

中澤五郎左衛門入道宜秀申、丹波國大山庄領家職田地五町致違亂之由事、寺家申狀無跡形次第也、其故者、去自永仁年中地頭領家下地令各別以來、爲地頭領更不相綺之由、可被仰含雜掌哉、

永德元年十月　日

東寺雜掌申丹波國大山庄領家職內田畠伍町事、重申狀具書如此、先度被仰之處、地頭中澤五郎左衛門入道不相綺之由乍出狀、猶以押領云々、不日沙汰付雜掌、可被執進請取之狀、依仰執達如件、

永德二年八月六日　　左衛門佐判

山名陸奥守殿

表書云　山名陸奥守殿左衛門佐義將

第５回
丹波の祇園祭
－篠山市波々伯部神社の祭礼を事例として－

佛教大学教授

八木　透

## はじめに

兵庫県篠山市に鎮座する波々伯部神社は、「丹波の祇園さん」の異名を持つ古社である。波々伯部神社の氏子８カ村が、平安末期の承徳２年(1098)には波々伯部保という京都祇園社の荘園となり、荘園鎮守の守護神として祇園社の祭神が勧請されたと伝えられている。波々伯部神社の夏祭は「丹波の祇園祭」ともいわれ、かつては旧暦6月14日に行われていたが、現在は８月の第１土曜日・日曜日に行われる。８台の山車の巡行と神輿の渡御があり、2台のキウリヤマ（造り山・オヤマ）で演じられる神事は、平成17年に国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択された。

波々伯部神社祇園祭の民俗的特質はいかなる点に求められるのだろうか。この問題を考えてゆくためには、周辺地域の祭礼との比較が不可欠であろう。特に京都の祇園祭や京都府丹波地域、あるいは丹後地域における曳山祭礼と比較することにより、波々伯部神社の祭礼の特質がある程度浮き彫りになってくるものと思われる。

## 波々伯部神社祇園祭の基本構造

波々伯部神社祇園祭は、基本的に、オヤマもしくはキウリヤマと称される造山、その上でデコノボウとよばれる木製の素朴な人形によって演じられる寸劇、8地区の氏子域から出される山車、さらに今日では渡御することはなくなったが、3基の神輿と2本の剣鉾によって構成されている。これらのうち、歴史的に見て祭りの中心を成すのは、何といっても2基のオヤマと3基の神輿ということになろう。この神輿に乗って御旅所まで渡御していたのは、波々伯部神社のかつての祭神である牛頭天王・婆利采女・八王子であり、また元々神輿の先導役として巡行していたのが3基の剣鉾であったであろうことは想像に難くない。この点においては、京都の祇園御霊会の影響を色濃く受けているといえる。もっとも現在では、辻・小中・宮ノ前・畑市・上宿・井之上・北嶋・畑井という氏子８カ村から、ダシ、ヤマあるいはダンジリとも称される山車が出て氏子域を巡行するが、これは近世中期以降に始まった比較的新しい出し物である。なお、この山車をダンジリとよんでいる点には注意する必要があろう。なぜなら、山車のことを山・鉾・屋台などとよぶ例は京都府丹波地域にも多く見られるが、ダンジリと称している例は一例も見られないからである。これは大阪府と兵庫県の祭礼の特色であり、大阪湾沿岸地域から播磨諸地域の影響を受けたものであることはほぼ間違いないだろう。そして何よりもこの祭礼を特徴付ける存在が、2基のキウリヤマで行われるデコノボウによる寸劇である。このような造山は京都の祇園祭をはじめとして、京都府丹波地域や丹後地域には見られないものである。

以上のような波々伯部神社の祭礼の基本構造を念頭におきながら、次に京都の祇園祭と京都府丹波地域、および丹後地域の山車祭礼の特質について見てみよう。

## 京都祇園祭の歴史と山鉾の意味

京都八坂神社の祭礼である祇園祭は、近世までは祇園御霊会と称されていた。御霊会とは、春に桜の花が散り始める頃から初夏にかけて、京の町に疫病を撒きちらす疫神を様々な芸能や歌舞を披露することによって鎮め、外の世界へ送ることを目的として行なわれた祭りであることは周知の通りである。春から夏前の時期に御霊会が行なわれるのは、この頃が一番疫病の流行しやすい季節であったからである。このことは梅雨の集中豪雨による河川の氾濫とも関係がある。河川の氾濫は水害であると同時に、その後には伝染病の流行という二次的な被害をもたらすことは今も知られたことである。ゆえにこのような時期に、災厄や疫病の招来の根源とされている御霊を祀り、京の町の平安を祈願したのである。

祇園御霊会は、平安時代の10世紀末から11世紀はじめ頃に始まったと伝えられている。しかし平安時代には今日のような鉾や山は存在していなかった。その当時あった鉾は、今日の剣鉾のような、人が手で支え持って巡行できるような簡素なものであったと思われる。今日でも京都市内の御霊神社や今宮神社の春祭りでは剣鉾が登場するが、それらの中に祇園祭の鉾の原初形態を見ることができるのである。今日の祇園祭の主役ともいえる大型の鉾や山が登場するのは、南北朝時代から室町時代にかけてのことである。文献上、「鉾」とよばれるものが祇園祭に登場するのは 14 世紀はじめである。それは「風流囃子物」とよばれ、鉦・笛・太鼓などにあわせて踊る一種のにぎやかな歌舞を意味した。それらを経済的に支えたのは、京都下京在住の

富裕な商人たちであった。一方、山は鉾のような武器状のものではなく、趣向を凝らした造り物で、見物客たちの目を引くような見世物の一種であったと考えられる。もっともこれらの鉾や山は、もとは祇園御霊会の神輿渡御に付随した出し物であり、いうならば神輿の先導役というべきパレードであったはずだ。しかし風流の代表ともいえる華やかな山鉾は、やがて神輿以上に見物人たちの注目を集めるようになり、ますます華美になっていった。また本来は厳粛な神事である神輿渡御の先触れとしてのパレードであったものがやがて独立し、いつしか神輿が出なくても鉾や山の巡行だけは行われるという事態になっていったと考えられる。これはいうならば、祇園御霊会における神輿と山鉾の主従関係の逆転を意味した。その背景には、京都下京を中心とした町衆の成長と財力があったことはいうまでもない。祇園社の神事から独立した、町衆中心の山鉾巡行のルーツをここにうかがうことができるのである。

山鉾は、室町時代になると一定の形式を具えるようになってゆく。それは「鉾」・「山」・「傘」・「船」という多彩な形式である。これらの原型は 15 世紀のはじめ頃には完成していたのである。そして山鉾はさらに巨大化し贅をつくした装いを纏いながら発展していった。応仁の乱以前の山鉾を記した史料には、何と 58 基の山鉾の名が記されている。その中のほとんどが「長刀ほこ」や「庭とりほこ」など、今日の山鉾と同じ名称が付けられており、今から約 550 年前にはすでに今日の祇園祭と大して変わらぬ山鉾が都大路を巡行していたことがうかがえる。

## 京都府丹波と丹後地方の山車祭礼

現在、鉾や山などの山車が出る祭りは全国に少なくとも 1500 例は存在するといわれているが、それらは間接的であるにせよ、京都の祇園祭の影響を多少なりとも受けていると考えられる。京都府下でも山車が出る祭りは、亀岡市鍬山神社の祭礼である亀岡祭りを筆頭として、園部町（現南丹市）生身天満宮の祭礼、丹波町（現京丹波町）口八田の葛城神社の祭礼、瑞穂町（現京丹波町）質美の質美八幡宮の祭礼、福知山市牧の一宮神社の祭礼、夜久野町（現福知山市）額田の一宮神社の祭礼、加悦町（現与謝野町）天満神社の加悦谷祭り、宮津市日吉神社の宮津祭り、野田川町（現与謝野町）三河内倭文神社の祭礼、峰山町（現京丹後市）金比羅神社の祭礼、伊根町八坂神社の伊根祭りなどがあげられる。これらの中でもっとも規模が大きく、また曳山祭礼としての形式を整えているのは亀岡祭りであろう。よってここでは、亀岡祭りを中心に他地域の事例も参考にしながら、その概要を報告するとともに、波々伯部神社祇園祭との比較を試みたいと思う。

亀岡祭りは「口丹波の祇園祭」ともよばれる、京都府丹波地域随一の規模を誇る曳山祭礼である。歴史的に見て、亀岡祭りにおいて今日の祭りに繋がるような形式が整えられるのは近世以降のことである。戦国期から続いた戦乱もほぼ治まった 17 世紀末頃には廃れていた祭礼も復興され、神輿の渡御とそれに伴った種々の神幸行列が行われるようになったことが当時の史料からうかがうことができる。その中に「樫船」という船型の山車が登場するが、これなどは京都祇園会の船鉾の影響を直接に受けたものと推測できよう。また 18 世紀末の寛政年間頃の記録には、11 基の「舁山」と「曳山」の名が見えることから、この頃にはすでに風流行列としての形式が整えられつつあったことがわかる。さらに行列を記した記録の中には「傘鉾」・「人形」・「踊り子供」などの記載も見え、当時の賑やかな練り物としての姿が想像できる（『新修亀岡市史』資料編第 5 巻）。

現在でも神幸の行列は、基本的には近世期とあまり変化はなく、10 月 25 日には鉾型と山型のあわせて 11 基の山車が巡行している。このうち鉾型の山車は、近世には「曳山」といわれたものが、後に京都祇園会を真似て長大な鉾柱を立てたもので、中に囃子方が乗っている。また舁山型の山車は、元は床のない屋形で、囃子方が中に入り歩きながら囃子を演奏したものと思われるが、今日では車を付けて曳いている。このような床のない形の屋台は、今日でも京丹波町の質美八幡宮の祭礼の中に見ることができる。このように亀岡祭りにおいては、18 世紀以降京都祇園会の直接の強い影響を受けながら、多様な形式の山車が発達して今日に至っていることがわかる。そしてそれがまた、京都府丹波の北部地域から丹後地域へと伝わっていったものと考えられる。さらに亀岡祭りでは、お囃子も京都の祇園囃子が直接に伝わったといわれることから、ここにも祇園会の大きな影響があったことがうかがえるのである。

## 波々伯部神社の祭礼と他地域との比較

先述したように、京都府丹波地域を代表する亀岡祭りは、京都祇園会の直接の影響を受けながら発展してきた。その結果、曳山においても比較的早い時期から一定の形式を整えつつ今日に至っている。一方、波々伯部神社の祭礼の根幹を成すものは、先述したように 2 基のオヤマ（キウリヤマ）であり、これは京都祇園

会や亀岡祭りには見られない存在である。オヤマは今日でこそ車が付けられて曳山の形をとっているが、その形状から、本来は移動するものではなく、いわゆる置山であったとも考えられるが、史料が残っていないためにその真偽はわからない。もしオヤマが元は置山であり、いつしか車がつけられて曳山化したのだとすれば、その起源は京都祇園会よりも、たとえば姫路の播磨国総社射楯兵主神社で20年に1度行われる三ツ山祭礼に出される造山に求めることも可能であろう。しかし、波々伯部神社の祭礼と播磨地域の祭礼との関わりについては正確なところは不明である。よって波々伯部神社の祭礼の起源を、すぐさま播磨地域の祭礼に求めることには無理があろう。だとすれば、歴史的にある程度頼りとなるのは、やはり波々伯部神社は中世以降、京都の祇園社との繋がりの中で発展してきたという事実である。

ところで、室町期から近世初期にかけて作られた多くの洛中洛外図屏風には、祇園御霊会の神輿や山鉾が描かれている。その中の、特に山の描写の中には、今日の波々伯部神社のオヤマを髣髴とさせる姿が垣間見られる。もっとも京都の祇園御霊会の曳山は、室町期からすでにしっかりとした台車が用いられており、その上に山を築いて人形などの装飾品を飾っているので、波々伯部神社のオヤマとはいささか形状を異にするが、屏風に描かれたイメージから、今日の波々伯部神社のオヤマを想像できなくはない。すると、やはり波々伯部神社のオヤマは、中世以降京都の祇園御霊会の影響の下に発展、継承され、さらに近世から近代にかけての時期に、亀岡祭りやその他の京都府丹波地域の祭礼の影響も受けつつ、今日見られるような8基のヤマが作られるようになったと考えるのが妥当であろう。また波々伯部神社のヤマの中には、船の形を模したヤマも2期存在することから、ここにも京都祇園会や亀岡祭りの少なからぬ影響を見ることができる。なお波々伯部神社のヤマはダンジリとも称されることは先述したが、これは明らかに大阪湾沿岸地域から播磨地域の影響を受けた証だといえるだろう。

なお、波々伯部神社の祭礼と京都府丹波地域との関わりについては、たとえば旧丹波町（現京丹波町）口八田の葛城神社の祭礼に登場する囃子屋台は、大正時代に篠山市から購入したものと伝えている。口八田葛城神社の祭礼調査に携わった田井竜一氏によれば、特に笹尾地区の囃子屋台は、篠山市から買ったと伝えられているという。そういえば口八田の葛城神社の祭礼も波々伯部神社と同様に、元は8月1日に行われる八朔祭りであり、また囃子も祇園囃子と称している（『京都府の民俗芸能』）。実際の屋台を比較してみると、明らかに波々伯部神社のヤマと同系統のものであることがわかる。このように、近年には山車をめぐる京都府丹波と兵庫県丹波両地域間の交流がさらに活発に行われたことがうかがえるのである。

## 大会謡の演目について

最後に、デコノボウによって演じられる大会謡の演目について少し触れておきたい。演目は「愛宕山」・「大木の林」・「高砂」・「道成寺」・「田原藤太」・「春日竜神」・「弓八万」・「氷室」の8種が伝わっているといわれているが、現在、実際に演じられるのは、西の山が愛宕山、東の山が田原藤太と決まっている。このうち「愛宕山」では、愛宕山の高僧が麓の清滝で大蛇と出会い、末の世まで京の都に清らかな水を送り続けることを約束するという内容である。これは修験の山としての愛宕を髣髴とさせる話であり、また清滝が京の都の水源として理解されていたことを示している。愛宕山といえば火伏せの信仰としてよく知られているが、愛宕が火の神として庶民の篤い信仰を集めるようになるのは近世以降のことであり、それ以前の愛宕は修験の行場として、一般庶民からは比較的遠い存在であったと考えられる。このことからも、大会謡で演じられる愛宕山はまさに中世の愛宕のイメージを伝える内容であるといえるだろう。また、実際に清滝を流れる清滝川は桂川を経て淀川へ流れ込み、その水は京の市中へは届かないのだが、大会謡ではあたかも清滝が京の水源地であるかに演じられている。そこには京に住む人々の、愛宕山麓に位置する清滝という集落に対する特別な想いが込められているように感じる。それはすなわち、清滝が京の水を司る象徴的な集落であり、かつ京の町に対して大きな影響を持つ集落としての呪術的なイメージである。このような清滝に対する想いの背景には、京の人々の愛宕山に対する畏敬の念が如実にうかがえるのである。このように、大会謡の演目としての「愛宕山」はきわめて中世的な色彩を帯びた内容を有しており、このことからも、波々伯部神社の祭礼が、京都との強固な繋がりの中で継承されてきたことをうかがい知ることができるのである。

【主要参考文献】

『新修亀岡市史・資料編第4巻』亀岡市 1996年
『新修亀岡市史・資料編第5巻』亀岡市 1998年
『京都府の民俗芸能』京都府教育委員会 2000年
植木行宣『山・鉾・屋台の祭り』白水社 2001年
八木透編『京都の夏祭りと民俗信仰』昭和堂 2002年
八木　透『京のまつりと祈りーみやこの四季をめぐる

民俗』昭和堂 2015 年
八木　透「丹波の祇園祭ー篠山市波々伯部神社の祭礼を事例としてー」
（佛教大学『歴史学部論集』第 7 号）2017 年

【　第５回　八木　透　氏　　資料　】

**写真①**　キウリヤマの組み立て作業

**写真②**　キウリヤマの組み立て作業

**写真③**　宵宮での宮入

**写真④**　宵宮での練りまわし

**写真⑤**　まつりを盛り上げる稚児

**写真⑥**　氏子地域を巡行するヤマ

**写真⑦**　氏子地域を巡行するヤマ

**写真⑧**　曳かれてくるキウリヤマ

**写真⑨**　西の山で演じられる愛宕山

**写真⑩**　西の山で演じられる愛宕山

**写真⑪**　拝殿前に揃った２基のキウリヤマ

**写真⑫**　飾りが取り外されたキウリヤマ

## ３　講師紹介

**福島 克彦 氏**（城郭談話会 会員）

兵庫県生まれ。立命館大学文学部卒業。専門は日本中世都市史、城郭史。丹波地域の戦国史および城と城下町を研究している。著書に『畿内・近国の戦国合戦（戦争の日本史 11)』（吉川弘文館)、『近畿の名城を歩く 大阪・兵庫・和歌山編』『近畿の名城を歩く 滋賀・京都・奈良編』（編纂・吉川弘文館)、『明智光秀：史料で読む戦国史』（編纂・八木書店古書出版部）などがある。

**古野　貢 氏**（武庫川女子大学 准教授）

岡山県生まれ。大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程単位取得。大阪市立大学で博士（文学）取得。専門は中世後期。特に、十五世紀中葉の政治構造の機軸である室町幕府‐守護体制の変質の意義について、有力守護細川氏の権力構造を段階的に考察した研究には定評がある。著書に『中世後期細川氏の権力構造』（吉川弘文館）などがある。

**天野 忠幸 氏**（天理大学 准教授）

兵庫県生まれ。大阪市立大学文学部史学地理学科卒業。大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程修了。博士(文学)。専門は戦国大名の三好氏を中心とした日本中世史。特に、戦国期畿内における武家権力の都市支配の研究において大きな功績がある。著書に『戦国期三好政権の研究』(清文堂出版)、『三好長慶』(宮帯出版社)、『松永久秀』(宮帯出版社)、『荒木村重』(戎光祥出版）などがある。

**渡邊 大門 氏**（株式会社歴史と文化の研究所 代表取締役）

神奈川県生まれ。関西学院大学文学部卒業。佛教大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学)。戦国時代の研究においては、特に赤松氏、山名氏、宇喜多氏を手がけるほか、戦国大名全般にも詳しい。著書に『中世後期山名氏の研究』(日本史史料研究会)、『戦国期赤松氏の研究』、『戦国期浦上氏・宇喜多氏と地域権力』、『戦国・織豊期 赤松氏の権力構造』(以上岩田書院)、など多数。

**八木 透　氏**（佛教大学 教授）

京都府生まれ。同志社大学文学部文科学科卒業、佛教大学大学院修士課程修了、同博士課程単位取得満期退学。同助手、同専任講師、助教授、教授。「婚姻と家族の民俗的構造」で佛教大学文学博士。専門は民俗学。日本民俗学会元理事・京都府、京都市文化財保護審議委員・祇園祭綾傘鉾保存会理事など多数歴任。著書は、『京のまつりと祈り－みやこの四季をめぐる民俗』(昭和堂)、『男と女の民俗誌』(吉川弘文館)、『婚姻と家族の民俗的構造』（吉川弘文館）など、多数。

# 編　集　後　記

平成 30 年度の講座「丹波学」は、132 名の方々に受講いただき開講することができました。受講いただきました皆様には、心よりお礼を申し上げます。

本年度お迎えしました５名の講師先生には、長年の地道な研究の積み上げである貴重な研究成果を、今回の講座「丹波学」のために惜しげもなく提供していただきました。講義は最新研究を交えたわかりやすい内容であり、たくさんの古文書史料はその時代を雄弁に語っておりました。また、作り込まれた資料は自説をしっかりと裏付け、現地での実地調査のスライドの画像は、講義内容にどっしりと説得力を与えていました。受講生の皆様からは、「丹波地域の昔の様子が理解でき、改めて地域への親しみが湧いた」、「丹波が歴史の中心であったことに誇りを感じる」などの意見が寄せられるなど、遺跡や遺物、地名や地形、そして風習や行事などから丹波の先人の活躍の様子を学び、その時代に想いを馳せる良い学びの機会となりました。

講座「丹波学」は、多くの受講生の皆様、講師の先生方に支えられ、育てられて参りました。今後も、受講生の皆様にとって、さらにわかりやすく興味の持てる講座になりますよう企画して参りたいと思います。本講座が皆様にとって、丹波の伝統文化を次代へ受け継ぐ原動力となりますと共に、地域の活性化につながる新たな展開の一助となれば大変嬉しく思います。

最後になりましたが、講師先生におかれましては、講義録の作成にあたり惜しみないご協力をいただきましたこと、心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。

---

平成 30 年度講座「丹波学」講義録

平成 31 年３月発行

発行　（公財）兵庫丹波の森協会
丹波の森公苑　文化振興部

〒６６９－３３０９
丹波市柏原町柏原５６００
TEL　０７９５－７２－５１７０

---